久泉遺跡発掘調査報告 Ⅲ

EXCAVATION REPORT OF THE HISAIZUMI SITE Ⅲ

平成17年度 一般国道359号砺波東バイパス建設工事に先立つ
埋蔵文化財調査報告書

２００７年　３月

富山県　砺波市教育委員会

久泉遺跡発掘調査報告Ⅲ　正誤表

頁	正	誤
目次	40行目･･･青梅市郷土博物館	40行目･･･青海市郷土博物館
365頁	図５…上が南）	図５…上が北）

柳瀬から太田、そして庄川の流れ

奈良・平安時代出土遺物

序

砺波市には、久泉遺跡という大切な遺跡があります。久泉遺跡は、庄川によって形成された扇状地の中央に位置している遺跡です。平成14年の試掘調査までは、古代・中世・近世の散布地として知られるに過ぎませんでした。平成15年度から国道359号バイパス建設に先立ち、本発掘調査を実施してきましたが、その過程で縄文時代中期から後期を中心とする打製石斧が出土したり、平野部で稀有な古代集落跡を検出したり、中世においては徳大寺家領般若野荘と関連する遺構が見つかっており、砺波市の歴史像を構築する上で欠くことのできない資料を供与してきました。

それら素晴らしい先人の足跡を考古学、歴史地理学、理化学など諸分野の手法で詳らかにし、報告書をまとめました。本書が砺波平野の歴史解明の一助となることを願ってやみません。

おわりに、調査の実施および報告書刊行にあたり、地元久泉地区、富山県埋蔵文化財センターをはじめ関係各位に多大なるご援助・ご協力をいただきました。衷心より感謝申し上げます。

平成１９年３月

砺波市教育委員会

教育長　堀田良男

例　言

1．本書は平成17年度に実施した富山県砺波市祖泉・久泉地内に所在する久泉遺跡の発掘調査報告である。

2．調査は、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所の委託を受けて、砺波市教育委員会が実施した。調査は、平成15年から平成17年までの3ヵ年で実施し、平成18年度に整理作業を行った。

発掘調査は、砺波市矢木から久泉にかけての一般国道359号砺波東バイパス建設工事に先立ち、砺波市教育委員会が主体となり、株式会社上智（富山県砺波市千代）に業務委託し実施した。整理作業は、株式会社アーキジオ（富山県高岡市西藤平蔵581）に業務を委託した。

3．調査事務局は砺波市教育委員会内に置き、事務は学芸員野原大輔が担当し、教育次長小幡和日出が総括した。

4．調査に関するすべての資料は砺波市教育委員会で保管している。なお、遺跡の略記号は市名と遺跡名の頭文字（Tonamisi Hisa Izumi）と、平成17年度の調査となることから「ＴＨＩ－１７」とした。

5．調査事務局および調査担当者は以下のとおりである。

調査事務局	砺波市教育委員会		教育次長	小幡 和日出
		生涯学習課	課　長	清澤 康夫
		同	主　幹	鍋田 忠夫（平成18年４月１日から）
		同	係　長	上野　勉（平成18年３月31日まで）
本調査・整理作業担当者		同	学 芸 員	野原 大輔

6．調査期間は、平成17年４月19日～平成17年12月14日、調査面積は4,631㎡である。

7．本書の編集は野原・阿部が行い、執筆および図版作成は野原・阿部が担当し執筆分担は各文末に記した。遺構写真は野原・阿部、遺物写真は野原が撮影した。

8．本書の作成にあたり、金田章裕氏、久保田正寿氏、酒井英男氏、岸田徹氏、久保浩一郎氏から玉稿を賜ることができた。いずれも本遺跡解明の上で欠くことのできない論考であり、衷心より謝意を表したい。

9．遺物撮影では、高岡市教育委員会の撮影スタジオをお借りすることができた。撮影指導をして頂いた栗山雅夫氏に心から謝意を表したい。

10．本書で使用している遺構の略記号は以下のとおりである。ただし、現地調査の遺構検出時点で略記号を付したため、本文中では略記号と遺構の性格がことなる場合があることを断っておく。

掘立柱建物－SB、溝－SD、土坑－SK、ピット－SP、風倒木痕－FB

また、本書で使用している方位は真北で、標高は海抜高である。

11．土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2001年前期版）に準拠している。

12．調査期間や整理作業期間を通じて、下記の方々から多大なるご教示・ご協力を得た。記して衷心より謝意を表する。

伊藤隆三（小矢部市教育委員会），上野幸夫（富山国際職芸学院），牛嶋　茂（奈良文化財研究所），
角張淳一（株式会社アルカ），神嶋利夫（小外水産株式会社），狩野　睦（富山県埋蔵文化財センター），岸田　徹（富山大学），
金田章裕（京都大学），久保田正寿（青梅市郷土博物館），佐伯安一（砺波市文化財保護審議会委員），
酒井重洋（富山県埋蔵文化財センター），酒井英男（富山大学），杉本和樹（西大寺フォト），
鈴木篤英（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター），栗山雅夫（高岡市教育委員会），神保孝造（富山県文化振興財団），
高梨清志（富山県埋蔵文化財センター），外山秀一（皇學館大學），中尾智行（大阪府文化財センター），
西井龍儀（富山考古学会），西本正憲（株式会社アルカ），福沢佳典（富山大学），藤井昭二（藤井環境地質研究所），
麻柄一志（魚津市教育委員会），三辻利一（大谷女子大学），宮田進一（富山県文化振興財団），
宮本長二郎（東北芸術工科大学），山中敏史（奈良文化財研究所），山本正敏（富山県文化振興財団），
横井　誠（石川県埋蔵文化財センター）

以上、五十音順・敬称略

目　次

序　文
例　言
目　次

序　章　調査と経過 ……1

1　調査に至る経緯 ……1
2　既往の調査 ……5

第2章　地理と歴史 ……9

1　地理的環境 ……9
2　歴史的環境 ……12

第3章　調査の方法と成果 ……19

1　調査経過と調査方法 ……19
2　調査日誌抄 ……22
3　基本層序の解説 ……29
4　第1遺構面（中世－近世期） ……33
5　第2遺構面（奈良・平安期） ……39
（1）掘立柱建物
（2）竪穴建物
（3）溝
（4）土坑
（5）ピット
6　第3遺構面（縄文中－後期） ……103
（1）土坑
（2）ピット
7　遺物包含層出土遺物 ……113
（1）縄文時代（縄文土器・打製石斧・磨製石斧）
（2）奈良・平安時代（須恵器・土師器・土製品・鉄製品）
（3）中世・近世（土師器・陶磁器・石製品）

第4章　理化学的分析 ……177

1　自然科学分析　パリノ・サーヴェイ株式会社 ……177
2　久泉遺構出土の種実遺体　中村亮仁（富山県文化振興財団） ……214
3　砺波市久泉遺跡の焼土遺構の考古地磁気による年代測定　酒井英男（富山大学）他……215
4　久泉遺跡の大溝を埋めた堆積物の磁化の研究　酒井英男（富山大学）他……224
5　久泉遺跡の大溝を対象とした地中レーダー探査研究　岸田　徹（富山大学）他……229
6　久泉遺跡出土鉄器類の調査　株式会社日鐵テクノリサーチ ……237
7　栴檀野窯群の須恵器の化学特性と久泉遺跡出土須恵器の産地問題　三辻利一（大谷女子大学）251
8　打製石斧・磨製石斧資料の使用痕分析　株式会社アルカ ……261

第5章　総　　括 ……327

1　打製石斧の石材選択に関する一試論　久保浩一郎（富山市埋蔵文化財センター） …327
2　両極敲打技法の検証と成形意図について　久保田正寿（青海市郷土博物館） ……347
3　久泉遺跡における大溝・建物遺構の性格　金田章裕（京都大学） ……359

報告書抄録

図目次

序　章　調査と経過

図1　高道向島遺跡遺構全体図 ……1
図2　国道359号砺波東バイパス関連の埋蔵文化財調査地……2
図3　久泉遺跡発掘調査地 ……4
図4　打製石斧 ……5
図5　下層遺構全体図（H15調査区） ……5
図6　石組建物（SK166） ……6
図7　方形土坑群 ……6
図8　下層遺構全体図（H16調査区） ……7
図9　上層遺構全体図（H16調査区） ……8

第２章　地理と歴史

図10　久泉遺跡の位置 ……9
図11　砺波平野周辺の地形……10
図12　芹谷野段丘の模式図……10
図13　庄川扇状地を中心とした地形分類図……11
図14　芹谷遺跡の石器……12
図15　福山大提遺跡の石槍……12
図16　厳照寺遺跡の竪穴住居跡と土器……12
図17　松原遺跡の04号竪穴建物……13
図18　松原遺跡出土の縄文土器……13
図19　松原遺跡出土の土製品……13
図20　宮森新北島Ⅰ遺跡の掘立柱建物……14
図21　高沢島Ⅱ遺跡の墨書土器……14
図22　福山窯跡出土品……15
図23　砺波平野東部の遺跡分布図……17

第３章　調査の方法と成果

図24　調査区グリッド……20
図25　久泉遺跡　基本層序……32
図26　第1遺構面　SK159　165……34
図27　第1遺構面出土遺物実測図 ……34
図28　第1遺構面東側調査区　SD……35
図29　第1遺構面西側調査区　SD……37
図30　第２遺構面全体図……41
図31　須恵器・土師器の器種名と各部分名称……43
図32　第2遺構面　SB01……45
図33　第2遺構面　SB01土層図……46
図34　SB01出土遺物実測図 ……47
図35　第2遺構面　SB02……49

図36　SB出土遺物実測図 ……50
図37　第2遺構面　SB02土層図 ……50
図38　第2遺構面　SB03土層図 ……51
図39　第2遺構面　SB03 ……52
図40　SB04出土遺物実測図 ……53
図41　第2遺構面　SB04 ……54
図42　第2遺構面　SB04土層図 ……55
図43　第2遺構面　SB05土層図 ……56
図44　第2遺構面　SB05 ……57
図45　SI97出土遺物実測図 ……58
図46　第2遺構面　SI97 ……58
図47　第2遺構面　SI166 ……60
図48　第2遺構面　SI166土層図 ……61
図49　遺構出土遺物実測図(2)　竪穴建物 ……62
図50　SI167出土遺物実測図 ……63
図51　第2遺構面　SI167 ……63
図52　SI395出土遺物実測図 ……64
図53　第2遺構面　SI395 ……64
図54　第2遺構面　SI491・492・493・494・495平面図 ……65
図55　第2遺構面　SI491 ……67
図56　SI491出土遺物実測図 ……68
図57　第2遺構面　SI492・495 ……70
図58　第2遺構面　SI492・495　土層図 ……71
図59　SI495出土遺物実測図 ……72
図60　遺構出土遺物実測図(3)　竪穴建物 ……73
図61　SI493出土遺物実測図 ……74
図62　第2遺構面　SI493 ……75
図63　第2遺構面　SI494 ……77
図64　SI494出土遺物実測図 ……78
図65　SI550出土遺物実測図 ……79
図66　第2遺構面　SI550 ……80
図67　SI600出土遺物実測図 ……81
図68　第2遺構面　SI600 ……82
図69　第2遺構面　SI620 ……83
図70　SI650出土遺物実測図 ……84
図71　第2遺構面　SI650　SX649 ……85
図72　SI1220出土遺物実測図 ……86
図73　第2遺構面　SI1220 ……87
図74　溝と土手の崩壊の様子 ……88
図75　第2遺構面　SD09　SD430 ……89
図76　SD09出土遺物実測図 ……91
図77　第2遺構面　SD09　土層図 ……92
図78　第2遺構面　SD09　土層図(縦断) ……93

図79　第2遺構面　素掘小溝 ……95
図80　素掘小溝出土遺物実測図……97
図81　旧河道出土遺物実測図……98
図82　土坑出土遺物実測図……99
図83　第2遺構面　SK66・67・241・260・402・424・488……100
図84　第2遺構面　SK489・490 ……101
図85　ピット出土遺物実測図 ……102
図86　第2遺構面　ピット……102
図87　第3遺構面　土坑……105
図88　第3遺構面　土坑　ピット……106
図89　遺物包含層出土遺物実測図(1)　縄文土器 ……115
図90　遺物包含層出土遺物実測図(2)　縄文土器 ……116
図91　遺物包含層出土遺物実測図(3)　縄文土器 ……117
図92　打製石斧の各類型計測部位とその名称 ……119
図93　遺物包含層出土遺物実測図(4)　打製石斧(Ⅰ類) ……123
図94　遺物包含層出土遺物実測図(5)　打製石斧(Ⅰ類) ……124
図95　遺物包含層出土遺物実測図(6)　打製石斧(Ⅰ類) ……125
図96　遺物包含層出土遺物実測図(7)　打製石斧(Ⅰ類) ……126
図97　遺物包含層出土遺物実測図(8)　打製石斧(Ⅰ類・Ⅱa類) ……127
図98　遺物包含層出土遺物実測図(9)　打製石斧(Ⅱa類) ……128
図99　遺物包含層出土遺物実測図(10)　打製石斧(Ⅱa類) ……129
図100　遺物包含層出土遺物実測図(11)　打製石斧(Ⅱb類) ……130
図101　遺物包含層出土遺物実測図(12)　打製石斧(Ⅱb類) ……131
図102　遺物包含層出土遺物実測図(13)　打製石斧(Ⅱb類) ……132
図103　遺物包含層出土遺物実測図(14)　打製石斧(Ⅱb類) ……133
図104　遺物包含層出土遺物実測図(15)　打製石斧(破片) ……134
図105　遺物包含層出土遺物実測図(16)　打製石斧(破片) ……135
図106　遺物包含層出土遺物実測図(17)　打製石斧(破片) ……136
図107　遺物包含層出土遺物実測図(18)　打製石斧(破片)　磨製石斧　石錘　砥石 ……137
図108　石器・縄文土器出土分布図(平成15・16・17) ……139
図109　第3遺構面標高　5層中礫出土状況図……141
図110　石材調査位置図……143
図111　土錘製作想定図……149
図112　遺物包含層出土遺物実測図(19)　須恵器 ……153
図113　遺物包含層出土遺物実測図(20)　須恵器 ……154
図114　遺物包含層出土遺物実測図(21)　須恵器 ……155
図115　遺物包含層出土遺物実測図(22)　土師器 ……156
図116　遺物包含層出土遺物実測図(23)　土師器　珠洲　中世土師器　近世陶器　土錘　鉄製品 ……157

第4章　理化学的分析

1　自然科学分析

図1　A地点模式柱状図及び試料採取位置図 ……177
図2　主要珪藻化石群集の層位分布……186

図3　基本土層の植物珪酸体含量の層位的変化……189
図4　SD09の植物珪酸体含量の層位的変化 ……189
図5　素掘小溝の植物珪酸体含量の層位的変化……189
図6　長方形土坑の植物珪酸体含量の層位的変化……189
図7　基本土層の粒度・土壌理化学組成……194
図8　素掘小溝の粒度・土壌理化学組成……195
図9　粒度分布加積曲線……197

3　砺波市久泉遺跡の焼土遺構の考古地磁気による年代推定

図1　砺波市久泉遺跡の位置と調査地域……215
図2　焼土と酸化鉄層の研究試料を採集した地点……216
図3　試料採取風景と超伝導磁力……216
図4　交流消磁実験の結果を解析するザイダーベルト図……217
図5　地磁気の3成分である偏角、伏角と地磁気強度　地磁気3成分の過去2000年間の変動　地磁気方向(偏角と伏角)の変動 ……218
図6　交流消磁実験後の残留磁化と統計誤差……219
図7　各サイトの平均の磁化方向と、AD700-900年間における北陸地域の地磁気変動……220
図8　交流消磁実験の例……220
図9　2成分の磁化方向 ……221
図10 竈の変形と磁化獲得の様子……221

4　久泉遺跡の大溝を埋めた堆積物の磁化の研究

図1　交流消磁実験の例……224
図2　各サイトの消磁後の磁化方向……224
図3　久泉遺跡の大溝の位置と調査地点……225
図4　各サイトの磁化方向と北陸版の地磁気変動……226
図5　大溝内部での堆積物の堆積過程……227

5　久泉遺跡の大溝を対象とした地中レーダー探査研究

図1　久泉遺跡の位置……229
図2　久泉遺跡で見つかった大溝(SD09)……229
図3　地中レーダーによる探査の概図……230
図4　地中レーダー探査風景……230
図5　GRID1の位置と代表的なGPR ……231
図6　発掘結果および、GRID1と2におけるTime slice図 ……232
図7　GRID7の位置 ……233
図8　Time slice図……234
図9　直交断面に投影したGPR ……233
図10 GRID25-27の位置および代表的な測線(LINE-10)の位置 ……234
図11 GRID27で得られた大規模な溝を示す代表的なGPR……234
図12 GRID25-27のTime slice図……234
図13 探査結果から復元した大溝の流路……235

6　久泉遺跡出土鉄器類の調査

図1　No.1　筒状遺物(SI492)の非金属介在物のEPMA定性分析結果……245
図2　No.2　棒状鉄製品(旧河川跡)の非金属介在物のEPMA定性分析結果……246
図3　No.3　小刀(SI492)の非金属介在物のEPMA定性分析結果……247
図4　No.4　小刀(SI492)の非金属介在物のEPMA定性分析結果……248
図5　No.5　小刀破片(SI492)の非金属介在物のEPMA定性分析結果……249
図6　No.5　小刀破片(SI492)の非金属介在物のEPMA定性分析結果……250

7　栫檀野窯群の須恵器の化学特性と久泉遺跡出土須恵器の産地問題

図1　増山団子地窯跡出土須恵器の両分布図……254
図2　増山外貝喰山釜跡出土須恵器の両分布図……254
図3　福山窯跡出土須恵器の両分布図……255
図4　福山大堤窯跡出土須恵器の両分布図……255
図5　安川天皇窯跡出土須恵器の両分布図……255
図6　増山群と福山群の相互識別(K Ca Rb Sr因子使用)……256
図7　増山群と福山群の相互識別(Ca Fe Sr Na因子使用)……256
図8　小丸山1号窯跡出土須恵器の両分布図……257
図9　小丸山1号窯跡出土須恵器の化学特性(Ca Fe Sr Na因子使用)……257
図10 久泉遺跡出土須恵器(甕類)の両分布図……258
図11 久泉遺跡出土須恵器(甕類)の化学特性(Ca Fe Sr Na因子使用)……258
図12 久泉遺跡出土須恵器(杯蓋)の両分布図……259
図13 久泉遺跡出土須恵器(杯蓋)の化学特性(Ca Fe Sr Na因子使用)……259
図14 久泉遺跡出土須恵器(杯類)の両分布図……260
図15 久泉遺跡出土須恵器(杯類)の化学特性(Ca Fe Sr Na因子使用)……260

8　打製石斧・磨製石斧資料の使用痕分析

図1　平成17年　打製石斧(Ⅰ類)　No.86・166・87の使用痕……280
図2　平成17年　打製石斧(Ⅰ類)　No.82・78・177の使用痕……281
図3　平成17年　打製石斧(Ⅰ類)　No.81・105・171の使用痕……282
図4　平成17年　打製石斧(Ⅰ類)　No.90・88・77の使用痕……283
図5　平成17年　打製石斧(Ⅰ類)　No.83・96・80の使用痕……284
図6　平成17年　打製石斧(Ⅰ類)　No.85・106・101の使用痕……285
図7　平成17年　打製石斧(Ⅱa類)　No.114・113の使用痕……286
図8　平成17年　打製石斧(Ⅱa類)　No.119・121の使用痕……287
図9　平成17年　打製石斧(Ⅱa類)　No.94・100・115の使用痕……288
図10 平成17年　打製石斧(Ⅱa類)　No.33・172の使用痕……289
図11 平成17年　打製石斧(Ⅱb類)　No.140の使用痕……290
図12 平成17年　打製石斧(Ⅱb類)　No.127の使用痕……291
図13 平成17年　打製石斧(Ⅱb類)　No.138・125の使用痕……292
図14 平成17年　打製石斧(Ⅱb類)　No.128・120・142の使用痕……293
図15 平成17年　打製石斧(Ⅱb類)　No.136の使用痕……294
図16 平成17年　打製石斧(Ⅱb類)　No.145・126・123の使用痕……295
図17 平成17年　打製石斧(Ⅱb類)　No.167・146・109の使用痕……296

図18 平成17年　打製石斧(Ⅱb類)　№133・173・137の使用痕……297
図19 平成17年　打製石斧(Ⅰ類)　№102・174・79・97刃部磨耗なし……298
図20 平成17年　打製石斧(Ⅱa類)　№110・108・116・111・112刃部磨耗なし……299
図21 平成17年　打製石斧(Ⅱb類)　№132・143・139・134刃部磨耗なし……300
図22 平成17年　磨製石斧　№180・178の使用痕……301
図23 平成16年　打製石斧(Ⅰ類)　№48・57の使用痕……302
図24 平成16年　打製石斧(Ⅰ類)　№68の使用痕……303
図25 平成16年　打製石斧(Ⅰ類)　№49・50・53の使用痕……304
図26 平成16年　打製石斧(Ⅰ類)　№56・58・61の使用痕……305
図27 平成16年　打製石斧(Ⅱa類)　№71・73・75の使用痕……306
図28 平成16年　打製石斧(Ⅱa類)　№76・78の使用痕……307
図29 平成16年　打製石斧(Ⅱb類)　№81・82・83の使用痕……308
図30 平成16年　打製石斧(Ⅱb類)　№84・86・87の使用痕……309
図31 平成16年　打製石斧(Ⅱb類)　№92・109の使用痕……310
図32 平成16年　打製石斧(Ⅰ類)　№52・60・62・66刃部磨耗なし……311
図33 平成16年　打製石斧(Ⅱa類)　№69・70・74・77刃部磨耗なし……312
図34 平成16年　打製石斧(Ⅱb類)　№96・91・102刃部磨耗なし……313
図35 平成16年　打製石斧(未成品)　№46・47……314
図36 平成15年　打製石斧(Ⅰ類)　№42・48・50の使用痕……315
図37 平成15年　打製石斧(Ⅰ類)　№52・43・53の使用痕……316
図38 平成15年　打製石斧(Ⅱa類)　№59・58・69の使用痕……317
図39 平成15年　打製石斧(Ⅱb類)　№(20)・68の使用痕……318
図40 平成15年　打製石斧(Ⅱb類)　№63・64の使用痕　打製石斧(Ⅰ類)　№44・47刃部磨耗なし……319
図41 平成15年　打製石斧(Ⅱb類)　№56・67の使用痕　打製石斧(Ⅰ類)　№67・69刃部磨耗なし……320
図42 石器の部位と刃部の偏り……321

第5章　総括

1　打製石斧の石材選択に関する一試論

図1　久泉遺跡における各種分析図……333
図2　矢張下島遺跡遺跡における各種分析図……334
図3　東市瀬遺跡における各種分布図……336
図4　チカモリ遺跡における各種分布図……338
図5　鳴鹿手島遺跡における各種分布図……340
図6　常安王神の森遺跡における各種分布図……341

2　両極敲打技法の検証と成形意図について

図1　両極敲打技法のしぐさ……347
図2　非対称の基本パターン……348
図3　№84　両極敲打技法の観察……349
図4　№91　両極敲打技法の観察……350
図5　№92　両極敲打技法の観察……350
図6　№98　両極敲打技法の観察……351
図7　№109　両極敲打技法の観察……351

図8　No.119　両極敲打技法の観察 ……352
図9　No.121　両極敲打技法の観察 ……353
図10　No.127　両極敲打技法の観察……353
図11　No.129　両極敲打技法の観察……354
図12　No.135　両極敲打技法の観察……355
図13　講座参加者が製作した短冊形石斧 ……355

3　久泉遺跡における大溝・建物遺構の性格

図1　久泉遺跡（平成17年度東側調査区第２遺構面）の大溝・建物遺構……359
図2　石粟村・伊加留岐村・井山村現地比定と久泉遺跡大溝の流路……360
図3　溝の模式断面図……363
図4　石粟村・伊加流伎(伊加留岐村)・井山村各図の位置関係模式図 ……364
図5　越中国砺波郡石粟村官施入田地図……365
図6　石粟村・伊加留岐村・井山村比定地付近の景観の概要……366
図7　井山村・伊加留岐村・石粟村の開田状況……367
図8　越中国射水郡鹿田村墾田地図……371

表目次

第２章　地理と歴史

表1　梅檀野窯跡群一覧 ……14

第３章　調査の方法と成果

表2　器種名一覧 ……43
表3　溝(SD)一覧……107
表4　掘立柱建物(SB)一覧……107
表5　掘立柱建物関連遺構一覧……107
表6　竪穴建物(SI)一覧 ……109
表7　竪穴建物(SI)関連土坑・ピット一覧 ……110
表8　土坑・ピット(SK・SP)一覧 ……111
表9　不明遺構(SX)一覧 ……112
表10 打製石斧関連のデータ……138
表11 各地点の石材構成表……143
表12 坏蓋(杯B)の法量分布図 ……144
表13 無台杯(杯A)の法量分布図 ……145
表14 有台杯(杯B)の法量分布図 ……146
表15 土錘長径・最大幅計測図……150
表16 主要遺跡の土師器口径・器高散布図……151
表17 遺物観察表(縄文土器) ……158
表18 遺物観察表(打製石斧・磨製石斧・石錘・砥石) ……161
表19 遺物観察表(土師器・須恵器・珠洲・弥生・中世土師器・近世陶器) ……165
表20 遺物観察表(土錘) ……176
表21 遺物観察表(鉄製品) ……176

第４章　理化学的分析

1　自然科学分析

表1　放射性炭素年代測定結果……183
表2　暦年較正結果……184
表3　珪藻分析結果　珪藻分析結果凡例……187
表4　花粉分析・寄生虫卵分析結果……188
表5　植物珪酸体含量……188
表6　樹種同定結果……191
表7　種実同定結果……193
表8　土壌理化学分析結果(1)……194
表9　土壌理化学分析結果(2)……194
表10 粒度組成……196
表11 粒度組成解析結果……196

3　砺波市久泉遺跡の焼土遺構の考古地磁気による年代推定

表1　久泉遺跡の焼土遺構の交流消磁後の残留磁化……219
表2　久泉遺跡の焼土遺構の考古地磁気年代……219
表3　サイトHS61とHS75の14試料について分離された残留磁化……220

4　久泉遺跡の大溝を埋めた堆積物の磁化の研究

表1　大溝堆積物の各サイトの消磁後の磁化方向と磁化強度……226
表2　大溝堆積物の地磁気推定年代……226

6　久泉遺跡出土鉄器類の調査

表1　調査試料の一覧表……239
表2　黒錆中の微量成分……239
表3　非金属介在物の成分……239

8　打製石斧・磨製石斧資料の使用痕分析

表1　類型毎の磨耗の状態……321
表2　磨耗状況毎の刃部形態……321
表3　類型毎の磨耗状況による刃部形態……321
表4　平成15・16・17年久泉遺跡打製石斧・磨製石斧使用痕観察表……323

第５章　総括

3　久泉遺跡における大溝・建物遺構の性格

表1　『行基年譜』にみえる溝……362
表2　文書にみえる東大寺領荘園の溝と樋……363

図版目次

第４章　理化学的分析

1　自然科学分析

図版1　珪藻化石……207
図版2　花粉分析・寄生虫卵分析プレパラート内の状況写真……208
図版3　植物珪酸体……209
図版4　炭化材(1)　……210
図版5　炭化材(2)　……211
図版6　炭化材(3)　……212
図版7　炭化材(4)・種実遺体　……213

2　久泉遺跡出土の種実遺体

図版1　モモの核……214

6　久泉遺跡出土鉄器類の調査

図版1　No.1　筒状遺物　(SI492)……240
図版2　No.2　棒状鉄製品　(旧河道)　……241
図版3　No.3　小刀　(SI492)……242
図版4　No.4　小刀　(SI492)……243
図版5　No.5　小刀破片　(SI494)……244

写真図版目次

図版1　空中写真　(昭和38年(1963)国土地理院撮影)
図版2　空中写真　(平成13年(2001)国土地理院撮影)
図版3　垂直写真(1)　第2遺構面　第3遺構面
図版4　垂直写真(2)　第2遺構面東側調査区西部分　第3遺構面（礫出土状況）
図版5　第1遺構面　SD147・148・149・150・151・152　SK159
図版6　第2遺構面(1)　西側調査区　東側調査区礫出土状況
図版7　第3遺構面(1)　西側調査区　東側調査区
図版8　市道・排水溝調査区(第2・3遺構面)
図版9　第2遺構面(2)　SB01　SK443・233　SP476・444・436・284・285・483
図版10　第2遺構面(3)　SB02　SP228・428・239・477・237・229・427
図版11　第2遺構面(4)　SB03　SP1218・1211・1208・1216・516・1217・1210・1219・1223・1222
図版12　第2遺構面(5)　SB04　SP388・313・345・433・426・425・293・287
図版13　第2遺構面(6)　SB05　SP560・572・571・599・573・574　SK556
図版14　第2遺構面(7)　SI97
図版15　第2遺構面(8)　SI166
図版16　第2遺構面(9)　SI166　SK277
図版17　第2遺構面(10)　SI166 SK2・P2・P3・P5・P1
図版18　第2遺構面(11)　SI167 SI395

図版19　第2遺構面(12)　SI491・492・493・494・495
図版20　第2遺構面(13)　SI491　カマド
図版21　第2遺構面(14)　SI491
図版22　第2遺構面(15)　SI492　焼土
図版23　第2遺構面(16)　SI492　P5・P1　鉄製品出土状況
図版24　第2遺構面(17)　SI493 SK490・489
図版25　第2遺構面(18)　SI493 SK497
図版26　第2遺構面(19)　SI494
図版27　第2遺構面(20)　SI494　カマド
図版28　第2遺構面(21)　SI494
図版29　第2遺構面(22)　SI550 SP640・641
図版30　第2遺構面(23)　SI600　P1　焼土
図版31　第2遺構面(24)　SI620 SP561・583・579・577
図版32　第2遺構面(25)　SI650　SX649
図版33　第2遺構面(26)　SI1220　SP1221
図版34　第2遺構面(27)　SK66・67・260・402・424・488
図版35　第2遺構面(28)　SD09
図版36　第2遺構面(29)　SD09
図版37　第2遺構面(30)　素掘小溝
図版38　第3遺構面(2)　SK1021・1085・1022・1021・1085・1100　SP1048・1049・1050・1051
図版39　基本層序
図版40　作業風景
図版41　久泉遺跡出土遺物集合写真
図版42　遺構・遺物包含層出土遺物(1)　立面写真
図版43　遺構・遺物包含層出土遺物(2)　立面写真
図版44　遺構・遺物包含層出土遺物(3)　立面写真　第1遺構面
図版45　遺構出土遺物(2)　掘立柱建物　竪穴建物
図版46　遺構出土遺物(3)　竪穴建物
図版47　遺構出土遺物(4)　竪穴建物
図版48　遺構出土遺物(5)　竪穴建物
図版49　遺構出土遺物(6)　竪穴建物　大溝(SD09)　素掘小溝
図版50　遺構出土遺物(7)　旧河道　土坑　ピット
図版51　遺物包含層出土遺物(1)　縄文土器
図版52　遺物包含層出土遺物(2)　縄文土器
図版53　遺物包含層出土遺物(3)　打製石斧(Ⅰ類)
図版54　遺物包含層出土遺物(4)　打製石斧(Ⅰ類)
図版55　遺物包含層出土遺物(5)　打製石斧(Ⅰ類)
図版56　遺物包含層出土遺物(6)　打製石斧(Ⅰ類)
図版57　遺物包含層出土遺物(7)　打製石斧(Ⅰ・Ⅱa類)
図版58　遺物包含層出土遺物(8)　打製石斧(Ⅰ・Ⅱa類)
図版59　遺物包含層出土遺物(9)　打製石斧(Ⅱa類)
図版60　遺物包含層出土遺物(10)　打製石斧(Ⅱa・Ⅱb類)
図版61　遺物包含層出土遺物(11)　打製石斧(Ⅱb類)

図版62　遺物包含層出土遺物(12)　打製石斧(Ⅱb類)
図版63　遺物包含層出土遺物(13)　打製石斧(Ⅱb類)
図版64　遺物包含層出土遺物(14)　打製石斧(Ⅱb類・破片)
図版65　遺物包含層出土遺物(15)　打製石斧(Ⅱb類・破片)
図版66　遺物包含層出土遺物(16)　打製石斧(破片)
図版67　遺物包含層出土遺物(17)　打製石斧(破片)
図版68　遺物包含層出土遺物(18)　打製石斧(破片)　磨製石斧　石錘　砥石　須恵器（蓋）
図版69　遺物包含層出土遺物(19)　須恵器(蓋・杯)
図版70　遺物包含層出土遺物(20)　須恵器(杯)
図版71　遺物包含層出土遺物(21)　須恵器(杯・瓶・蓋・壺)
図版72　遺物包含層出土遺物(22)　須恵器(甕)　土師器(椀・甕)
図版73　遺物包含層出土遺物(23)　土師器(甕・鍋)　土錘
図版74　遺物包含層出土遺物(24)　中世土師器(皿)　珠洲(甕・擂鉢)　近世陶器
図版75　遺構・遺物包含層出土遺物(4)　鉄製品

序　章　調査と経過

1　調査に至る経緯

A　高道向島遺跡の調査

一般国道359号砺波東バイパス建設工事は、平成４年に都市計画が決定され、第1期工区・花園町～矢木区間の工事は平成10年に着手している。

同じ路線内における埋蔵文化財調査としては、久泉遺跡の他に高道向島遺跡の本発掘調査が実施されている。事業実施に際して富山県高岡土木工事事務所および砺波市役所産業建設部土木課より照会を受け、富山県埋蔵文化財センター協力のもと平成8年6月に計画路線内の分布調査を実施、その結果埋蔵文化財包蔵地が確認され保護措置を講じる目的で平成9年3月に試掘調査を実施している。遺構・遺物が良好に検出された範囲を「花総合センター南遺跡」と仮称し、平成10年6月に本発掘調査に着手した。調査に際し、遺跡名に地名を採用し「高道向島遺跡」としている[1)]。

花総合センター南遺跡

高道向島遺跡の調査では、古代、中世、近世の３時期の遺構・遺物を検出している。遺構は中世が主体を占め、掘立柱建物、炭焼窯、墓、溝、柱穴、ピット等がある。遺物は、土師器、須恵器、珠洲、青磁、白磁、鉄製品で構成され、8世紀後半と13世紀前半の2時期に大別される。SK35からは土師器、珠洲甕と伴に刃部長19cmを測る短刀も出土している。古代の内容が貧弱であるため評価は難しいが柱穴を検出していることから、奈良時代における扇状地開発に関連する集落の可能性が高く、それまで芹谷野段丘裾での宮森新北島Ｉ遺跡の奈良時代後半の２×３間の掘立柱建物[2)] に次ぐ成果として注目された。中世においては、平賀家領油田条の南域に位置するが、文献史料の初現となる14世紀後半よりやや古く中世荘園の開発に先行する集落と推察される。

短　刀

宮森新北島Ｉ遺跡

1）砺波市教育委員会　1999『高道向島遺跡』

2）富山県教育委員会　1978『富山県砺波市宮森新北島Ｉ遺跡緊急発掘調査概要』

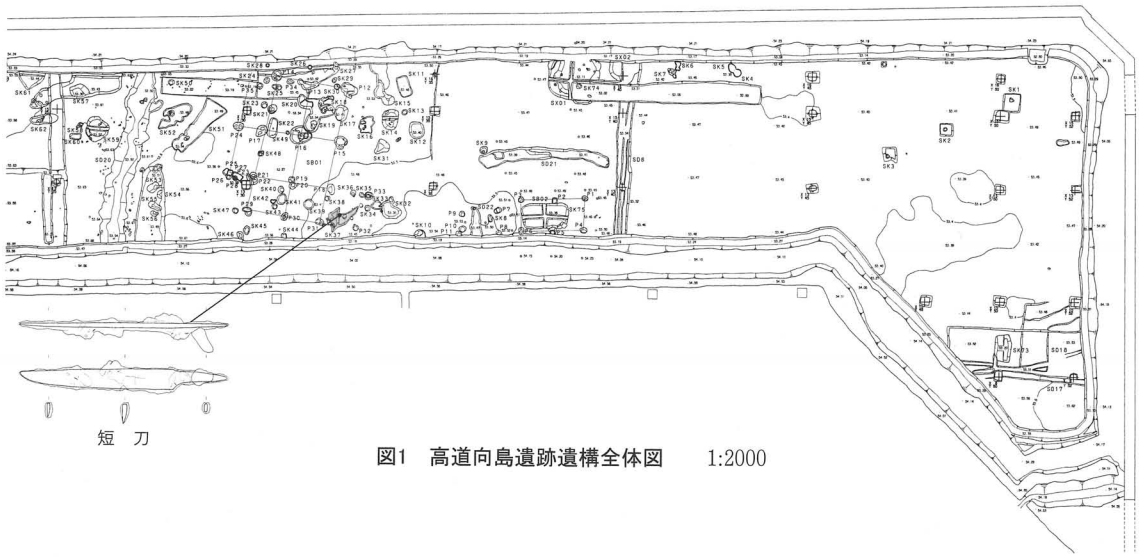


図1　高道向島遺跡遺構全体図　1:2000

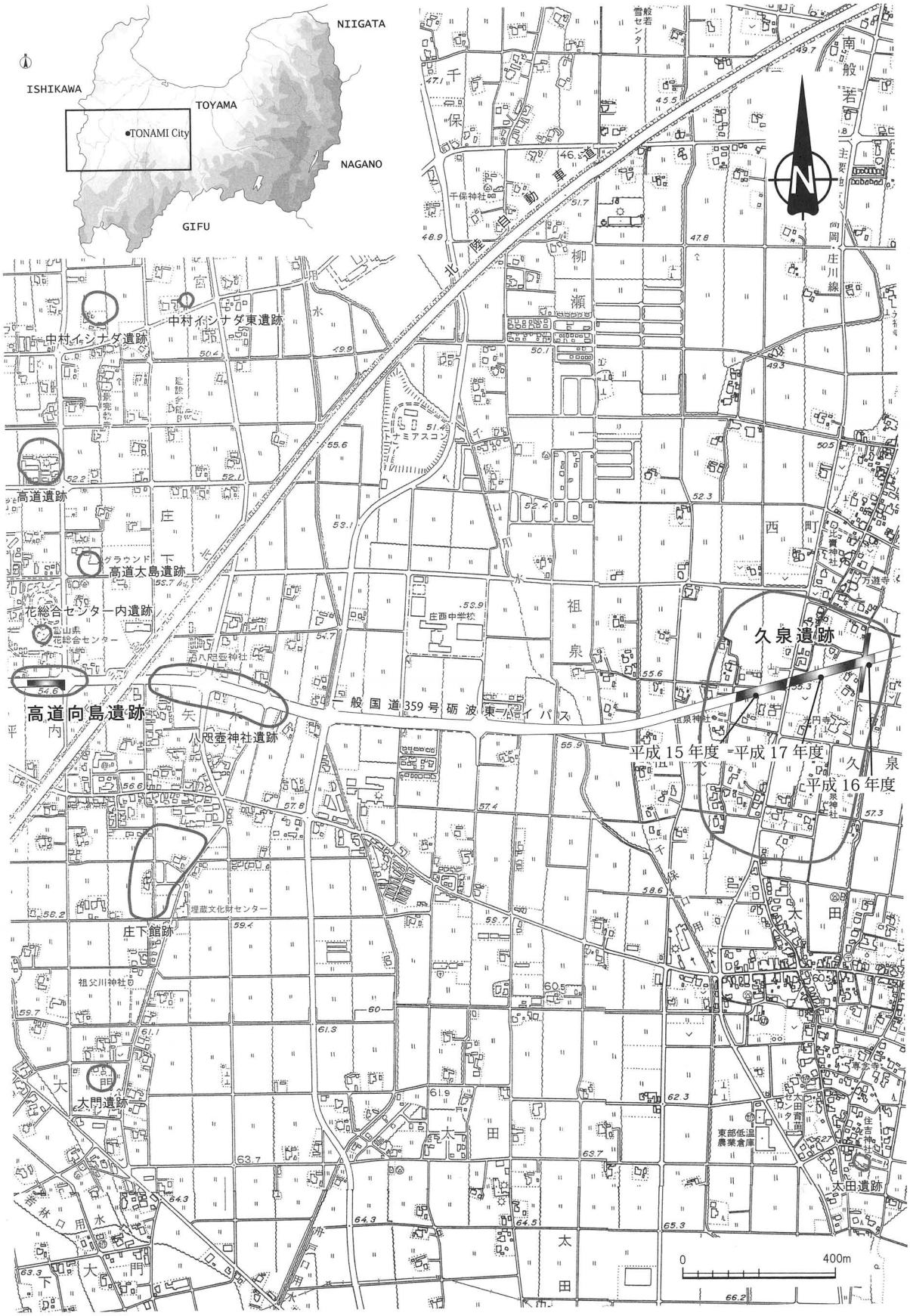


図2　国道359号砺波東バイパス関連の埋蔵文化財調査地　1:15,000

砺波市都市計画（1:10,000）を基に作図

B　久泉遺跡の調査

今回発掘調査を実施した久泉遺跡は、矢木から柳瀬までの路線にあたり第2期工区の範囲にある。

（1）事前協議

平成11年11月、砺波市管内における国道359号の埋蔵文化財対応について、砺波市土木課、砺波市教育委員会生涯学習課、建設省富山工事事務所調査第二課、富山県埋蔵文化財センターの四者で協議し、砺波市庄下・太田・柳瀬地内の分布調査を実施することで合意した。それを受けて同月、分布調査実施内容の詳細について確認している。

（2）分布調査（平成11年度）

調査期間：平成12年（2000）3月21日

調査体制：砺波市教育委員会	生涯学習課	学芸員	利波 匡裕
富山県埋蔵文化財センター	企画調整課	係　長	久々 忠義
		主　任	岡本 淳一郎
		文化財保護主事	高梨 清志
		文化財保護主事	境　洋子

※役職名は当時のもの

事業予定地内における分布調査は、砺波市教育委員会が主体となり、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。調査対象面積は42,500㎡である。調査の結果、久泉遺跡周辺において土師質土器、須恵器、青磁、近世陶磁器あわせて15点が採集された。遺物採集地点は2箇所において集中的に分布している状況であった。また周辺に「カンジャダ」[1]（鍛冶屋田か）という旧地名も残っていることなどから、遺物集中域を含めるようにして遺跡範囲を拡大することとなった。

カンジャダ

（3）試掘調査（平成14年度）

平成14年6月、国土交通省北陸地方整備局富山工事事務所、富山県教育委員会文化財課、市土木課、市教委生涯学習課で四者協議を行い、分布調査で確認された遺跡範囲内における埋蔵文化財の対応について協議した。調査は試掘調査で対応することとし、砺波市教育委員会が主体となって調査することで合意した。平成14年7月、国土交通省と砺波市教育委員会は砺波東バイパス久泉遺跡発掘調査に係る委託契約を締結、同月30日より試掘調査を開始した。

試掘調査の結果、面積18,630㎡のうち約13,000㎡において遺構・遺物が良好に検出され、久泉遺跡の広がりを確認した。このことにより試掘対象記録保存等の保護措置が必要であるという結論に至った。

試掘調査結果を受けて再度四者協議をし、保護措置等が必要な範囲について次年度以降に本発掘調査にて対応することで合意した。7月の試掘調査の結果、周辺には舌状の微高地がいくつ

1）砺波市老人クラブ連合会　1993『砺波市の地名―郷土の字・由来調査報告事業報告書―』。

か存在することが判明し、西端の微高地は調査対象地の西側に続く状況が明らかとなった。そこで市教育委員会が主体となり、祖泉神社西側の施工予定地約4,500㎡を対象として追加の試掘調査を実施することとなった。調査の結果、埋蔵文化財が希薄な地帯であることが判明、保護措置の必要がないと判断した。

太田地区従前図

試掘調査によって久泉遺跡の範囲が明らかになったため、本発掘調査対象域を東西の端とし、太田地区従前図に基づき南北の包蔵地の広がりを推定し、また新たに縄文時代遺物等を検出したことから包蔵地の範囲および内容変更の登録を行った。

（4）本発掘調査

大規模発掘調査

平成15年から平成17年度にかけて国土交通省北陸地方整備局富山河川国道工事事務所と砺波市は委託契約を締結し、本発掘調査を実施することとなった。今回の一連の調査は、市内における初めての大規模発掘調査となった。

調査年次	調査期間	調査面積	主な時代
平成15年度	2003.4.21～2003.9.30	4,100㎡	縄文時代、中世
平成16年度	2004.4.21～2004.9.30	2,932㎡	縄文時代、奈良・平安時代、中世
平成17年度	2005.4.19～2005.12.14	4,631㎡	縄文時代、奈良・平安時代、中世
	計	11,663㎡	

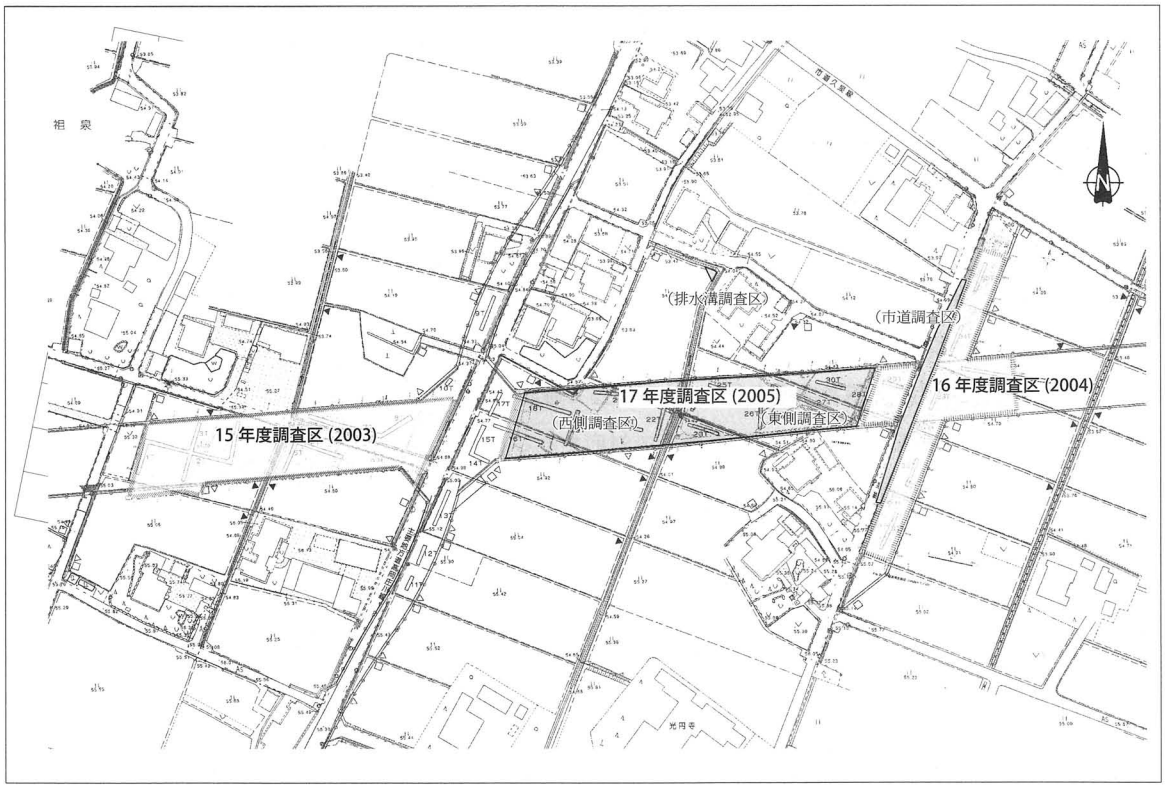


図3　久泉遺跡発掘調査地　1:3,000

2　既往の調査

A　平成15年度の調査

遺跡の西側に位置し、上下２つの遺構面を確認している。時期は縄文時代と中世の２時期あるが、本来上層遺構面で検出すべき中世遺構を下層で認識した場合もあるため、厳密に「上・下遺構面＝時期差」と区別することは難しい。以下、各時期の成果についてまとめたい。

縄文時代　下層遺構面で確認できたが、実際に遺物を伴う遺構は少ない。遺構は、土坑・ピットのみで構成され、土坑には直径60cm、内部径75cm、深さ45cmの袋状土坑（SK61）をはじめ、直径約20～30cm、深さ20cm前後のピットを多数検出している。遺物は縄文土器、打製石斧の２種のみで遺構と同じく多様ではない。土器は細片に限られ、その量は整理箱１箱にも満たない。土器型式は、中期中葉から後葉の上山田式・天神山式・串田新Ⅰ式・串田新Ⅱ式、後期前葉の岩峅野式・気屋式、後期後葉の八日市新保式の各型式が主体を占める。少量ではあるが、中期前葉、後期中葉に属する土器も認められた。

袋状土坑

土器型式

打製石斧は52点出土し、短冊形・撥形の各形式が見られる。石器組成が打製石斧だけで構成されるのは縄文遺跡にあって特異である。大半が片面に自然礫面を残し、両面加工はわずかしかない。また、欠損品も含まれるが完形品の比率が半数を超える。石器製作に伴う剥片・母岩等が出土せず、製作址・石器保管地よりも使用・廃棄の場という側面が強いと理解された。空想の域を出ないが、小規模ピット群は、植物質食糧獲得のため打製石斧により形成されたと想定している。

打製石斧

使用・廃棄の場

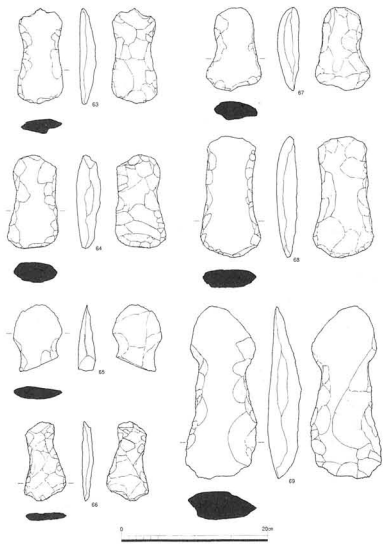


図4　打製石斧

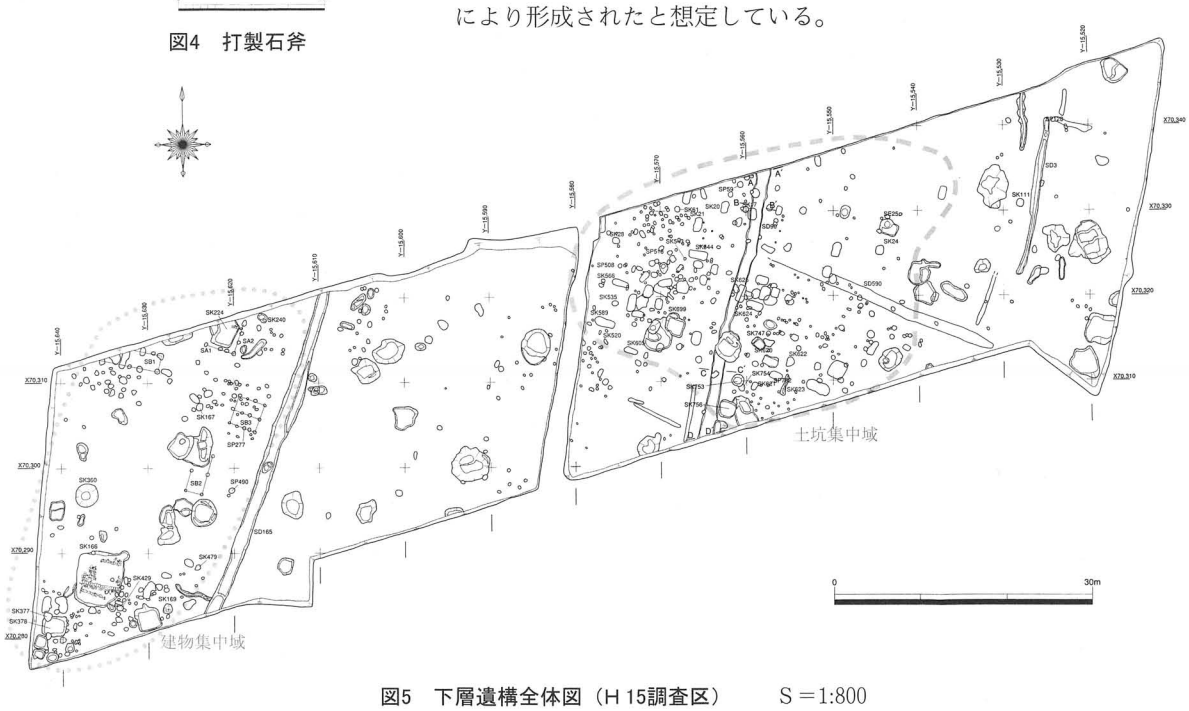


図5　下層遺構全体図（Ｈ15調査区）　　Ｓ＝1:800

中　　世　調査区全体で上下遺構面から確認できたが、西側は石組建物（土台建物）・掘立柱建物・土坑（井戸）が集中し、東側は墓と考えられる土坑が密集している状況にあった。

石組建物　石組建物（SK166）は、南北6.4m×東西5.4m、面積約34.5㎡を測る。北西隅は破壊されていたが、他は遺存状態は良好である。検出面から約20cm掘り込み、川原石をコの字形に規則的に配置し、南に石列を構築し小石で連接している。床面からピットを検出したが関連するか判然としなかった。機能は限定できず、石列に根太を据え上屋を構築する「土台建物」に似るが石列上面の高低差があるため確定できない。平面形状から建物と思われる。13世紀後半の青磁が出土しているが、周辺状況を勘案し14世紀の年代を与えた。

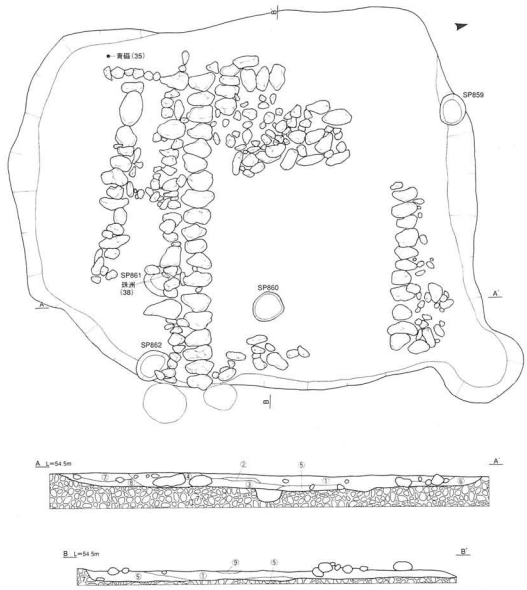


図6　石組建物（ＳＫ166）　S＝1:100

方形土坑群　方形土坑群は約20基あり、南北・東西に長軸を持つ。貨銭・中世土師器が出土するため土坑墓と脂肪酸分析を行ったが芳しい結果は得られなかった。炭素年代では11世紀後半～12世紀、遺物年代では12世紀後半から14世紀に帰属する。

脂肪酸分析

平行する溝　また、約50mの間隔で幅1.5m前後の溝2本が平行して磁北から13～19度東に振った方向に直線的に走行している。12世紀後半から14世紀の遺物を含む。

遺物は土師器、珠洲、瀬戸、青磁、宋銭、八尾で構成される。中世土師器はすべて非ロクロ成形の皿で、12世紀後半から13世紀前半、14世紀、15世紀の3時期ある。14世紀は底部内外面に強い指頭圧痕があるのが特徴であり、手づくね技法に近い方法で製作されたと考えられる。県内で類例が認め難く、砺波平野東部で生産された地域色の強い土師器として注目される。

指頭圧痕

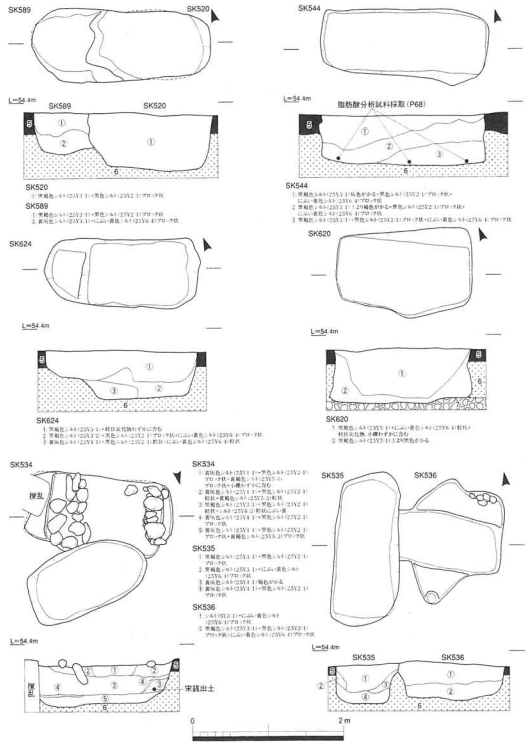


図7　方形土坑群　S＝1:100

中世は徳大寺家領般若野荘の時代であり、遺構・遺物とも15世紀を境に希薄化するのは、下地中分後に領家方が知行分を縮小し地頭方が勢力拡大する動きと時期的に符合するため、何らかの情勢が影響していると推察される。

下地中分

B　平成16年度の調査

検出された遺構は、掘立柱建物、土坑、溝、ピットと構成する種類は少ない。前年度調査と同じく上下２層の遺構面を認識でき、年代を特定する材料が少ないが上層は古代～中世に属すると考えられる。中央に２間×３間の掘立柱建物、そして調査区を北西方向に縦断して大規模な溝が走る。下層遺構は、縄文期の遺物包含層下面で確認されたが、打製石斧をはじめ遺物の大半が包含層中位レベルで検出され、地山との層界に漸移層の発達が認められるため、縄文期の旧地表面（生活面）は検出面より上位にあると推測できる。

縄文時代　前年度同様、打製石斧が散在し73点を数えた。新知見としては、打製石斧の遺構内出土、打製石斧未成品と思しき遺物の検出、磨製石斧の出土、土器が集中する範囲があったこと等が挙げられる。

SP265底から別個体の欠損打製石斧2点が検出された。2個体が重なるので意図的に埋納されたか、廃棄、混入のいずれの可能性もある。伴出土器はない。

遺物包含層中に礫（川原石）が集中する範囲があり、打製石斧と土器が検出された。気屋式土器がまとまって出土する範囲がある。礫破片が数点出土しており、SP417から被熱した破砕片がまとまって検出された。「打製石斧未成品」と報告した個体が出土したことから打製石斧製作址の可能性も考えられたが、母岩や粉砕跡、大型剥片や未成品の大量出土がないので断定できない。

土器量は前年より格段に増えたが、縄文遺跡としては少ない。土器型式は、古府式（中期中葉後半）、串田新Ⅱ式（中期後葉）、気屋式（後期前葉）の諸型式がある。気屋式や串田新Ⅱ式のまとまった破片、そして無紋の粗製土器の大型破片がある。

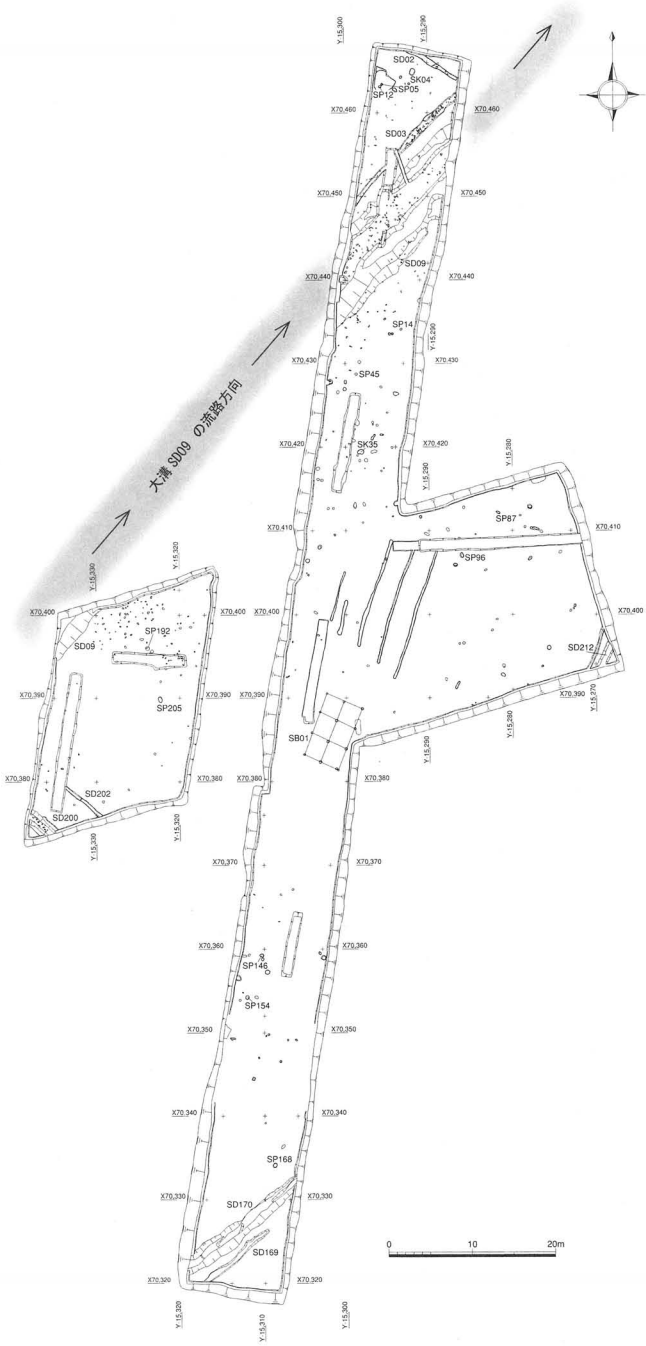
石器組成に磨製石斧が加わり、焼土や炭化物を多含する土坑も検出されたが、一般的な縄文集落とは異なり、竪穴住居等の居住施設はなく、打製石斧が主体的に出土するという傾向を追認した。

図8　下層遺構全体図（Ｈ16調査区）　Ｓ＝1:800

古代・中世　検出された遺構は、掘立柱建物、土坑、溝、ピットと構成する種類は少ない。遺物は遺構内出土のものに限られる。遺物包含層は削平された可能性が高く、旧地表面は検出面より上位に存在したため深度のある遺構のみ検出したものと考えられる。掘立柱建物は1棟だけ検出しており、桁行３間・梁間２間の総柱建物で伴出遺物がないため年代特定は難しいが柱穴規模や平面プランから中世に属すると考えられる。古代・中世期の遺構で注目されるのは、調査区を北西方向に縦断する大溝・SD09とその北側に平行するSD03である。SD09は最大幅12.5m、深さ1.75mを測る規模の溝であり、試掘調査段階では旧河道として扱っていた。しかし、遺跡内でも比較的高い場所を走っている点や数度の埋没と再掘削の痕跡が堆積状況から認定可能であったこと、地山である扇状地形成砂礫層を掘り抜いている状況等を総合的に判断し、人工的に造成された溝と断定した。

覆土に遺物を含むが混入の可能性もあるため、遺構の開削年代を特定できない。遺物は8世紀後半の須恵器から14世紀前半の土師器の年代幅がある。最終堆積層から12世紀後半から13世紀初頭の同安窯産の青磁碗が出土している。

SD09は磁北から約45度東に振って配置されている。並走するSD03の存在からも計画性をもつことが推察できる。下流方向には東大寺領荘園やその荘村である伊加留伎村の比定地があることから、それら荘園と何らかの関係を持つものであれば古代における扇状地開発史に一石を投じるものと評価できる。



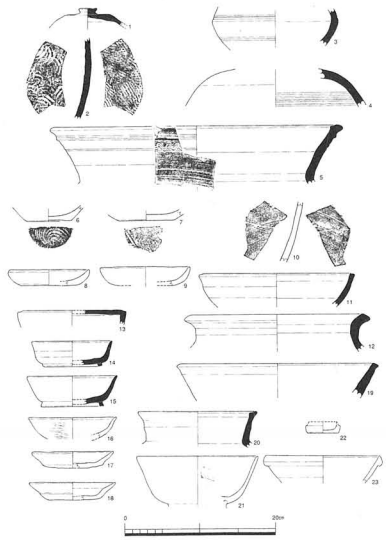


図9　上層遺構全体図（Ｈ16調査区）　　Ｓ＝1:800

第２章　地理と歴史

1　地理的環境

久泉遺跡の所在する砺波市は、富山県の西部中央にある。面積は126.96ｋ㎡、人口49,237人（平成19年2月末現在）であり、東経136度54分～137度04分、北緯36度33分～36度41分に位置している。

地形三態

砺波市は、地形的に３つに大別できる。(1) 庄川の堆積作用によって形成された砺波平野（庄川扇状地）、(2) 平野と山地の間に南北に細長く存在する河岸段丘・芹谷野段丘と庄川左岸段丘、(3) 東部に射水丘陵から続く丘陵性の庄東山地で構成される。

砺波平野

庄川扇状地

砺波平野は、その大部分が東部を北流する庄川により形成された扇状地である。庄川扇状地は県内の三大扇状地（庄川・神通川・常願寺川）に数えられ、そのなかでも最大の規模を誇る。扇頂部である庄川町青島から扇端部である高岡市南部の湧水帯までの距離は13～15km、面積は146ｋ㎡に及ぶ。源を岐阜県荘川村に発し、高岡市を経由して日本海に注ぐ。流路延長115km、流域面積1180k㎡、平均河床勾配1/120～1/800の規模をもつ 。庄川扇状地の勢いに押されるようにして小矢部川は平野西端部を流れ、庄川の排水河川の役目を果たしている。庄川扇状地には、地理学上著名な散村（Dispersed Settlement）が広がっており、点在する孤立荘宅とそれを囲む耕地が調和し、長閑な田園空間を形成している。

庄川の東遷

庄川は現在扇状地東部を北流しているが、かつて西にあった流れが時代とともに東に移動してきたという、いわゆる「庄川の東遷」説がある。もっとも古い主流と考えられるのは野尻川で、中村川、新又川と移り、天正13年（1585）の大洪水で千保川・中田川（庄川）に移り、寛永7年（1630）の洪水で現在の流れとなったとみるのが定説化している。

庄川の右岸には台地がひろがり、河川作用によって形成された河成（河岸）段丘が存在して

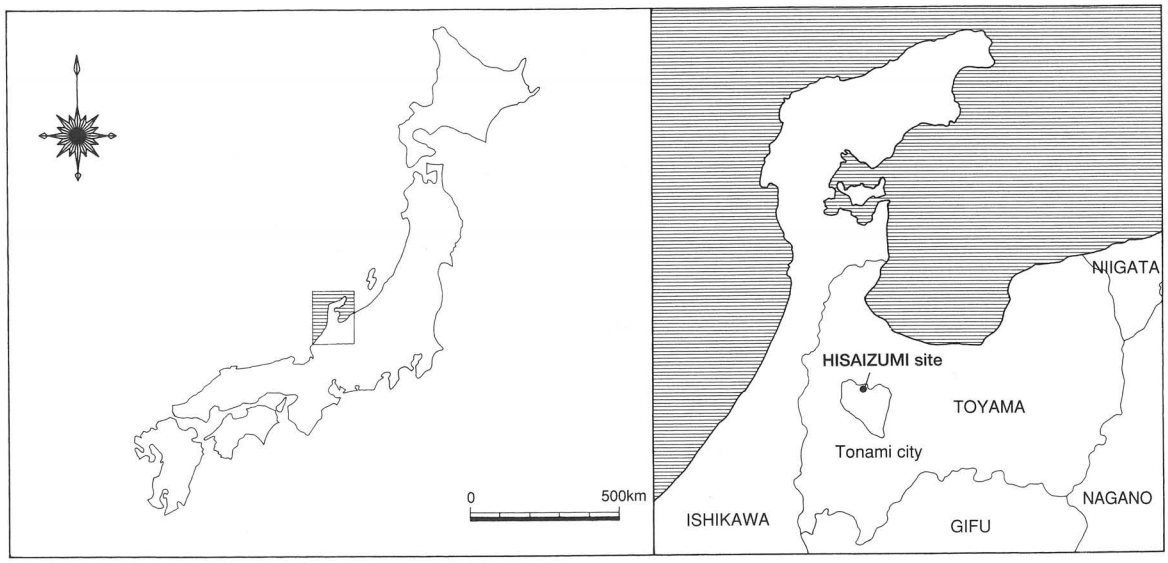
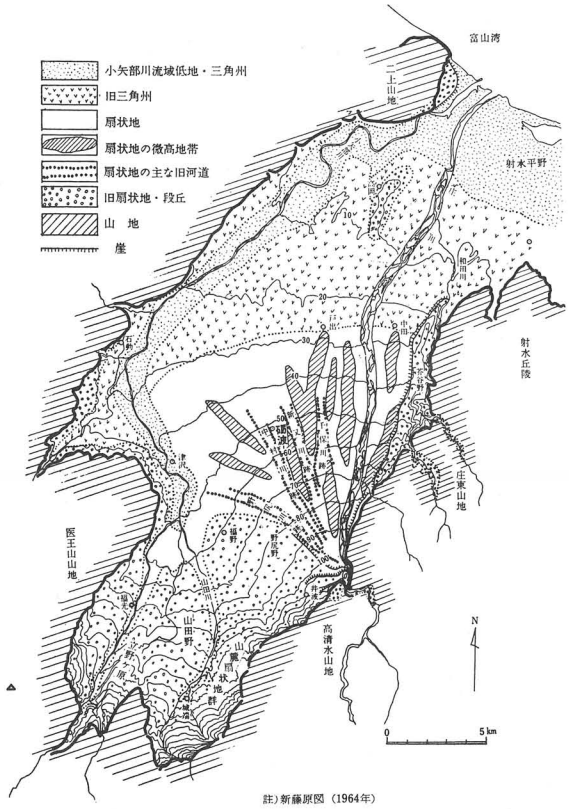


図10　久泉遺跡の位置

いる。それらは低位段丘、中位段丘、高位段丘として分類することができる。庄川町庄から宮森までには低位段丘が存在しており、隆起扇状地堆積物が形成されている。頼成・権正寺・東保では、庄川右岸に沿う帯状の自然堤防の微高地上に集落が発達している。

芹谷野段丘　高位段丘にあたる芹谷野段丘（福岡段丘）は、旧扇状地の右扇の一部が残存し段丘となったものである。南は安川付近から北は大門町串田付近まで約10kmに広がり、福岡周辺では海抜80m、段丘崖約30mを測る。段丘南部の福山の山麓丘陵地はこの段丘地形面と同時期もしくは前後に形成された扇状地性の堆積層である。寛文3年（1663）に庄川から芹谷野用水が引かれ、段丘上に集落が展開した。



註）新藤原図（1964年）

図11　砺波平野周辺の地形

和田川流域段丘帯　芹谷野の旧扇状地の東側と庄東山地の縫合部の凹地に和田川が発達し、両岸を侵食して低い段丘帯を形成しており、和田川流域段丘帯と呼ばれる。和田川は、牛岳の北西側山中に源を発し、庄東山地と芹谷野段丘の間を大きく蛇行し、池原付近で坪野川が合流する。流路延長23.5km、庄川の支流である。昭和43年、和田川総合開発事業により和田川ダムが竣工、川が堰き止められて増山湖ができた。

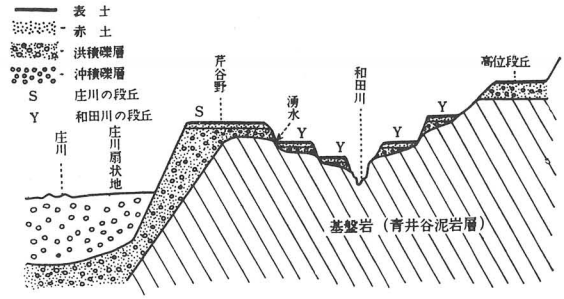


図12　芹谷野段丘の模式図
（砺波市史1984より転載）

庄東山地　牛嶽山麓以北の丘陵性の山々は、富山県を東西に分断する射水丘陵帯の一枝群を成し、一般に庄東山地と呼ばれる。概して谷内川・和田川の流域に含まれる地域をさす。この山地は起伏量が少ない丘陵性小起伏山地であり、地質的には青井谷シルト質泥岩層が基盤となる。この山地の西北に位置する天狗山（標高192m）の北斜面、県民公園頼成の森の緩斜面丘陵は、南側山地からのかつての扇状地性堆積層で構成されている。表層地質としては、砂岩を主体とする下部と無層理青灰色泥岩を主体とする上部から成る。

マッド(Mad)　扇状地上には微高地が島状に点在し、その間を縫うように旧河道が蛇行する。そこにはマッドという植土や壌土が分布し、黒土層の堆積がみられる。黒土層は、①黒ボク層で自然堤防・中州状微高地から縁辺部に分布するもの、②湿地帯で生成される有機質層、③埋没微高地から縁辺部で生成された黒土層で、畠地土壌化・水田土壌化したもの、の３種に分類される。(野原)

1）砺波市老人ｸﾗﾌﾞ連合会　1993『砺波市の地名―郷土の字・由来調査報告事業報告書―』。

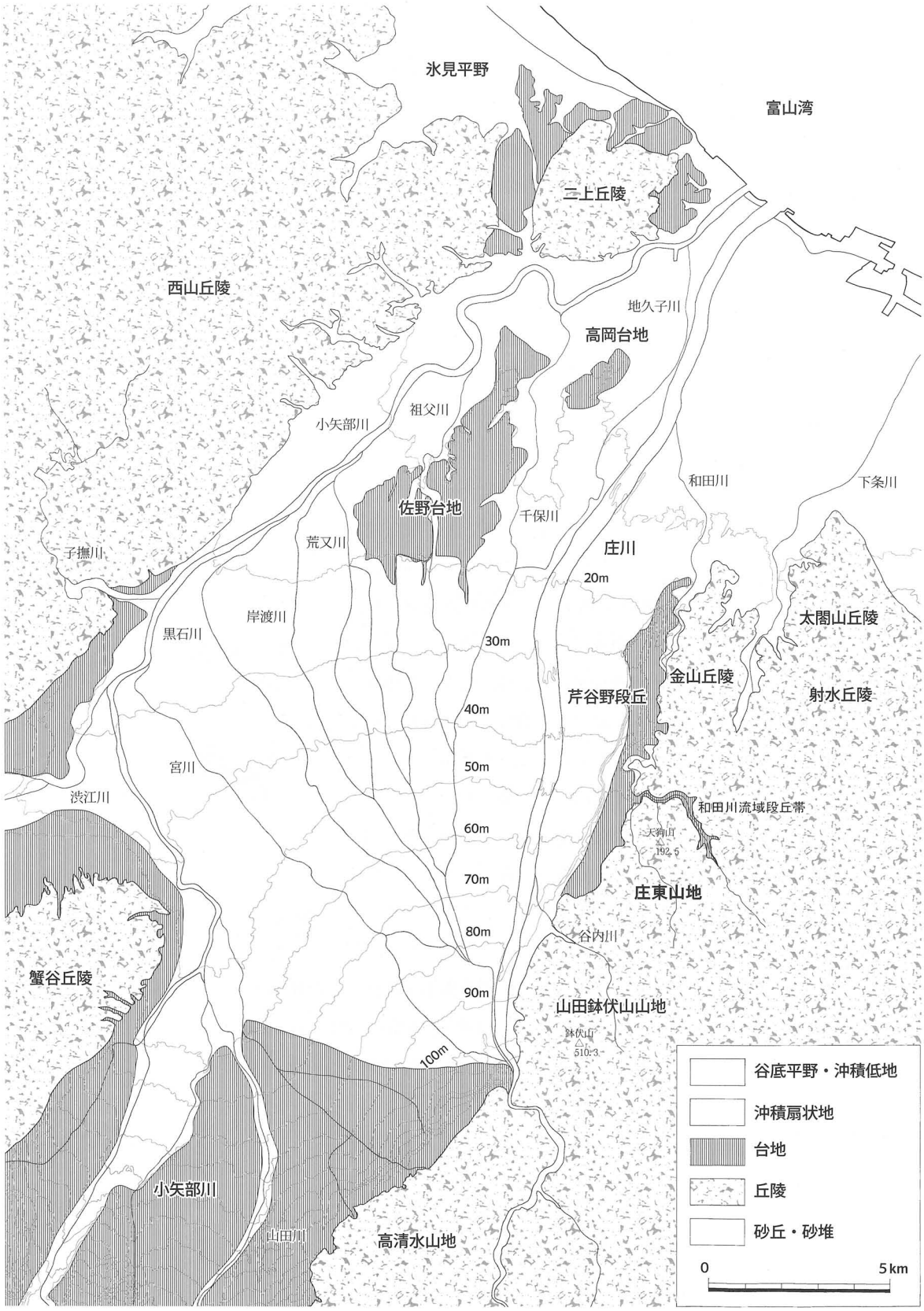


図13　庄川扇状地を中心とした地形分類図　　1:150,000

2　歴史的環境

本遺跡を理解するために市内の歴史的環境について概観する。

旧石器時代　旧石器時代の遺跡は庄川右岸の庄東山地や芹谷野段丘に分布し、庄東山地の芹谷遺跡・池原遺跡・増山外貝喰山遺跡・頼成Ｄ遺跡、芹谷野段丘の高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡などがある。旧石器が注意されたのは、昭和48年頃の芹谷遺跡が初めてであり、住蔵久雄氏の業績による。氏の発見以来、これまで100点以上の石器が表面採集された。それらは「立野ヶ原型ナイフ形石器」と呼ばれる鉄石英・玉髄でできた小形剥片と、濃飛流紋岩類・溶結凝灰岩によるナイフ形石器や彫器で構成され、AT降灰期に相当する。

立野ヶ原型ナイフ形石器

縄文時代　芹谷野段丘以東を中心として縄文遺跡が濃密に分布する。高位段丘である芹谷野段丘では、上和田遺跡、厳照寺遺跡、宮森新天池遺跡、宮森新北島Ⅰ遺跡、頼成新遺跡、三合遺跡があり、中位段丘の和田川流域段丘帯には、高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡、増山遺跡などがある。福山大堤遺跡で表採された石槍は、濃飛流紋岩類の半月形石槍で草創期に属する。

草創期

前期　前期は宮森新北島Ⅰ遺跡、増山遺跡でわずかに出土例があるが、県内の遺跡動態と同じく中期段階で遺跡数が増加する。芹谷野段丘縁辺の厳照寺遺跡は、松原遺跡と並び市内の縄文遺跡として最も著名である。名越仁風氏ら地元研究家や富山考古学会の働きかけで周知されるようになり、栴檀野地区圃場整備事業に先立ち昭和50・51年に試掘調査、昭和51年に富山県埋蔵文化財センターによって本調査が実施された。出土土器群は、「厳照寺Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式」として中期前葉の標式であったが、現在は新保・新崎式に包括され扱われている。遺構

中期

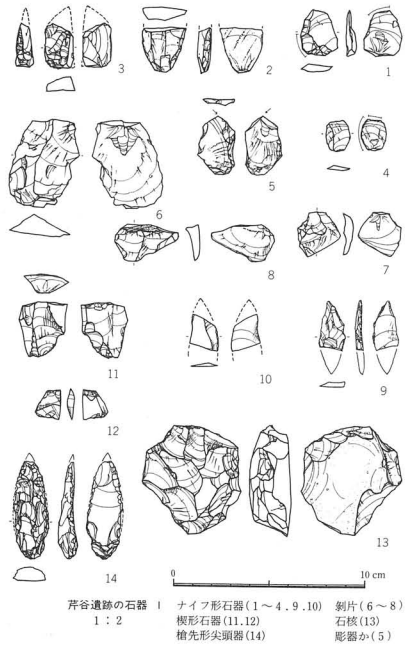


図14　芹谷遺跡の石器　S＝1:4
（砺波市史1984より転載）

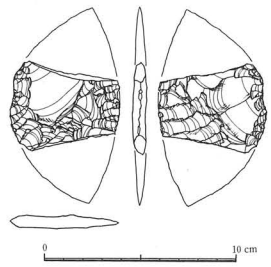


図15　福山大堤遺跡の石槍　S＝1:4
（砺波市史1984より転載）

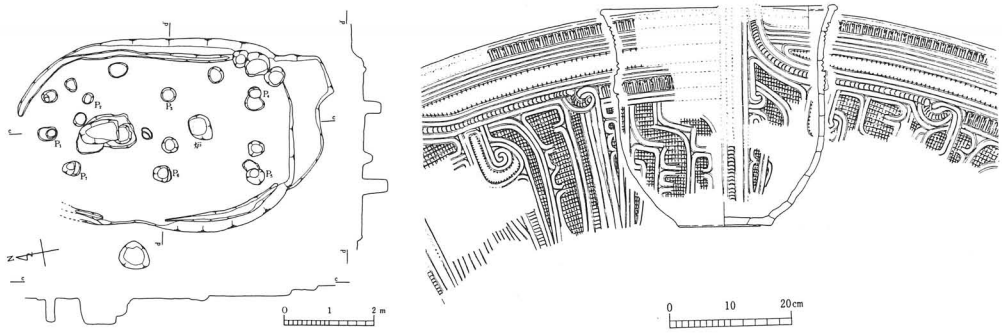


図16　厳照寺遺跡の竪穴住居跡と土器　（左図）S＝1:160，（右図）S＝1:12
（砺波市史1984より転載）

では、竪穴建物跡11棟・埋甕1箇所・穴などが検出され、典型的な弧状集落であることが判明した[1]。近接する宮森新北島Ⅰ遺跡では、厳照寺Ⅰ式土器群と中期の竪穴建物跡1棟を確認している[2]。

低地では平野東部の低位段丘上に宮森（みやもり）遺跡、徳万（とくまん）遺跡、東保石坂（ひがしほいしざか）遺跡、東保（ひがしほ）遺跡（東保高池（ひがしほたかいけ）遺跡）など芹谷野段丘を抉る谷口付近に存在する。扇状地扇央部で唯一発見された久泉遺跡は打製石斧を主体的に出土する遺跡である。低地における集落は未発見であり、縄文期の遺跡動態を把握できていない。

扇状地扇頂部には中期前葉から中葉の大規模集落、松原遺跡がある。庄川左岸の最下位段丘上にあり、遺物・遺構の質・量ともに豊富である。竪穴建物は、方形石組炉を伴う建物や長軸11mを測る大型建物（04号）など10数棟が検出されている[3]。04号竪穴建物からは、多くと土器とともに打製石斧、磨製石斧、石錘、擦石、石鏃が出土している。松原遺跡は土器が多く出土し、中期前葉から中葉（新崎式～上山田・天神山式）が主体を占める。庄川での漁労活動で生計をなしえたこと、そして五箇山、飛騨に抜ける交通の要衝に位置したことが大集落を形成できた要因と考えられる。

大正13年頃、孫子の上原地内において県内でも稀少なバナナ形石器が出土している。中尾遺跡 から出土した御物石器は、市指定文化財となり福岡の厳照寺で保管されている。

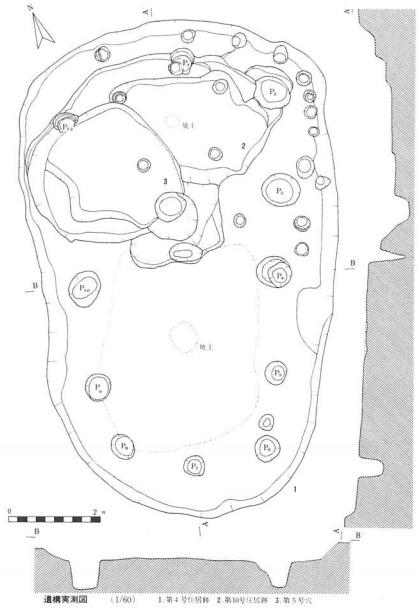


図17　松原遺跡の04号竪穴建物　S=1:150

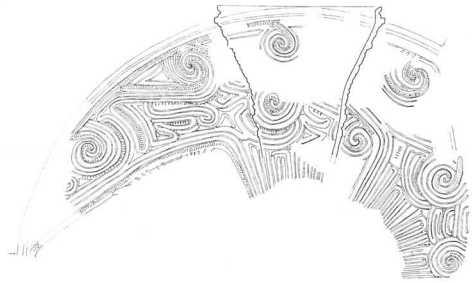


図18　松原遺跡出土の縄文土器　S=1:10

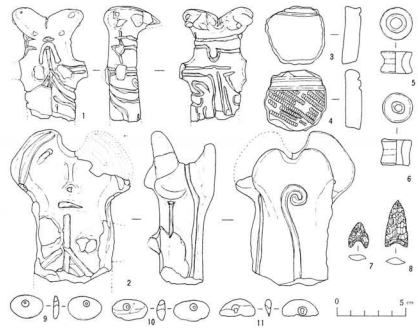


図19　松原遺跡出土の土製品　S=1:5

弥生・古墳時代　弥生から古墳時代にかけては空白の時代である。社会基盤の稲作経営移行に連動し、生活圏が湧水帯（扇端部）に移動したのであろう。わずかな資料として福山大堤遺跡や安川野武士Ａ遺跡Ｂ地点、増山城跡出土の弥生土器がある。婦負郡や射水郡に連なる丘陵地帯や低位段丘上、扇状地に点在するマッド上などに未発見の遺跡が存在する可能性がある。古墳時代資料としては、高沢島Ⅲ遺跡がある。古墳時代後半の土師器の甕や高杯の一部が出土している。増山城跡内の又兵衛清水付近から内面に刷毛目調整を施した土師器片が出土している。池原には”丸山古墳”やかつて県指定史跡であった”狐塚古墳”があるが、現在古墳と見る研究者は少ない。周辺では小矢部川左岸流域から扇端部、佐野台地に遺跡が分布する傾向にある。平野東部は閑地である。

1）富山県教育委員会　　1977『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』
2）富山県教育委員会　　1978『富山県砺波市宮森新北島Ⅰ遺跡緊急発掘調査概要』
3）庄川町教育委員会　　1975『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』

奈良・平安時代　考古学的な空白期間ののち、市域では扇状地から段丘上にかけて古代の遺跡が出現しはじめる。いずれの遺跡も8世紀後半以降であることから奈良時代末、庄川扇状地東部に展開した四荘の東大寺領荘園（石粟荘・伊加流伎荘・井山荘・杵名蛭荘）の成立に連動したものと考えられる。

東大寺領荘園

芹谷野段丘縁辺の宮森新北島Ⅰ遺跡では、桁行3間×梁間2間、面積32㎡の掘立柱建物が検出されている。周辺遺物から8世紀後半頃と見られる。須恵器窯跡群内には、増山遺跡、高沢島Ⅱ遺跡、高沢島Ⅲ遺跡、宮新遺跡がある。平野部において久泉遺跡以外では建物遺構を伴う集落遺跡は未確認だが、高道向島遺跡、安川野武士遺跡、安川山下遺跡、薬勝寺遺跡、徳万遺跡、太田遺跡、秋元窪田島遺跡、宮村遺跡、千代遺跡、油田大坪遺跡、小杉遺跡がいずれも微高地のマッド上に存在する。

掘立柱建物

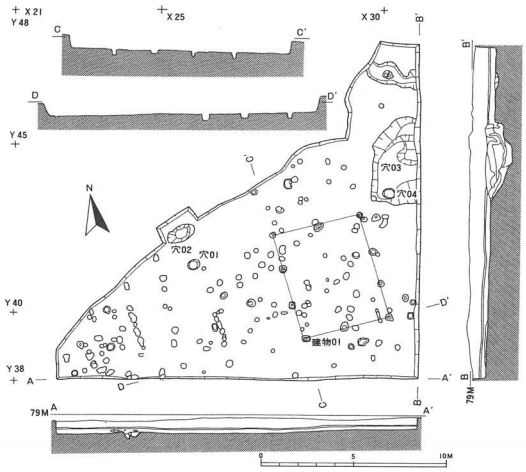


図20　宮森新北島Ⅰ遺跡の掘立柱建物　S=1:400

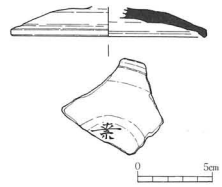


図21　高沢島Ⅱ遺跡の墨書土器　S=1:5

梅檀野窯跡群

荘園成立と期を同じくして芹谷野段丘上で大規模に須恵器生産を行っている。窯跡群は、射水郡・婦負郡に隣接する芹谷野段丘から庄東山地にかけて分布し、総称して梅檀野窯跡群という。これまで計16遺跡で窯が確認されており、多くは平野に面する丘陵西側斜面に立地している。もっとも早く操業されたのは8世紀第2四半期といわれる宮森窯で、8世紀後半から9世紀にかけて生産が盛行し、10世紀頃に衰退期を迎えるとされる。

増山支群と福山支群

窯跡群は南北の2つの支群により成り、増山支群と福山支群で構成される。増山支群は、段丘縁辺に数基存在するが、大半が山地に立地し、射水丘陵窯跡群域にまで食い込むように存在する。福山支群には著名な福山窯跡をはじめ、福山小堤窯、福山大堤窯、安川天皇窯で構成される。増山支群に比べ発見された窯跡数は少ない。

芹谷野段丘裾にある宮森窯を除いて丘陵斜面地に立地している。良質の粘土と薪木の獲得が可能であることから、築窯条件の良い芹谷野丘陵一帯に須恵器生産地が選定されたものと思われる。窯跡群内には炭焼窯も多数発見されており、燃料材となる山林資源の用役問題と密接な関係を指摘することができる。

表1　梅檀野窯跡群一覧

支群	遺跡名	種別	時代	編年
福山支群	安川天皇窯	窯	奈良	8c2/4
	福山1号窯	窯・製鉄	奈良	8c3/4
	福山2号窯	窯	奈良	8c3/4
	福山小堤窯	窯	奈良	8c3/4
	福山大堤窯	窯	奈良	8c3/4
増山支群	宮森窯	窯	奈良	8c2/4
	増山団子地窯	窯	奈良・平安	8c3/4
	増山妙覚寺坂窯	窯	奈良・平安	8c4/4
	増山亀田窯	窯	奈良・平安	8c4/4
	増山池ノ平等窯	窯	奈良・平安	－
	小丸山1号窯	窯	平安	9c1/4～2/4
	小丸山2号窯	窯	平安	9c1/4～2/4
	増山外貝喰山窯	窯	奈良・平安	8c4/4～9c1/4
	増山赤坂窯	窯	平安	9c2/4～3/4
	増山外法蓮山窯	窯	平安	9c4/4
	増山笹山窯	窯	平安	9c4/4～10c1/4
	正権寺後島窯	窯	平安	9c4/4～10c1/4
	東笹鎌野1号窯	窯	平安	9c4/4～10c1/4
	東笹鎌野2号窯	窯	平安	9c4/4～10c1/4
計19基（福山支群5、増山支群14）				

増山支群の宮森窯と福山支群の安川天皇窯

1）砺波市史編纂委員会他　1962『砺波市福山〈徳万赤坂〉須恵器窯発掘報告』

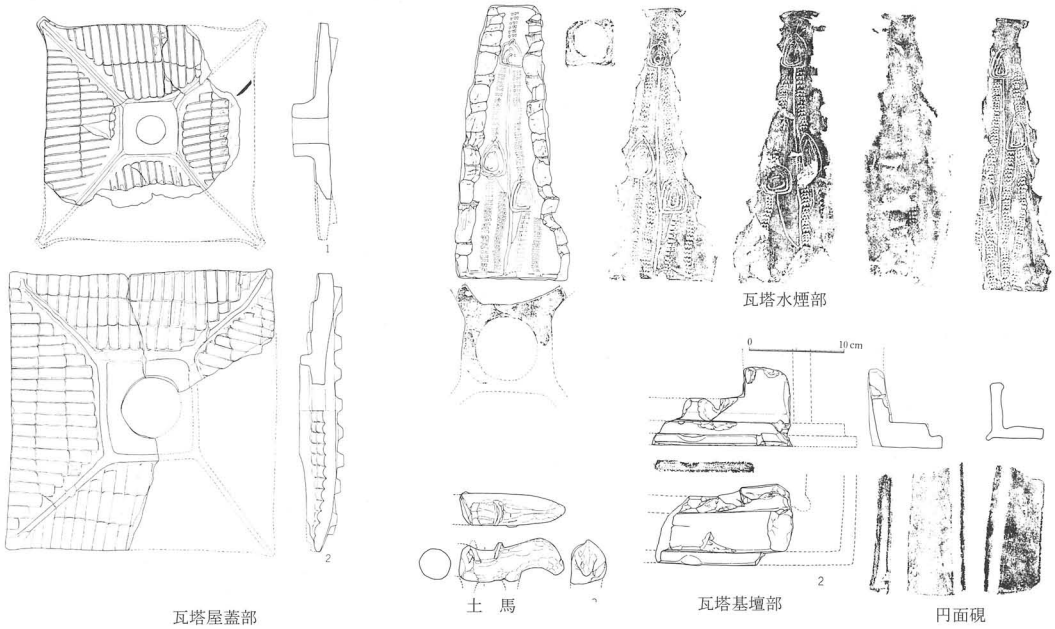


図22　福山窯跡出土品　S＝1:8

がもっとも古く８世紀第２四半期に位置づけられ、8世紀第3四半期から第4四半期にかけて増山支群の増山亀田窯、増山団子地窯、増山妙覚寺坂窯が操業を始め、同時期には福山支群で福山窯、福山小堤窯、福山大堤窯が操業している。9世紀前半に入ると、小丸山1・2号窯が操業され、9世紀後半から10世紀にかけて正権寺後島窯、増山外貝喰山窯、増山笹山窯、東笹鎌野窯が操業をし、以後栴檀野窯跡群では須恵器生産が衰退する。　**8世紀第2四半期**

栴檀野窯跡群が成立した8世紀後半は、「一郡一窯的」体制ともいうべき律令的土器生産体制、つまり須恵器と土師器の一体生産が確立する時期にあたる。この窯業上の画期は、律令国家の経済政策と連動するものであり、古代前半期（7世紀初頭から9世紀初頭）の手工業生産政策は行政単位ごとの集約的な手工業センターを作ることを目指した。砺波郡では、小矢部川左岸の安居・岩木窯跡群において7世紀前半から須恵器生産を始めており、その後7世紀後半から窯場が増加し、8世紀代には小矢部川左岸や芹谷野段丘上に窯跡群が展開する。それまで小矢部川左岸に生産域が集中していたが、突如として砺波平野東部に窯場が作られる。　**一郡一窯的体制**

昭和37年7月に砺波市史編纂委員会が中心となり、福山窯跡の発掘調査を実施した。出土品には水煙・屋蓋・軸・基檀など瓦塔の一部や円面硯、土馬など特記すべき遺物があり、市指定文化財となっている。

鎌倉時代　徳大寺家領般若野荘は平野東部に広く展開し、現庄川両岸に沿って南は三谷地区から北は中田地区に及ぶ広大な荘域であり、奈良時代に成立した東大寺領荘園（伊加流伎・石粟・井山荘）三荘を包括する。　**徳大寺家領般若野荘**

徳大寺家は藤原北家の流れを継ぐ閑院流の出であるが、般若野荘がどのような機縁で家領となったのか、またいつごろ成立したか確証となる史料はない。知行国制が一般化し、縁故関係や成功によって国守が選任され、私的人脈によって国政が普遍化していった院政期にあって、徳大寺実能・公能父子が越中国の政務に深く関わっていることを考慮すれば、公能が越中国守となった大治元年（1126）頃に般若野荘の成立をみるのが妥当であろう。

中世において般若野荘では幾度かの合戦が繰り広げられた。治承・寿永の源平争乱1では、寿永2年（1183）、般若野荘に布陣していた平盛俊は源軍の今井兼平を迎え戦ったが敗れ、退き小矢部川原で戦ったが劣勢となり倶梨伽羅峠を越えて加賀に引き上げている。後鳥羽上皇が執権北条義時と敵対したことに端を発した承久の乱 では、承久3年（1221）鎌倉方である名越（北条）朝時らの北陸道軍が般若野荘まで侵攻し、京方（後鳥羽上皇方）との合戦となった。京方はこの合戦で敗れ、軍陣に降っている。

和田城

増山城

嘉吉元年（1441）の「薩戒記」 によると徳大寺公有が越中の荘園経営の不振に陥っている。庚永元年（1342）に般若野荘の南にある三谷寺が鎌倉覚園寺塔頭蓮華院領となっていることや、武家方の地頭方により押領が起こりやむなく領地を折半する（下地中分）という事態に起因する。明応3年（1494）にあっては越中国の徳大寺家領荘園が不知行となっている 。天文14年（1545）、越中に下向した徳大寺実通は、知行分にて殺害される 。雄神荘の庄城（壇ノ城）に拠る石黒氏や神保氏、在地荘民のいずれの手によるものか不明であるが、家領荘園での混乱状況をうかがうことができる。安川の般若山薬勝寺の南にある公卿九人塚と呼ばれる五輪塔の墓地は、実通に関係があるのかもしれない。

長尾能景

神保長職

上杉謙信

荘域にある遺跡としては、東保遺跡（東保高池遺跡）、久泉遺跡、秋元窪田島遺跡、正権寺遺跡、狐塚遺跡などが存在する。12世紀後半から13世紀前半の東保遺跡（東保高池遺跡）では土師器が多量に出土し、墓地もしくは祭祀跡と考えられる集石状遺構が検出されている。秋元窪田島遺跡、正権寺遺跡は、ともに15世紀に位置付けられる。

佐々成政

中川光重

南北朝・室町時代　南北朝時代には、二宮円阿軍忠状に「和田城」という城名がみえる。和田城は、増山城に先立ち構築された亀山城であるという説が有力である。現在の亀山城は、戦国時代前期に修築された可能性が高いが、郭が同心円状に配置していることや全体的な規模などから増山城より古い構造をもつ。室町時代に神保氏が婦負・射水郡の守護代となり、はじめ亀山城を使用していたが、本城である放生津城の支城として亀山城を修築したとされる。永正3年（1506）、一向一揆を攻めるために進軍した越後守護代長尾能景が増山城に近い芹谷の合戦で討死していることから、軍事的緊張が高まっていたことが考えられ、亀山城の整備が行われ、現在の姿に近い形になったようである。さらに天文年間頃、神保長職が富山城の支城として増山城が構築されたと考えられる。こののち増山城は、長職を追撃した上杉謙信の手に落ち、永禄年間後期に長職と上杉が結んで一向宗徒を攻撃したときには、長職の本拠となっている。また、長職没後、一時的に反上杉方が居を構えるが、天正4年（1576）に謙信に攻められ落城し、天正9年（1581）に織田方に焼き払われている。天正11年（1983）以降、越中統一を果たした佐々成政によって修築された増山城は、この時もっとも城域が広く構造的に完成したのではないか。成政ののち、増山城は前田方の手に渡り、城の守将となった中川光重が退老もしくは没した慶長年間まで存続したと考えられる。　（野原）

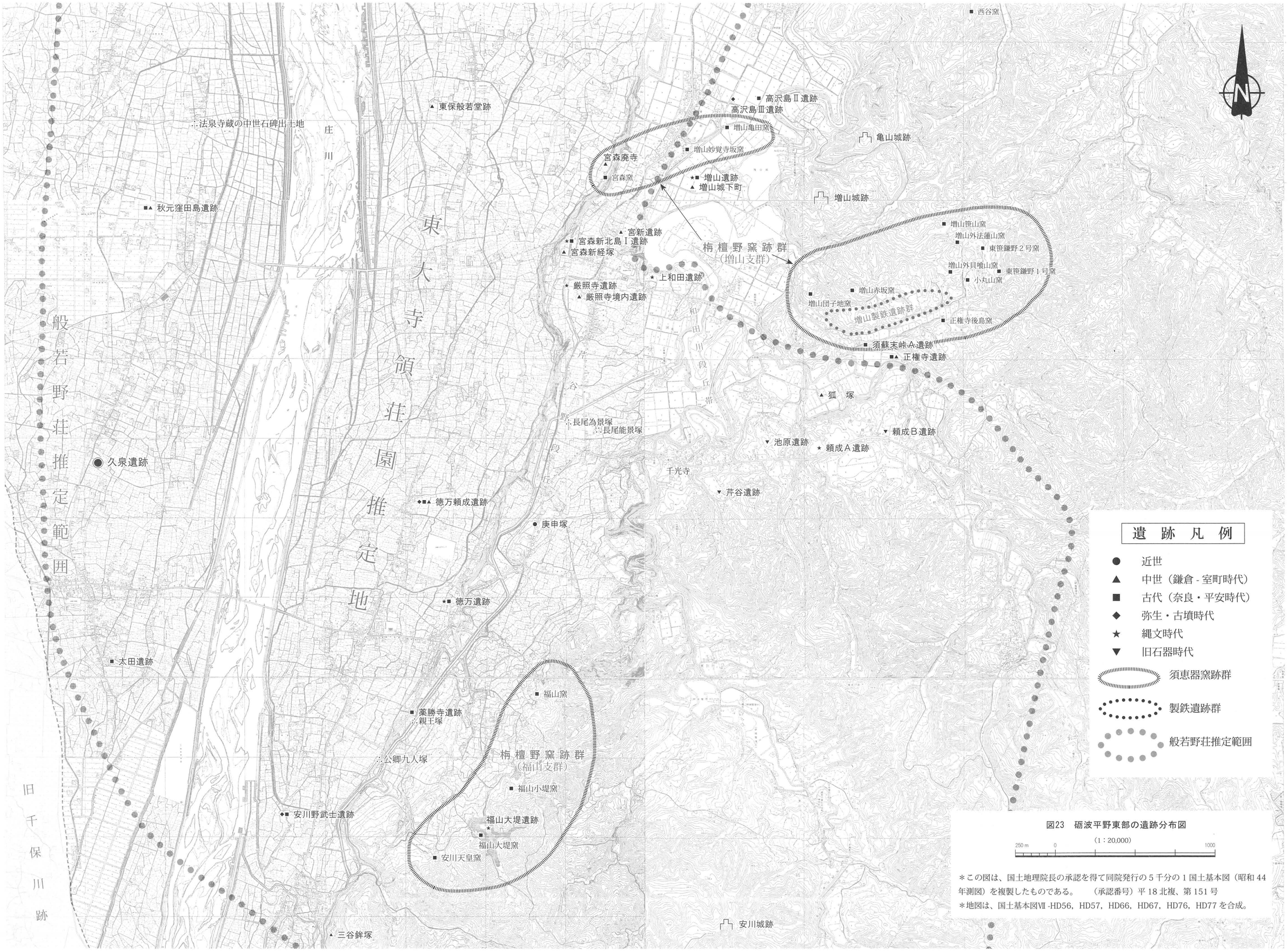


図23　砺波平野東部の遺跡分布図

（1：20,000）

＊この図は、国土地理院長の承認を得て同院発行の５千分の１国土基本図（昭和44年測図）を複製したものである。　（承認番号）平18北複、第151号

＊地図は、国土基本図Ⅶ-HD56，HD57，HD66，HD67，HD76，HD77を合成。

第３章　調査の方法と成果

1　調査経過と調査方法

調査の経過　現地調査は４月19日に着手し、12月15日に完了した。期間は約８ヶ月を要した。調査区は、４箇所に分かれる。４箇所の調査区は、総面積4,631㎡を測る。

大部分が国道バイパス本線部分の**東側調査区・西側調査区**で占められるが、国土交通省側からの要請で市道久泉線の地下横断道路施工部分（**市道調査区**）と農業用排水路拡幅工事部分（**排水溝調査区**）の調査も実施した。地下横断道路工事の工期の都合で、市道調査区を先行し６月末で完掘、平行して東側調査区・西側調査区に着手し、調査は12月まで継続した。調査の進捗状況を勘案し、狭小な水路調査区を10月に実施している。現地調査完了後、本格的に遺物整理業務に入り、18年3月までに遺物実測まで完了した。18年度に報告書作成および理科学的分析等を実施した。

市道調査区（500㎡）　平成16年度東側調査区の西側、市道地下横断道路の掘削法面にあたるため、急遽調査を実施した。遺構面は、第２遺構面、第３遺構面の２面である。

東側調査区・西側調査区（4,118㎡）　現地調査時に調査区中央を走る農業用排水路を境として、東側・西側とした区分を踏襲する。バイパス本線部分のため、主要な面積を占める。第１～３遺構面の調査を実施した。

排水溝調査区（13㎡）　他の調査区と同様、基本層序に沿って遺構面となる各層位を確認したが、遺構・遺物とも芳しい成果がなかったので報告は図面（遺構全体図）のみに留め、詳細な記述は割愛した。

調査方法　現地調査は、富山県埋蔵文化財本発掘調査積算基準にもとづき、発掘作業の工程（表土等掘削→遺物包含層の掘削→遺構確認面の精査・遺構検出→遺構掘削→図面作成・写真撮影→埋め戻し）で平成17年度に実施した。試掘調査結果にもとづき、調査員立会いのもと重機による表土・盛土を除去した。排出した土砂は、一時的に南側の借地に山積みし、一部は国土交通省の指示によって柳瀬地区のバイパス工事施工区間にダンプトラックで搬送し、残りは完掘後に埋め戻している。遺物包含層掘削後、遺構検出とともに概略図を作成する。概略図を基に遺構の構成等を確認後、単なる落ち込みでないかの確認および柱穴と思われるピットは柱根痕跡の検出のため、土坑、ピット等の小規模な遺構を段掘りした。その後、半割、断面図作成、完掘、写真撮影の順で作業を進める。整理作業等の工程（記録類と出土品の整理→報告書作成）は大半を17年度に実施し、報告書作成および理科学分析等を18年度に実施した。理科学的分析の各方法は、第４章（p.177～）に記述する。

遺構面の問題　合計３面の遺構面を確認した。層序順に上から第１遺構面（近世）、第２遺構面（奈良・平安期）、第３遺構面（縄文期）とした。15・16年度調査区とは、基本層序５層の上・下面を遺構面と扱う点は共通するが、第１遺構面は遺跡内で新たに認識した。

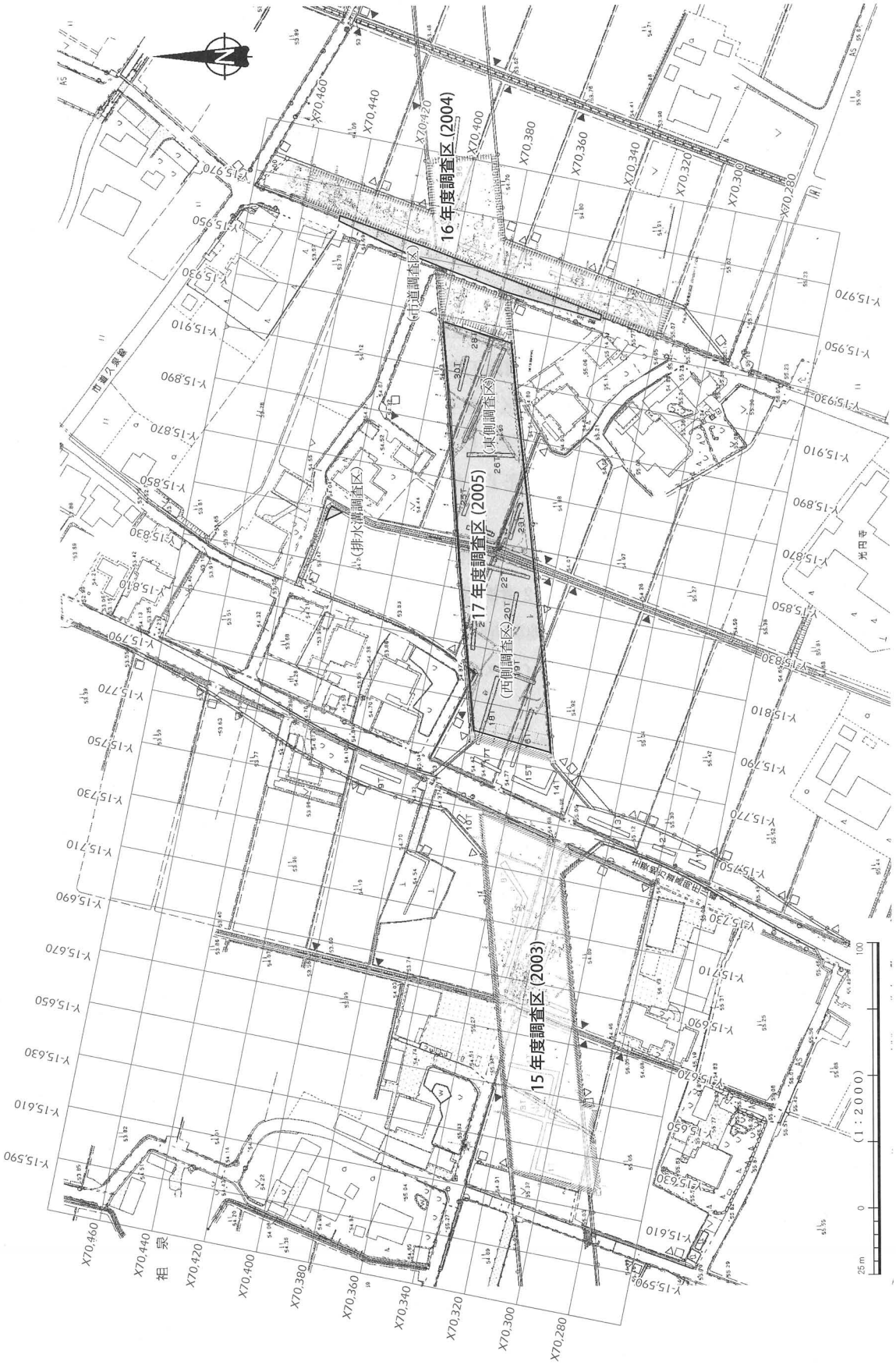

16 年度調査区 (2004)
17 年度調査区 (2005)
15 年度調査区 (2003)
(市道調査区)
(東側調査区)
(排水溝調査区)
(西側調査区)
相泉
(1:2000)
25 m
0
100

図24　調査区グリッド

調査参加者　発掘作業ならびに整理作業を通して下記の方々の参加を得ることができた。炎天下の中、ひたすら作業に従事してくださった作業員さん、ならびにすばらしい技術をもって整理に携わってくださった方々に衷心より謝意を表したい。

発掘作業

（砺波市シルバー人材センター）

安念一正、永森　堤、折橋　清、川原義夫、島田一郎、仙道孝俊、田島　博、鶴巻ヨシエ、長森　勉、西村昌蔵、野口静華、信田豊次、信田正明、林　清夫、東島耕三、松田利子、村上良雄、加藤福蔵、坂口茂男、古井勝嘉、宮脇重夫、室田清二、安ヶ川礼子

（株式会社　アーキジオ（旧中部日本鉱業研究所））

佐野睦美、野田幸二、定塚百合子、前田明子、石田哲雄、江口　實、大坪市雄、小川　勉、笠谷　晃、梶原哲郎、新保勝正、中原正人、広上正美、斎藤勝則、蓑口和弘、柳沢政勝、山田　勇、林　憲彦、宝田紀代春、堀田　肇、西山祥子、鏡　武夫、西川　精

整理作業

（砺波市教育委員会生涯学習課）

千田友子、西本智子、横川美雪

（株式会社　アーキジオ(旧中部日本鉱業研究所)）

佐野睦美、渡辺賀世子、宮口美香、浜本篤子、高橋英吏子、梶原哲郎、角澤　勲、松沢秀雄

（株式会社　太陽測地社）

山口美子、岩池淳子、宮本洋子、徳田澄子、上山明代、加藤真紀

（株式会社　上智）

石黒　収、前田雅成

2　調査日誌抄　2005年4月21日～12月14日

5.13　発掘調査作業員打ち合わせ。水路切り回し部分表土掘削。4層上面にて溝状遺構・竪穴建物を確認。

5.16　水路切り回し部分表土掘削。市道調査区の壁切り終了後に５層掘削・遺構検出。

5.17　市道調査区遺構検出終了、検出写真撮影。SD09遺構掘削開始。東側調査区東部分の表土掘削、遺構検出。SD09検出。東側調査区水路切り回し部分の遺構（竪穴建物など）検出作業終了、検出状況写真を撮影。電柱の矢板打ち込み（3本目）

5.18　東側調査区の表土掘削、遺構検出。SD09全体を検出。水路切り回し部分の遺構検出・掘削・撮影。市道調査区の遺構掘削。SD09掘削。

5.19　東側調査区遺構検出。土師器・須恵器片出土。溝状遺構検出。表土掘削。水路切り回し部分の遺構掘削・撮影。

5.20　水路切り回し部分の遺構掘削・撮影。SI97掘削開始。

5.23　水路切り回し部分の遺構掘削・撮影。SI97掘削。貼り床上面にて焼土及び炭化物を確認。

5.25　西側調査区表土掘削･遺構検出。土師器・須恵器出土。水路切り回し部分の遺構掘削・図面作成。

5.26　西側調査区の表土掘削終了。柱穴等を南側部分にて確認。全体的に5層は削平されており、黒色包含層は薄い。須恵器等出土。東側調査区水路切り回し部分の遺構図面作成・完掘。市道調査区の完掘写真撮影。南北でタワー全体写真撮影。終了後に5層の掘削を開始。ベルコン40台搬入。

5.27　調査区水路切り回し部分の遺構図面作成・完掘。

5.30　東側調査区のSD09検出状況の写真撮影の清掃。東側調査区水路切り回し部分の遺構図面作成・完掘。

5.31　基本層序の意思統一。5層上層の遺構検出の層を4層にし、包含層を2層とする。東側調査区水路切り回し部分の遺構図面作成・完掘。4層上面遺構完掘、4層掘り下げ。5層上面の遺構検出。ピット数基検出。老松邦雄砺波郷土資料館館長視察

6．1　市道調査区の最終確認層の遺構完掘・写真。遺構・遺物量は少量。水路切り回し部分の5層上層遺構検出終了、遺構調査。終了後に5層の写真撮影後、掘削開始。東側調査区の2層掘削。須恵器・土師器の破片が多く出土。5層と2層の中間層の4層上面を基準に掘削。能越国道出張所にて工程・排土処理協議。

6．2　市道調査区、タワー写真撮影（全景）。東側調査区水路切り回し部の2層掘削・遺構検出。素掘小溝が複数基検出、切り合い関係の判別が困難。SD09を切る溝状遺構の掘削。水路切り回し部の5層掘削。調査区内の雑草処理。

6．3　東側調査区排水路東側の2層掘削及び4層精査遺構検出。素掘小溝の他、ピットを複数基検出。2層溝状遺構掘削、TS平面細部測量。水路切り回し部完掘、壁面の基本層序撮影。西側調査区の法面成形及び側溝掘削。
佐伯安一氏より圃場整備前の地形図及び水路古地図について意見を伺う。本調査区基本層序について取り決めを行う。

6．6　東側・西側調査区2層遺構掘込み清掃、タワー写真撮影。TS細部観測。水路切り回し部の壁面作図作業。作図→水路切り回し部の調査終了。

6．7　市道調査区TSによる遺構平面細部測量。西側調査区の遺構検出作業・撮影。

6．8　西側調査区の2層上面遺構の掘削。４・５層の遺構検出。SD09壁掘込後、断面作図。

6．9　西側調査区の遺構プラン切り合い部観測。2層上面検出遺構掘削。各遺構の土層断面撮影及び断面図作成。水路切り回し部の埋め戻し及び水路成形。水路敷設状況の写真管理を実施。

6.10　東側調査区、西部分のSD09縦断面の掘削。西側調査区の２層上遺構掘削・清掃。各遺構の土層断面撮影及び断面図作成。水路成形及び防水シート敷設。水路切り替え作業終了。

6.13　東側調査区の現況水路下部分の表土掘削開始。竪穴建物らしきものを確認。西側調査区の4･5層上遺構清掃、順次検出写真撮影。西地区の2層遺構完堀状況全景写真撮影を実施。

6.14　東側調査区全体の遺構検出写真撮影。西地区交差点部の現道切断及び掘削作業を開始。5層上検出面に旧市道跡及び付帯工事跡が残り、撹乱層が広がる。遺構及び遺物は認められず。西側交差点部の掘削・成形。清澤課長視察。

6.15　東側・西側調査区溝状遺構の掘削開始。SD09縦断面の写真撮影・図化。TSにて遺構概略図の平面実測開始。

6.16　東側調査区西4•5層の遺構掘削・図化。SD09の縦断面図化。竪穴建物SI166・167掘削開始。素掘小溝の掘削。

6.17　東側調査区遺構掘削。竪穴建物・素掘小溝の掘削・写真・図化。竪穴建物にセクションを設け、トレンチで床面確認。TS平面図から柱穴並びの観察。白江秋広課長・老松館長視察。排土搬出作業開始。

6.18　東側調査区遺構掘削。竪穴建物・素掘小溝の掘削及び写真撮影。西側調査区の5層上遺構検出。排土土砂搬出作業。

6.20　西側調査区西端部分の遺構検出。中央農業排水路東脇の素掘小溝の切り合い部の半割。SI166掘削。覆土上層部から須恵器・土師器の他、礫を検出。

6.21　東側調査区、4層上の遺構掘削・写真撮影・図化。SI166掘削。掘込みにより床面をほぼ確認、直上面より土師器の破片を検出。出土遺物の図取りのためTSにて図取り点を観測。SI167土層断面図作成。遺物出土状況写真撮影。西側調査区・道路切断部の検出面精査及び旧市道跡撹乱層の除去、遺構検出。

6.22　東側調査区、中央部の竪穴建物跡の検出、素掘小溝の掘削を優先。SI166・167掘削。SI167貼り床面まで完掘。貼り床面検出部に焼土の広がりを確認。

6.23　雨天中止。写真整理、遺構図整理、工程計画協議。

6.24　東側調査区・素掘小溝の完掘作業。旧水路から西側と東側で方向性が変化。SI167土層図追加後貼り床部を完掘。SI166内の遺物出土状況図作成、作図完了分につき適宜取り外し。床面清掃により、5cm大の円礫が中央から東に延びる石列を確認。西側を南北に走る旧農業水路跡の底面と思われる砂礫及び酸化鉄層の掘削除去。

6.27　東側調査区、SI166内遺物及び礫観測、データ作図編集。旧河道付近の掘立柱建物の遺構検出。並びをもつ柱穴プランを1基を検出。SD09完掘。

6.29　東側調査区、雨水の排水作業及び法面養生の直し。調査区南側佐伯勝弘邸隣接地の壁面法面補強。

6.30　雨天中止。東側調査区、夜中の豪雨で冠水。現場南壁排

水溝が崩壊し現場内に水が流入、再度壁面の復旧工事。

7. 2　雨天中止。排水作業。東側調査区SI166平面図作成のため、TS観測。西側に点在する礫及び、柱部分の円礫群を観測完了。上層部から出土した土器に番号を付し、取り上げ。観測図の編集。

7. 5　東側調査区SI166・SD09の記録・掘削。SI166の完掘写真撮影。遺構をTSにて細部観測。上下線の他、焼土範囲・貼り床範囲を観測し作図編集。遺構検出。

7. 6　東側調査区、SD09完掘。SB01・02の検出状況写真撮影。素掘小溝及び周辺のピットの遺構プラン検出・記録・掘削。小柱穴の完掘、中央北側の竪穴建物の掘削。遺構概略図作成観測。

7. 7　東側調査区、雨天のため午前で作業終了。SD09の遺構掘削。底部完掘、壁面の礫層部仕上げ。SD09西側5層上面検出面精査。SB01・SB02掘削。SI166柱穴の断面測量・写真撮影。

7. 8　東側調査区、SD09の完掘。底部は礫層部酸化鉄沈着層を仕上げ、壁面の黒色土掘削。中央部北側の遺構断面写真、竪穴建物の調査。SI166の完掘写真撮影。SB01西側柱穴の半割。

7. 9　東側調査区、SD09の掘削。SB01西側桁行柱穴の半割・実測。SI166床面掘削、南東角床面覆土内より土師器の破片4点、倒立している被熱礫1点検出。TS観測。

7.11　東側調査区、竪穴建物完掘。中央部〜東側の北側にかかるSP完掘・写真撮影。フィールド型デジタイザにてSD09のデジタル実測デモを実施。デモ終了後SD09ほぼ完掘。西側調査区東側4層遺構検出面を中心に遺構検出精査開始。東側調査区にみられた南北溝・東西溝の他に北東—南西溝を数状検出。

7.12　雨天中止。排水作業。

7.13　東側調査区中央部、かまどの検出付近の遺構検出。遺構の輪郭が不明瞭。SI166にセクションベルトを設け、貼り床面の掘込みを実施し土層面記録及び遺構撮影。下部から遺構が出土しているが、竪穴建物に関連するか不明。SB01西側桁行列柱穴の記録。西側調査区東端部の遺構検出→浅掘。

7.15　東側調査区中央部の竪穴建物検出。SD09に付随するSD430完掘。SD09清掃。素掘小溝検出・掘削。SI166貼り床面下に周溝及び柱穴プランを検出・記録。西側調査区4•5層検出面の精査、遺構プラン図化。

7.16　東側調査区、SI166貼り床面下検出の周溝状溝掘削・遺構断面図作成。SB01柱穴半割、記録、掘削。出土遺物図取りのためTS観測。西側調査区4・5層検出面の精査、遺構プランの検出。中央北側矢板前に中世土師器が集中的に出土する範囲を検出、若干の焼土を確認。検出遺構概略図作成のため、TS測量。

7.19　東側調査区、SD09完掘写真撮影。周辺の清掃作業→ベルコンの撤去。SI166柱穴調査、SB01・02柱穴調査。西側調査区中央西側2層の掘削。観測・作図した遺構概略図校正。

7.20　東側調査区、TSによるSI166、SB01・02の平面細部観測を実施、作図。半割面に検出された柱穴と思われるプランについて観測し図面を作成。西側調査区、2層掘削。

7.21　東側調査区、SI166・SBの部分写真撮影。方形4隅に柱穴が確認できたものの、他に柱穴が見られるため、再度調査。西側調査区、4層上の遺構掘削、土層注記。遺構の深さは東側が深く、西側が浅くなる。2層掘削。

7.22　東側調査区、SI166完掘。TSによるSI166の観測、作図。西側調査区、素掘小溝の掘削開始。西側の2層掘削。

7.25　東側調査区、SI166と周辺遺構の完掘。ほぼ、東側の4・5層の遺構は終了。西・北側の壁面清掃をおこなった後、基本層序の図面作成を行う。西側調査区、南東部に遺構が集中。遺構掘削・調査。砺波市教育センター教員視察。市文化財審議保護会視察。

7.28　東側調査区、SI166床面下に検出されたピットの半割実測後、TS観測、現説資料図面作成。西側調査区、新規に検出された遺構についてTS観測、平面概略図作成。SX600遺物集中地をTS観測、プロット図作成。遺構掘削。

7.29　東側調査区、空中写真測量準備として調査区内清掃。西側調査区、遺構掘削・写真撮影。（財）文化振興財団の見学、猛暑のため作業員の志気低下。

8. 1　東側・西側調査区、空撮のため清掃。西側調査区、柱穴、遺構の図化・写真・完掘。SI600の確認。

8. 2　西側調査区、空撮のため清掃。SI600の検出、サブトレンチを入れたが、西部分は焼土が広がる。付近

には遺物が集中、覆土が固くしまる。東側調査区、かまど付近の完掘、残務処理。

現地説明会準備の協議。上市町教育委員会、三浦知徳氏来跡。

8. 3　空撮のため清掃。SI600の輪郭を出し、遺物の出土状況写真・図化・取り上げ。打製石斧２点（021、022）観測。

8. 4　４層面を中心に遺構面清掃を続行。12：10実機ヘリ撮影開始、12：30終了。**現地記者発表。**ケーブルテレビTST撮影。TSにて、SI166観測及び作図。現説用資材搬入。

8. 5　東側調査区に見学用の足場設置。

8. 6　**現地説明会（1回目）110名参加。**午後片付け。

8. 8　西側調査区、ベルトコンベアー設置、5層掘削開始。縄文土器、土師器・石斧出土。SI600遺構掘削を再開。**祖泉・久泉地区子ども会25名見学。**

8. 9　西側調査区、５層掘削。縄文土器片・打製石斧3点（023～025）出土。SI600掘削。東側調査区、清掃。西側調査区、南

東大寺領荘園の集落か

砺波・久泉遺跡

掘っ立て柱建物など

砺波市教委は四日、同市久泉で発掘している久泉遺跡で、奈良時代後半から平安時代初期（八世紀後半―九世紀前半）の掘っ立て柱建物、竪穴住居跡、大溝が発見されたと発表した。同遺跡の近くには東大寺領荘園の伊加流伎荘の推定地があり、市教委は「遺跡が東大寺領荘園に関係する可能性がきわめて高い」と話す。同荘園に関係する集落遺跡は、高岡市の常国遺跡に次いで二例目。

掘っ立て柱建物は床面積が約七十七平方㍍と約四十三平方㍍のものが見つかった。大きな方は柱の据え替えの痕跡が見られた。一番大きな竪穴住居跡は東西約五・六㍍、南北約五・二㍍で面積が約三十平方㍍。四隅の柱は直径約五十㌢、深さ七十㌢と大きく、支柱もある。市教委の野尻輔学芸員は「上部構造がしっかりした建物だったのではないか」と説明する。

大溝は昨年発掘された溝の延長で幅約五―八㍍、深さ一・五㍍。人工的に造られ、農業用水路と考えられる。

いずれもこの時期としては大きな建造物で、農民層でも有力者の集落とみられる。野尻学芸員は「八世紀後半から九世紀前半は東大寺領荘園の成立から経営の時期にあたる。久泉遺跡は東大寺領荘園の初期の開墾集落でないか」と話す。

同遺跡は縄文、古代から、中世、近世までの遺跡。国道359号砺波東バイパス建設工事に伴い、平成十五年度から三年計画で調査している。本年度は十五、十六年度の中間地約五千平方㍍を発掘。今月下旬から縄文層の調査を行う。六日午前十時から一般住民を対象に現地説明会を開く。

久泉遺跡で見つかった竪穴住居跡＝砺波市久泉

奈良後半―平安初期　あす現地で説明会

平成18年８月５日付け　北日本新聞社記事

東部の焼土群の遺構調査開始。焼土自体は単体で他の遺構に伴っていない模様。

8.10　東側調査区、清掃。西側調査区、西部分の5層掘削。縄文土器片・打製石斧10点（026～035）出土。SI600掘削。範囲の広がりが確認できたため、さらに拡張する。遺物取り上げ。**砺波コミュニティ放送「ふるさと砺波の文化財」収録。**

8.11　東側調査区、清掃。見学用足場の解体。SI166清掃、タワー写真撮影。西側調査区、5層掘削。

8.17　西側調査区、5層掘削、西端の5層上面の遺構浅掘。西側調査区SI600の掘削。東側調査区、竪穴建物の確認のため、サブトレンチを設置し掘削開始。

金田章裕教授、老松郷土資料館館長、佐伯安一氏が来跡。

8.19　西側調査区SI600写真撮影。西端の6層上面遺構の浅掘が終了、遺構概略図作成。東側調査区、竪穴建物のサブトレンチ掘削、遺構の範囲確認。東側調査区西端の4層の掘削開始。

博物館実習生2名（吉田、島田）体験発掘。

8.19　西側調査区、SI600完掘→写真撮影。東側調査区、竪穴建物のサブトレンチ掘削。SD09の礫群の断面状況を知るために、東西にトレンチを設定し掘削。東側調査区西端の4層掘削。

8.22　東側調査区西端の4層掘削。西側壁面より5m地点まで5層面の検出をほぼ完了。一部4層の残存する不定形プランを検出。中央焼土検出サブトレンチ拡張調査及び竪穴建物検出。

8.24　西側調査区西の遺構確認と清掃。SI600掘削・写真撮影・図化。西側調査区5層上遺構検出。4層掘削終了。竪穴建物のサブトレンチ掘削。遺構の輪郭土層の確認。SD09肩部分の礫群の堆積などを確認のため、2箇所トレンチ掘削。東側調査区、西端の4層掘削。打製石斧5点を撮影・TS観測後取り上げ。

8.25　西側調査区南の5層掘削、上面の遺構検出、写真撮影。SI600の掘削、完掘写真・図化。東側調査区西端部から5層上面遺構の浅掘開始。遺構は柱穴が少ない。東側調査区の竪穴建物のサブトレンチ掘削を行い竪穴4・5基が確認できた。SD09肩部のトレンチの掘削、断面図化。

8.26　西側調査区、5層掘削。遺構は柱穴を主に多数。西側調査区5層上面の遺構確認。東側調査区4層掘削。SD09礫群の写真撮影と竪穴建物の検出写真撮影。午後雨天中止、写真図面整理。

8.29　西側調査区、5層掘削。打製石斧・磨製石斧出土。遺構は柱穴を主に多数。SI600完掘写真・図化作業終了。西側調査区の南東部分焼土付近の遺構検出。東側調査区のSI遺構調査を本格的に開始。トレンチ設定後、土壌サンプルを採取しながら掘削。

8.30　東側調査区、竪穴建物の掘削。南側水路付近からは遺物が多く出土。土壌サンプル採取。西側調査区、5層掘削。5層上面遺構検出、写真撮影。

8.31　東側調査区、竪穴建物の掘削、須恵器・土師器などの遺物出土。西側調査区西南の焼土範囲のサブトレンチ調査。西側調査区の5層掘削・検出作業。5層掘削終了。

9. 1　東側調査区、竪穴建物の調査。仮水路付近の竪穴建物の掘削、土師器・須恵器・磨製石斧出土。深度は30cm近く、かまどと推定される焼土が北部分に見られる。西側調査区、焼土検出付近の遺構確認のため、5層を浅く掘削。西側調査区、5層掘削終了部分から、遺構確認、出土礫の位置関係の確認のため、清掃。

9. 2　東側調査区、竪穴建物の掘削。遺物の図化・写真撮影。西側調査区、焼土周辺の遺構調査。焼土周辺の遺構プランが不明なので、5層を少しずつ下げ遺構確認を行う。焼土の輪郭を記録して、今後調査する。西側調査区、5層掘削・遺構浅掘。

パリノ・サーヴェイ千葉氏、古環境分析サンプル摘出実施。SD09北側セクションベルト部、SKの2カ所。

9. 5　土器洗浄。酒井英男教授（富山大学）来跡。古地磁気調査の概要説明及び当現場での実施計画打ち合わせ。

9. 6　現場の台風14号対策。

9. 7　遺跡現場の見回り。台風14号接近のため発掘中止。

9. 8　東側調査区、竪穴建物調査。遺構掘削。西側調査区、焼土群周辺の掘り下げ。5層掘削、遺構検出、写真撮影。遺構確認の浅掘。概略図作成。土器洗浄。

9. 9　西側調査区の遺構検出。遺構の確認作業後に範囲を設定し、浅掘、概略図。6層検出面上に検出された炭化材集中範囲については、各遺構掘削・記録作業終了後、箱掘にて状態確認。東側調査区の竪穴建物の遺物検出と写真撮影、測量。

9.12　東側調査区の竪穴建物の測量・図化。

金田章裕教授（京都大学）視察。

9.13　東側調査区、SI492かまど周辺の検出開始、焼土面の範囲ほぼ確定。平面プランは、東、北は確定、南側が不明。サブトレを1つ追加。西側調査区、6層上面遺構検出ほぼ完了。

9.14　東側調査区、竪穴建物の断面実測と清掃。西側調査区の遺構半裁作業開始。午後雨天中止。写真整理・図面整理。

9.15　東側調査区、竪穴建物調査・掘削・写真撮影。西側調査区、遺構半裁作業。庄南小学校生徒代表見学。

9.16　見学会準備。遺物の展示、見学コースの設定。東側調査区の竪穴建物跡、西側調査区の遺構掘削。

庄南小学校「庄南なかよしウォーク」250名見学。

9.20　西側調査区、５層掘削、遺構掘削。東側壁面に検出された列状遺構群６基の観測・編集を実施。東側調査区、竪穴建物の遺構調査と清掃。東側調査区、遺構掘削。

9.21　西側調査区の西南部分の焼土を伴う遺構検出および遺構周辺の５層掘削。東側調査区、竪穴建物の清掃→タワー写真撮影→あぜの掘削。サンプル採取。東側調査区、５層掘削。

9.22　東側調査区、竪穴建物の遺物出土状況の図面作成、畦の掘削→ほぼ床面まで掘削終了。11:00よりSI491タワー写真撮影。東側調査区、5層掘削。打製石斧・磨製石斧出土。（3点64～65の観測取り上げ）西側調査区、焼土集中のSI完掘、周辺の5層掘削→西側調査区の5層掘削ほぼ終了。

9.26　見学会の打ち合わせ。東側調査区、竪穴建物の遺物取り上げ、遺物出土状況の測量。東側調査区、5層掘削。見学会準備。

9.27　午前、**出町中学校遠足75名見学。**

午後、東側調査区、竪穴建物の畦内の遺物測量・張り床・かまど周辺の清掃。東側調査区、西部分の5層掘削。打製石斧数点出土。西側調査区、東南部分の5層掘削、遺構検出。

9.28　東側調査区、竪穴建物の写真撮影のため、遺構清掃、タワー写真撮影。図化等。東側調査区、西部分の5層掘削及び遺構検出。西側調査区の焼土遺構完掘、測量。周辺の調査終了。

砺波市教育委員会視察。

9.29　東側調査区、竪穴建物の遺物取り上げ・床面清掃。柱穴の半裁、写真撮影。東側調査区、西部分の遺構検出と浅掘。西側調査区、焼土遺構付近の遺構確認、５層掘削。

9.30　東側調査区、竪穴建物の古地磁気のサンプル採取。畦の掘削・遺物取り上げ。東側調査区、西部分の遺構検出・浅掘。中央部分の５層掘削。５層掘削６層面の遺構概略観測及び遺構図作成。**富山大学理学部が古地磁気のサンプル採取。**

10.3　東側調査区、竪穴建物の床面清掃、遺物の取り上げ、畦の掘削。SI494焼土範囲セクション掘込み及びP1掘込み作業。出土遺物状況撮影。遺物取り上げ地点観測記録及び遺構詳細図観測作図。西側調査区、礫出土状況のラジヘリ空撮に備え、清掃。

10.5　東側調査区、竪穴建物のかまどの調査を中心に図化、掘削。遺物取り上げ。清掃。空撮の測量杭の設置。

10.6　正午に西側調査区ラジヘリによる空中撮影。西側調査区、全体の清掃、ベルコンの撤去等。空撮後、中央部の排水路にタワーを設置し、全体の写真撮影。東側調査区、竪穴建物の遺物取り上げ、測量。東側調査区、SD09西の２層掘削。西側調査区ラジコンヘリによる空撮。

10.7　東側調査区、竪穴建物床面上の遺物の取り上げ・測量、かまどの写真撮影。東側調査区、２・５層の掘削。遺構は柱穴が検出され、打製石斧も数本出土。

10.11　東側調査区、竪穴建物内柱穴等の遺構掘削開始。東側調査区、SD09肩部を残し、2・5層の掘削。石斧打製が数点出土。西側調査区、５層礫の出土状況の図化、番号をつけて保管する礫の調査。全体的には自然礫が主であるが、割れているものもあることから、数点番号をつけて保管。

10.12　西側調査区、5層中礫の取り外し。分割・剥片等が見られる礫は撮影、位置の測量。東側調査区、竪穴建物のかまどの遺物の測量、取り上げ等。竪穴建物内の柱穴の測量、図化、写真撮影。東側調査区、SD09西の5層を、肩部を残して掘削。

10.13　東側調査区、古地磁気サンプル採取準備。竪穴建物の**かまどの焼土の古地磁気サンプル採取のため、酒井教授来跡。**かまどの焼土を4,5箇所採取。東側調査区、SD09西の５層掘削。西側調査区、礫の取り外し終了、礫の撤去と土柱の清掃。

10.14　東側調査区、竪穴建物のかまどの掘削。東側調査区、SD09西部分の５層掘削。撹乱、礫が５層中に多くあり、遺構もさほどない。西側調査区、６層上面の遺構の半裁。遺構は柱穴が主で、規則性は見られない。東側調査区、竪穴建物のかまど遺物出土状況写真、測量。遺構全体の写真撮影、清掃。東側調査区、SD09西の北部分の遺構検出。西側調査区、遺構の半裁。断面の写真撮影開始。

10.18　西側調査区の基本層序記録のため、壁面清掃、図化作業。西側調査区、遺構半裁、写真撮影。東側調査区、竪穴建物かまどの掘削。床面清掃、写真撮影。東側調査区、SD09西側北部分の遺構検出。５層中に礫が多く含まれており、遺構はほとんど見られない。（株）アーステクト、地下レーダー探査デモ。パリノ社、土壌サンプル採取。

10.19　西側調査区、遺構半裁、写真撮影、図化。壁面の基本層序の図化。東側調査区、竪穴建物完掘写真の撮影が終了、床面掘削。かまどの遺物の取り上げ。東側調査区、SD09西側北部分の遺構検出。富山県埋文センター山本正敏氏来跡。

10.20　東側調査区、竪穴建物の張り床の掘削、遺物取り上げ。

遺構内から検出された柱穴（SB04）の半裁→図化。東側調査区、5層掘削。西側調査区、遺構半裁、写真撮影、図化。西側から中央部分にかけて、柱穴の密度が高い。基本層序の図化。

10.21　東側調査区、竪穴建物の張り床の掘削。SBの遺構周辺の清掃。東側調査区、SD09東側の5層掘削を本格的に開始。西側調査区、遺構半裁、写真撮影、図化。基本層序の図化作業。

石川県埋文センター横山氏来跡。国交省稲垣監督員来跡。

10.24　東側調査区、竪穴建物張り床の掘削。SB04の掘削、図化、写真撮影。東側調査区、SD09東側部分の5層掘削。遺構なし。西側調査区、遺構半裁、写真撮影、図化。西地区全体の8割の半裁作業を終了。基本層序の図化。

10.25　東側調査区、竪穴建物の張り床の畦の図化。SD09東部分の5層掘削。西側調査区、遺構半裁作業、写真撮影、図化。半裁作業はほぼ終了。

富山国際職藝学院・上野幸夫教授が建物遺構を中心に視察。

10.26　西側調査区は、SPの断面図図化、土層注記、調査終了、完掘作業。東側調査区、竪穴建物の張り床の図化終了→完掘作業。SI166・SB01写真撮影。東側調査区、SD09の東部分の5層掘削。SB04の遺構詳細図観測及び編集作業。

10.27　東側調査区、竪穴建物張り床除去の完掘写真撮影。SD09東部分の5層掘削。SI494・492西側からタワー写真撮影実施。SI494・492床下遺構詳細観測作図。西側調査区、東部分の写真撮影。北側の壁面の基本層序を調査するため、壁面の清掃。

パリノ・サーヴェイ千葉氏、土壌採取。

10.28　東側調査区、竪穴建物張り床除去の完掘写真撮影。SD09東側の5層掘削。遺構、遺物ともにあまり見られない。　東側調査区、北側壁面の基本層序の図化。SI493北側からタワー写真撮影実施。西側調査区、完掘作業、遺構断面写真撮影。

11. 1　東側調査区、竪穴建物内柱穴の調査。SD09西側の5層掘削・遺構検出。SB02掘削開始。遺構全景写真未撮影のため掘削を中止し、ドーナツ掘に変更検討を行う。水路切り回し部北に石錘他、打製石斧2点107～109を観測。SB04柱穴の上場詳細観測及び編集図作成。西側調査区、遺構完掘、写真撮影。

11. 2　東側調査区、SB04完掘写真撮影。東側調査区、SD09西の2層掘削・遺構検出。西側調査区、遺構完掘、清掃、写真撮影。

11. 3　東側調査区、全体清掃。SD09西の5層掘削・遺構検出。西側調査区、清掃、写真撮影。現地説明会の打ち合わせ、整理作業。

11. 4　東側調査区、全体清掃。午後タワー写真撮影。SD09両岸の5層を残していた部分の掘削、遺構検出。西側調査区、遺構完掘、清掃、断面写真撮影。現地説明会準備。

11. 5　現地説明会準備。

11. 6　現地説明会（2回目）75名参加

11. 7　東側調査区、竪穴建物の平面図化の確認・修正。SD09の5層掘削・遺構検出。SB04柱穴の遺構詳細図作成観測及び編集図作成。西側調査区、遺構完掘、完掘、清掃。

11. 8　空撮準備。SI491貼り床下完掘面の遺構詳細図作成観測及び編集図作成。打製石斧№110～118の位置観測及び取り上げ。

11. 9　空撮のため、全体清掃。東側調査区のベルコンをユニックで移動し、壁面のブルーシートの撤去。撮影コース対空標識設置及び測量。**砺波コミュニティ放送「ふるさと砺波の文化財」収録。**

11.10　11:00～13:00、ラジヘリ空撮。西側調査区の遺構完掘の図化作業を先行して行うため、対空標を設置。空撮終了後、タワー全体写真撮影。

11.11　空撮の写真撮影結果が後日判明するため、水路調査区の表土掘削と遺構検出、東側調査区の礫出土状況の写真撮影。東側調査区の礫の調査、測量対象の確認。地権者了解を取得に付き、水路調査区の掘削を開始。耕作及び圃場整備床土を人力掘削し、2層面を確認するが、キャタピラ跡が見られ撹乱の痕跡が認められる。遺構・遺物が確認できなかったので5層上面まで掘削。5層面にて2基の遺構プランを確認。検出状況写真撮影。

11.14　東側調査区の礫の除去作業、竪穴建物付近の5層掘削開始。水路調査区の清掃、5層掘削。

11.15　雨天中止。現場内の排水作業。

11.16　東側調査区のSD09付近の写真撮影のため、清掃。水路調査区、掘削作業はほぼ終了、測量・図化。

11.17　東側調査区、SD09付近の礫出土状況の清掃。撮影終了後に付近の礫の撤去、5層掘削。西側調査区、遺構完掘の写真撮影再開。中央竪穴建物部に拡がる酸化鉄層の分布状況観測及び作図。水路調査区は遺構の土層断面図化後に平面測量、5層掘削。

11.18　東側調査区、礫の除去、遺構検出。西側調査区、遺構清掃、写真撮影。水路調査区は5層掘削終了、土層断面図化。

11.20　東側調査区、5層掘削終了、遺構検出と浅掘。

11.21　東側調査区、遺構確認のための浅掘と、順次遺構半裁、写真撮影、図化。ほぼ半数近い遺構の調査終了。

11.23　東側調査区、遺構掘削、写真。遺構調査終了。

11.24　西側調査区、空撮のため清掃。完掘写真の撮影。

11.25　西側調査区、全体の清掃作業、残った完掘写真撮影。完掘写真はほぼ終了。SD09土壌サンプル採取。

11.26　東側調査区、空撮のため清掃。

11.28　明日空撮に向け、ブルーシートの撤去、土嚢袋の移動。ベルコン移動、タワー設置。

11.30　調査区内排水作業、対空標設置。正午前、実機空撮。

12. 1　調査区基本層序の写真撮影のため、壁面清掃、図化。風倒木痕の遺構掘削、中央部の排水路のSB03の確認掘削。西地区東壁面内SB03上面検出のため壁面掘込みを開始、プラン検出概ね完了。

12. 6　現場物品の片付け。竪穴建物の土壌サンプルの土嚢数量と整理作業を数人の作業員で実施。

12. 7　東側調査区東端の畦掘削、５層は掘削終了。風倒木痕の掘削。SB03の確認掘削、範囲が広いことが判明。SD09右岸側調査区東端部に盛り土材流出防止のため掘残していた５層土畦の撤去。SI494南東隅の掘削及び記録。断面図作成後、TSにて平面細部測量。

12. 8　SB03の断面図化、掘削。個別に写真撮影→完掘。風雨がひどくテントを張る。現場のベルコン、資材の撤去作業。整理作業日程の打ち合わせ。

12. 9　仮設テントを設置し、柱穴の遺構調査。規模の大きい柱穴で、素掘小溝も確認できた。

12.12　最後の風倒木痕掘削を行い作業を終了。SB03のかまどの遺構掘削、調査。付近を少し拡張して測量。SI1220焼土範囲を拡張調査、支脚と思われる礫群と複数の土器破片を検出。焼土はカマド跡と考えられ、竪穴建物跡と判断されるが、農業排水路の影響により全景及び軸方向は不明。竪穴建物の土壌サンプルの土嚢袋約4000袋を、砺波市埋文センターへ搬送。現場道具の撤収。

12.13　降雪中止。竪穴建物の土壌サンプルの土嚢袋約4000袋を、砺波市埋文センターへ搬送。

12.14　現場作業が完全終了。作業員に対する挨拶を砺波市教育委員会と、株式会社上智から行う。管理工程の測量を現場で行う。現地調査完了。

3　基本層序の解説

平成15年度調査区（4,200㎡，東西延長150m）の東に隣接して今年度調査区が位置している。平成14年度には本事業対象地全域の試掘調査を実施しており、断片的なトレンチ調査ではあるが、ある程度は地形状況・堆積層序を推定することが可能である。本節では、これまで3ヵ年の本調査範囲の基本層序の連続性や、地形・堆積状況の相違を把握することを目的とし、試掘調査の基本層序を手がかりとして把握に努めたい。

鍵　層　調査区は、河成堆積扇状地である庄川扇状地上の扇央部に位置しており、扇状地形に特有の堆積状況がみられる。この堆積状況を読み解く鍵層として、3ヵ年の調査対象地内において、普遍的に存在する5層（黒色有機質層・黒ボク土）・6層（地山シルト層）・7層（地山砂礫層）がある。これら層位を鍵層と位置付け、平成15・16年度調査区において同名の番号を付与している。よって16年度調査区の基本層序は、地表に近い位置から順に層位番号を付さず、鍵層である5・6・7層以外は現地調査段階で認識した順序で層位番号を付した。5層は黒色有機質層であり、縄文期の遺物包含層でもある。6層・7層は地山であり、6層は褐色シルト層、7層は砂礫層である。地表に近いところから5層→6層→7層の順で堆積している。

黒ボク土

遺物包含層

地山の変化　地山と認定した層位は、基本的に2層ある。地山シルト層である6層は、褐色～黄褐色～明黄褐色を呈し、黒色の5層とは色調が明瞭に異なる。15・16年度、試掘調査においてほぼ全域で存在していたが、所々で7層から漸移的に5層が堆積しており、間層の6層が堆積していない箇所があった。これは、地山砂礫層である7層の堆積状況を反映したものあり、埋没微地形の影響を受けたものと判断できる。庄川扇状地は河成堆積扇状地に分類され、その形成過程では、高水時ごとの礫の堆積、扇頂溝の形成、自然堤防の形成とその破堤、河川の転流、新しい流路ぞいの砂礫の堆積および自然堤防の形成、というサイクルが幾度となく繰り返されるという 。礫層（7層）は河成堆積扇状地を形成する主要な構成物であり、扇状地礫層（fan glomerate）と呼ばれるものである。庄川扇状地上で砂礫採取工事を見受けることがあるが、観察すると表層堆積物が地表から1～1.5m程度の深度まで堆積しており、その下は7層のような扇状地礫層が累々と10数m下まで続く状況である。河川の形成営力によって掃流運搬された礫の堆積の結果、扇状地を構成する7層が形成された。この段階では、地表は起伏に富み、無数の自然堤防（natural levee）や後背湿地（back lowland）が形成され、それらを縫うように河流（stream）の通る細長い溝状の凹所である大小の河道（channel）が走っていたことであろう。現在では平坦な水田景観が広がる庄川扇状地もかなりの起伏があったと考えられる。その7層により形成された微起伏の凹部に、河道から溢れ出た越流（overflow）・溢流によって細粒の泥や砂（6層）が堆積した結果、先述したように7→6→5層、7→5層と場所によって2種の堆積状況を生むことになったと理解したい。理解の一助として、試掘調査結果から埋没微地形の復元を試みている 。久泉遺跡の所在地は、かつて旧中田川と旧千保川に挟まれた微高地だったところであり、圃場整備以前までは河岸段丘が良好に確認できる状態であった。埋没微地形は複雑に入り組むが良好に遺構・遺物が検出された範囲（H15～17調査区）は、周辺よりややレベルが高い微高地状の地形であり、南北に幾筋か小河道が走ることが判明した。いわ

地山シルト

地山砂礫層

河成堆積扇状地

扇状地礫層

自然堤防

河流・河道

小字「中島」　ば島状の中洲もしくは川中島といった印象である。この微高地の範囲には、「中島」という小字が残っていることも興味深い。

黒ボク土　**黒色有機質層**　5層は黒色シルト（黒ボク土）で、調査区全体にわたって遺物包含層化しており、上面で遺構を確認できたことから上層遺構面として扱っている。15年度調査区A-4区で厚く堆積している5層は上部層の影響をほとんど受けておらず、いわゆる純粋に近い“黒ボク土”であった。黒ボク土とは、外山秀一氏によると大きく次の３つに区分されるという 。

まず、(１)いわゆる黒ボク層とよばれるもので、自然堤防状や中州状の微高地からその縁辺部にかけて分布する。次に、(２)低湿地や湿地で生成される有機質層で埋没した旧河道底でみられ、ヨシ属の高出現に代表される。さらに、(３)埋没した微高地からその縁辺部で生成された黒土層で、これはａとｂとに細分される。ａは(１)の生成後に畠地土壌化したもので、ウシクサ族とイネが多数検出される。また、ｂは(２)の生成後に水田土壌化したもので、ヨシ属とイネに代表され、旧河道底が水田として利用されている。

3種ある黒ボク土のうち、庄川流域で特徴的にみられるのは(１)と(３)ａであるという。すなわち、微高地からその縁辺部に分布する黒ボクと埋没した微高地からその縁辺部に分布する黒ボクが土壌化したものである。地山層（6・7層）は周辺より高い微高地地形を示していることは先に触れたとおりであり、5層の堆積もそうした地形状況に整合する。

“黒ボク土”という呼称からも想像できるように、手で触れるとフカフカで空気を多く含み、粘性はほどんどなく、水の浸透率も高い。掘削・検出を伴う埋蔵文化財調査に適している土壌である。調査員・作業員にやさしい土質である。

6・7層から漸移的に5層が堆積しており、長い時間を経て堆積していったことを物語る。佐瀬 隆氏と細野 衛氏は、黒ボク土層の生成について必要な主要自然条件を「テフラ」「温暖湿潤気候」「草原植生」とし、森林破壊などの「人為」の関わりを指摘している 。「母材の緩慢な堆積と腐植の集積」という過程で生成される黒ボク土が黒いのは、「テフラ」の風化により生じる「活性アルミニウム」の役割によるものであり、森林植生では発達しないという。5層は、外山氏が指摘したようにテフラに起因しないタイプの黒ボク土であるため、単純に比較できないが草原植生により生成されるという構造は同じではないか。調査区にはいくつもの巨大な風倒木痕を確認しているが、縄文期という時間軸を考慮した場合、森林と呼ぶほどの植生であったかは疑問である。外山氏のプラント・オパール分析により「微高地から後背湿地にかけての緩傾斜地にススキやチガヤなどのウシクサ類が繁茂する草原」であったことが証明されている。久泉遺跡では、「草原植生」が黒ボク土生成の主要条件であるということが可能である。

草原植生

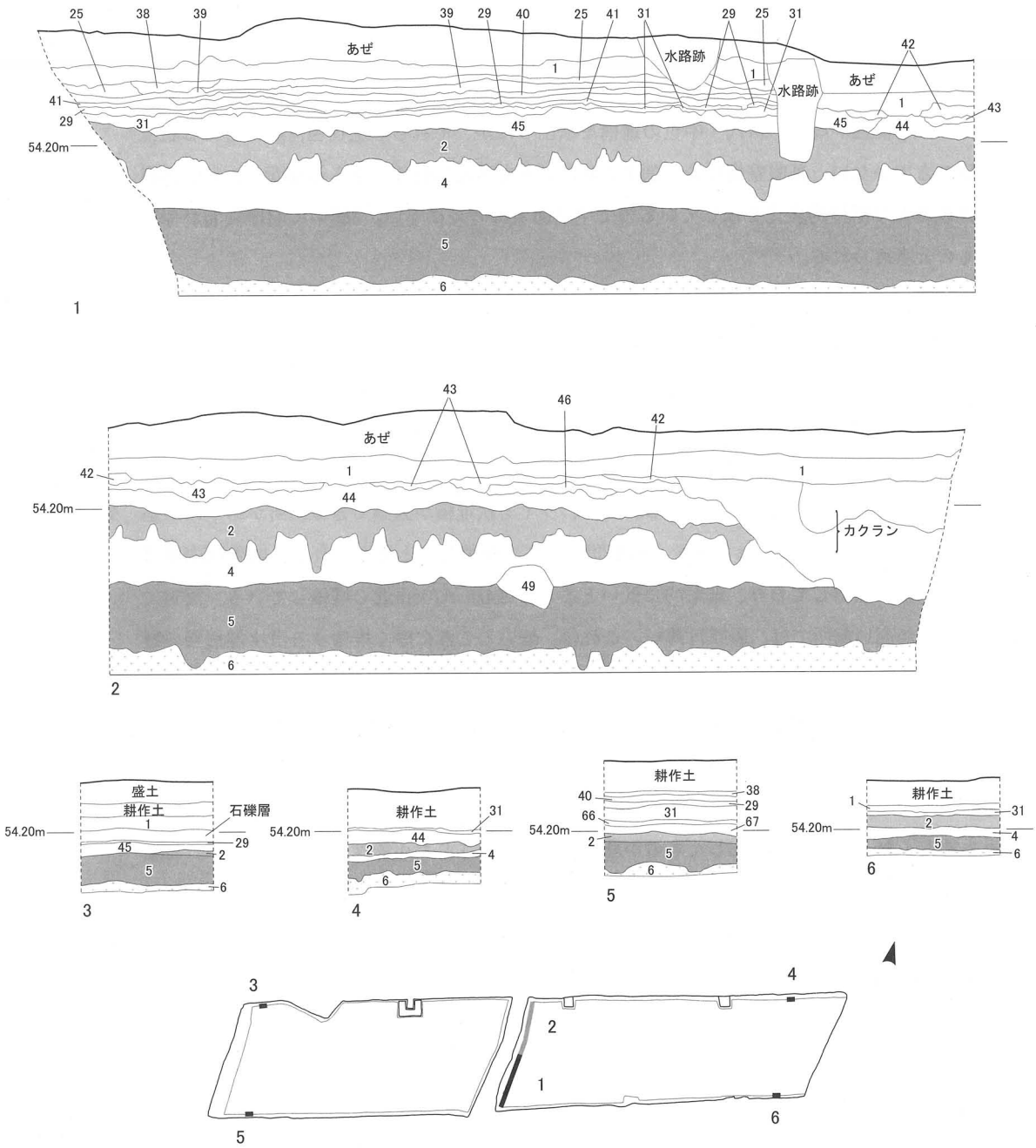
調査区（H15～17調査区）全体を通して、5層は縄文期の遺物包含層化している。遺物は、漸移層の上縁から出土し始め、5層中位から上部に集中する。縄文土器年代では、中期中葉（上山田・天神山式）から後期後葉（八日市新保式）にあたる。縄文期遺物包含層を傍証すべく、5層の土壌サンプルによる放射性炭素年代測定（β線計数法＝液体シンチレーション法）を実施した 。結果、15年度調査区で約2,100年～3,300年前、16年度調査区で約3,300年前（第４章第１節，p182）という年代値を示した。これは、出土遺物年代ともよく整合する。

また、調査区（H15・16）全体では一定した堆積状況ではなく微地形により堆積厚が大きく変化していたが、H16調査区では層厚30～50cmと安定している。

5層の上面・下面で遺構を確認したため、それぞれ第2遺構面、第3遺構面として扱っている。次節でも詳細に触れるが、各遺構面はあくまでも遺構を認識しえた面であり、各期の旧地表面としての認識はない。第2遺構面は、遺構深度が浅く、さらに上層からの掘り込みにより形成された可能性が高い。古代・中世の遺構を検出したが、それらの遺物包含層にあたる層位を確認できていない。基盤整備により削平されたことも考えられる。第3遺構面は、5層と6層の層界にあたり漸移的変化を示しているので生活面とは考えにくい。5層中に旧地表面が存在するものと考えられる。

洪水堆積層　調査区内全域で検出したわけではないが、スポット的に洪水堆積層と思われる層位が見受けられる。H15調査区東端A-4区で確認した旧河道はもちろんのこと、5層－2層の間に厚く堆積する4層がそれにあたる。褐色～黒褐色、試掘調査ではにぶい黄褐色を呈し、粒子の細かなシルト層である。5層との層界は平坦画然であり、急激な堆積環境の変化を読み取ることができる。河道からの越流・溢流による運搬物と考えられ、周囲より高い微高地にもかかわらず洪水を受けていたことを物語る。所々、ラミナ状堆積が観察できる箇所があったが基本的には4層を細分することはできず、短期間のうちに堆積したと考えられる。調査区南側は地山が緩やかに傾斜しており、地形的に低いところでは4層が70cm近く堆積している。反対に地山レベルが高い箇所では、層厚は薄い。これは、低いところに厚く堆積する洪水堆積層の特性をよく示すものと考えられる。4層の洪水層が堆積した後、再び黒色有機質層（2層）が堆積する。地形的安定性を取り戻し腐植・集積を繰り返し黒色土が堆積したもので、5層形成時と堆積環境はさほど変化がみられないようである。この黒色土は、H16・17調査区においてのみ見られるもので、H15調査区にはない。間にある旧河道により地形的な変化から堆積しなかったとも考えられるが、本来存在したものが基盤整備で削平された可能性が高い。SD212の断面では、4層を掘り込んで形成され、2層により埋まったのちに再び2層上層から掘り込む状況が確認できる。調査区全体を通して、2層から表土層までの層位が少ない。表土は水田耕土であり、その直下は基盤整備の盛土である。表土下各層の層厚も薄く、表土に古代・中世遺物を含むことから、かつて存在した層位が何らかの要因で削平された可能性もある。　（野原）

ラミナ状堆積



基本層序

1 灰白色シルト(10YR7/1) 一部盛土 耕作土 しまりよい
2 黒褐色シルト(10YR2/2) 有機質層 遺物包含層 炭化物数mm～1cm程度のもの含む
橙褐色.黄褐色の数mmのブロック多く含む 密
4 褐色シルト(10YR4/4) ほぼ単一の層であるが暗褐色ブロック少量含む
洪水堆積層であり無遺物層
5 黒色シルト(10YR2/1) わずかに粘性あり 数mm程度の小礫多く含む
2～3mmの炭化物微量に含む
遺物包含層 有機質層
6 黄褐色シルト(10YR5/6) 地山シルト
7 暗褐色シルト(10YR3/4) 地山砂礫

25 にぶい黄橙色シルト(10YR6/4) 圃場整備時の盛土 しまりよい
29 黄橙色シルト(10YR7/8) 鉄分沈着ありしまりよい
31 明黄褐色シルト(10YR7/6) 数mm程度のマンガン微量含む
38 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 灰白色ブロック含む 盛土
39 灰黄褐色シルト(10YR6/2)
40 にぶい黄橙色シルト(10YR7/2) 盛土層 しまり強い
41 にぶい黄褐色シルト(10YR5/4) 盛土層
42 にぶい黄橙色シルト(10YR7/2)
43 灰黄褐色シルト(10YR4/2) 灰白色ブロック(10YR7/1)40%+明黄褐色粒20%含む 床土
44 暗褐色シルト(10YR3/3) 黒色有機質土 遺物は含まない
45 褐色シルト(10YR4/4) 明黄褐色の1cm程度のブロック2～3%含む 炭粒微量含む
49 黒褐色シルト(10YR3/2) 黄褐色粒が微量に混入
66 黒褐色シルト(10YR3/1) 黄褐色の数mmブロック10%+黒褐色の数mmブロック5%含む
67 黒褐色シルト(10YR3/1) 黒褐色シルト(2層)のブロックを含む 遺物は含まない

0　5m

図25　久泉遺跡　基本層序（S＝1：100　垂直方向S＝1：50）

4　第1遺構面　（中世-近世期）

概　　要　第1遺構面は、2層上面において確認した。試掘調査で確認できず、表土から5層上面まで掘り下げている中で、溝遺構らしき輪郭を見つけたので掘削を止め、精査したところ面的に広がりが認められたので遺構面として扱うことにした。

溝遺構

遺構の配置　基本的に溝遺構が主体を占めるが、調査区西側にやや規模の大きな土坑が2基（SK158, SK165）あった。土坑は遺物が検出されず土相も他の遺構と異なることから、近代の可能性が高い。溝遺構は調査区東側、西側で数条確認した。東側の溝は、SD147-148とSD149-152の2条が交差している。それぞれ単独で存在した可能性もあるが、切り合い関係が確認できなかったので近い時期に埋没したことも考えられる。西側の溝は、SD158とSD161が平行するように北西方向に走り、SD158と交差する位置にSD157があるが撹乱により新旧は不明である。

土坑2基

いくつか走行する溝の中で、近代絵図と重なるものがある。北西方向に走るSD150～152とSD158は、明治10年の『石川縣下第五大區小四區越中國礪波郡久泉村用水見取繪圖』[1]に「今用水」とあるものと位置的にほぼ整合する。近世用水史の規模や形状を知る上で検討すべき資料である。

久泉村用水見取絵図

第1遺構面の遺構内からは古代、中世、近世の遺物が出土するが、第2遺構面の年代と絵図等の関係から、遺構の帰属年代は中世もしくは近世と考えられる。中世後期から漸移的に展開したと考えられる砺波平野特有の散村形態は近世期に入り、発達した。遺構面から溝、土坑以外の遺構が全くないことは少なくとも奈良・平安期以降、調査区が居住空間として土地の利用がなされなかったことを示し、散村という集落形態の形成過程を考える上で示唆的である。

散村形態

溝（ＳＤ55,145-149,151,152,156-158,161,162,168）　〔図26・27・28・29　図版5・43・44〕

概　　要　位置関係は上記のとおりである。SD151・152は埋没後のSD09を切って造成されたが、南東方向に地形的に高くなるので途中で消えている。地形的に南が高く北が低い扇状地地形なので、流路方向は自ずと明らかである。遺物は古代が主体だが、古代包含層である2層を掘り込み造成されているため混入したと考えられる。SD146・147・149は竪穴建物が集中する場所の上層に位置するので、遺構内覆土からの混入品かもしれない。

遺　　物　古代、中世、近世期の遺物がある。須恵器は杯、杯蓋、壺、壺蓋がある。1～3は須恵器杯である。4は杯蓋で、口縁端部を小さく折り返す。5は土錘である。6は小型有台杯で高台が内端接地となる。7は珠洲の壺体部である。8は須恵器の短頸壺に伴う蓋と考えられる。外面が降灰し、口縁端部を三角形に折り返している。9は須恵器壺の体部である。10は珠洲の擂鉢である。内面に使用のため摩耗した卸し目が残る。底部のみ遺存のため詳細年代は不明である。11は越中瀬戸の皿で、内外面に鉄釉の漬け掛け、削り出し高台である。12は鉄滓である。須恵器はⅣ・Ⅴ期に相当し、8世紀後半から9世紀前半の年代を与える。中世・近世においては遺物が細片のため、詳細年代は与えられない。

1）佐伯安一氏のご教示により図面を検討した結果、近世溝であることが判明したものである。

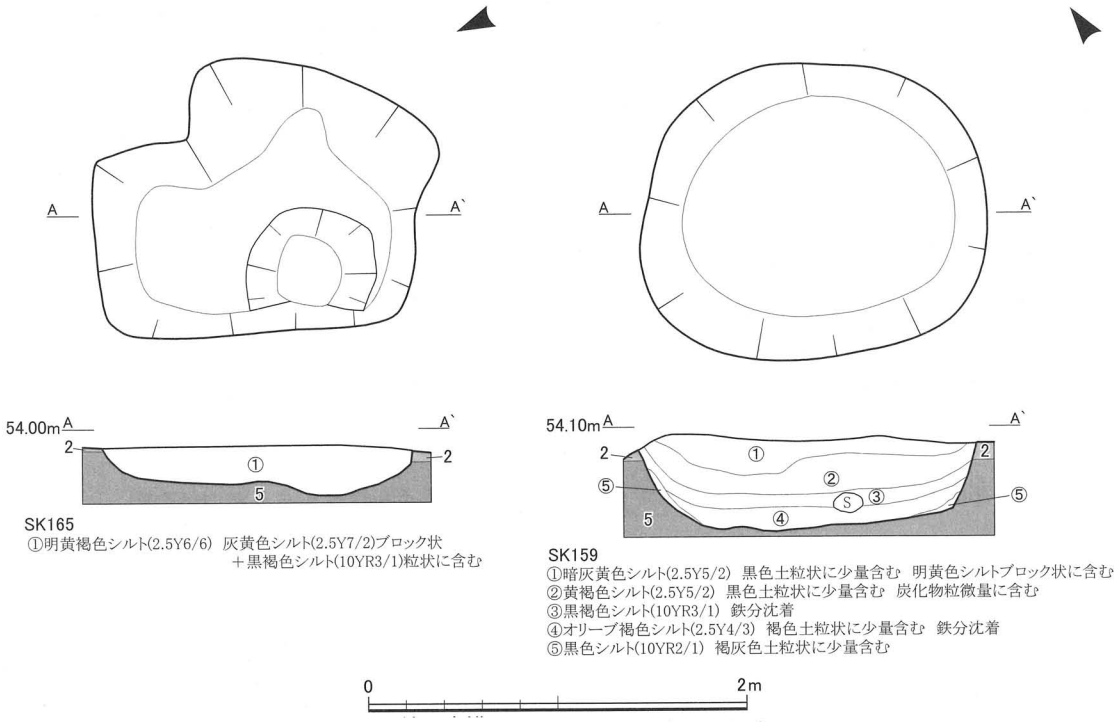


図26　第1遺構面　SK159　165（S＝1：40）

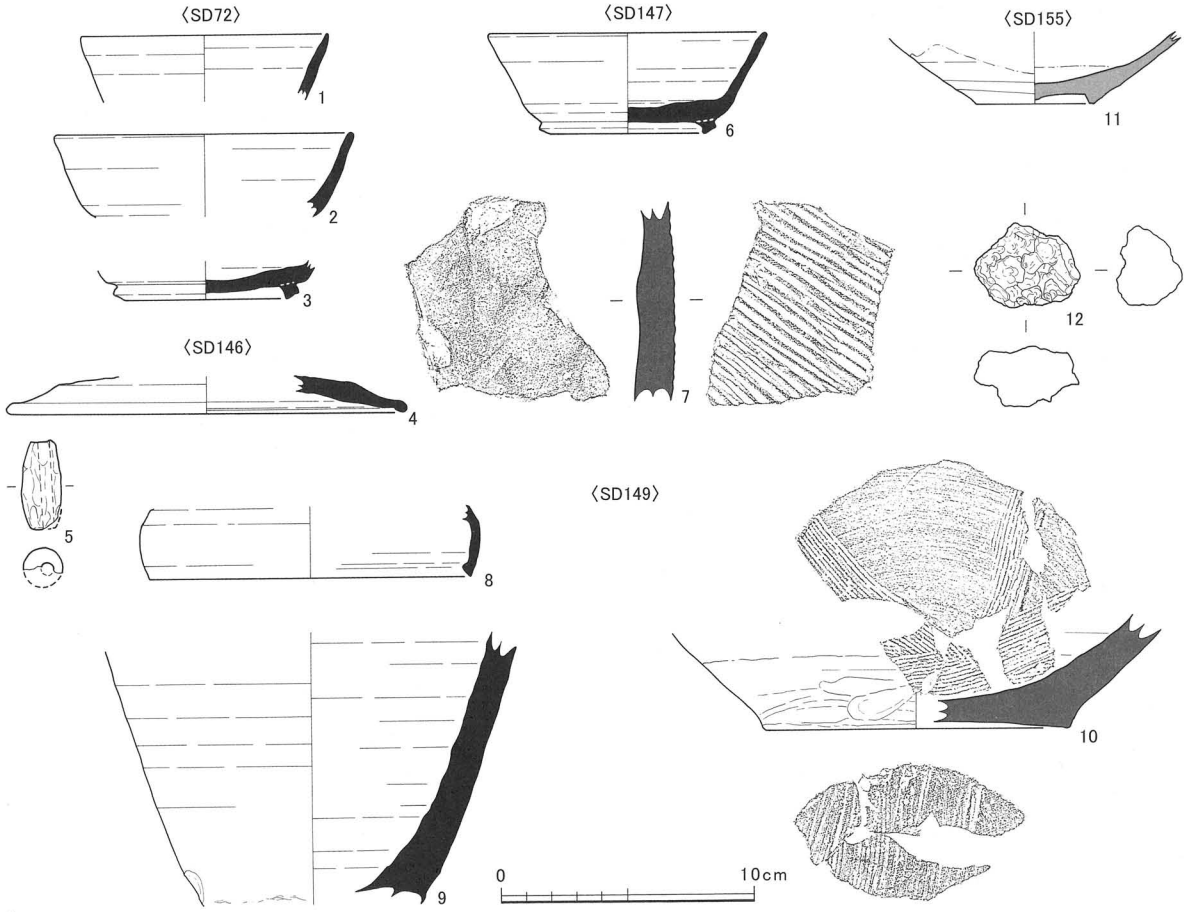


図27　第1遺構面出土遺物実測図（S＝1：3）

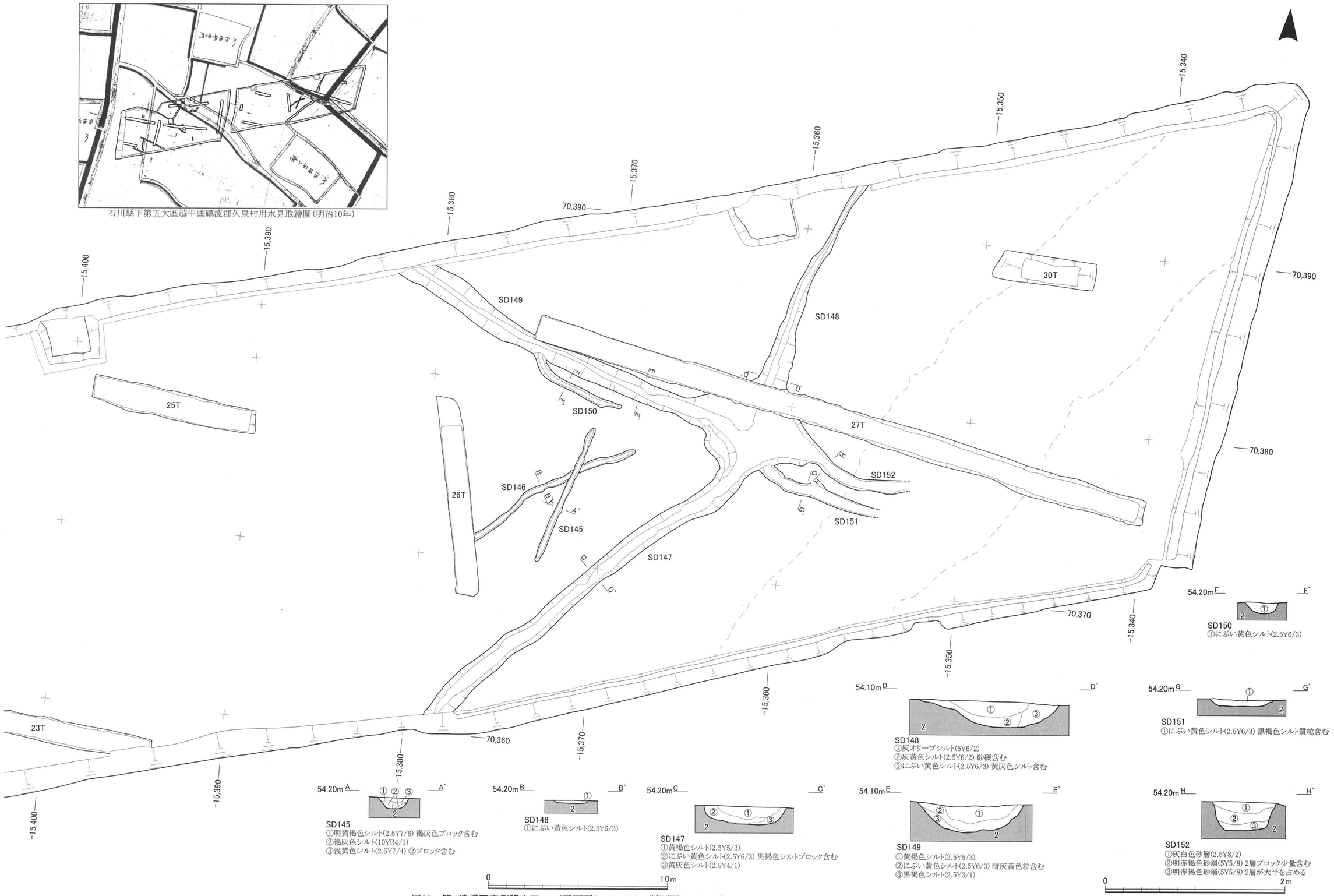


図28　第1遺構面東側調査区SD（平面図S＝1：200　断面図S＝1：40）

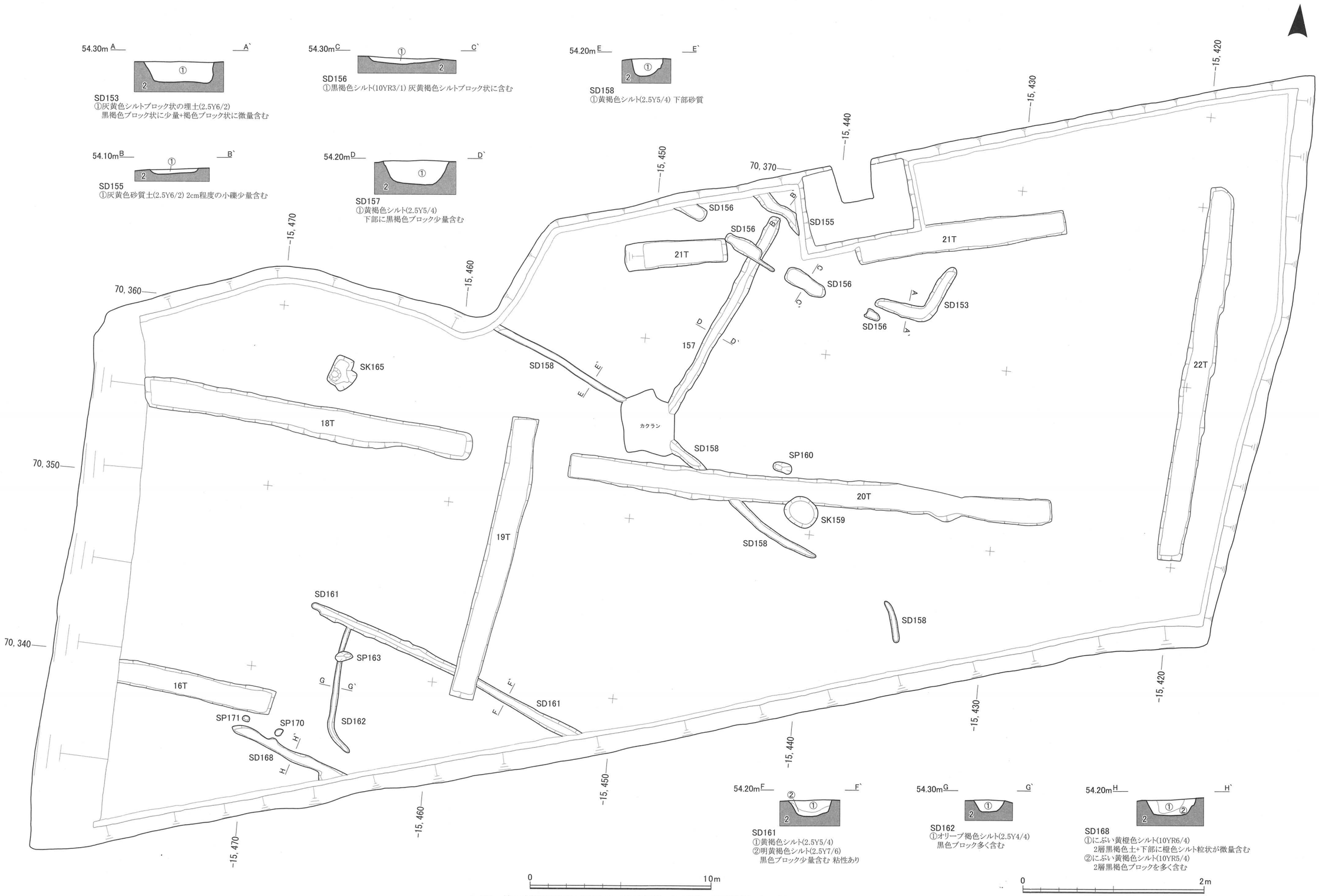


図29　第1遺構面西側調査区SD（平面図S＝1：200　断面図S＝1：40）

5　第2遺構面　（奈良・平安期）

概　　要　第2遺構面は、古代遺物包含層である2層下面・4層上面および5層上面で確認している。4層は洪水起源の砂質シルト層であるため、地形的に低い部分（調査区中央付近）にしか堆積しておらず、大半の遺構を5層上面で検出している。もっとも遺構内容が充実しており、掘立柱建物、竪穴建物、大溝、溝、土坑、ピットを検出している。中世期の遺物が多少散見されるが、帰属時期は概ね奈良時代後半から平安時代初頭（8世紀後半～9世紀前半）と捉えたい。

遺構の配置　東側調査区に北東方向に流れる大溝ＳＤ０９が本遺跡の主要遺構である。これは16年度調査区で確認したＳＤ０９の上流部分にあたる。長大で規模が大きいため、試掘段階では自然河道と思われたが、遺跡内でも地形的に高い場所を縦断しており、埋没と再掘削を繰り返している覆土状況等から人工的な構造物と認定した。開削年代は明らかでないが、帰属時期は古代～中世期と考えられる。大溝の役割が本遺跡の性格を知る鍵となる。また、今年度調査では集落遺跡として必要条件である居住施設が多数検出され、掘立柱建物5棟、竪穴建物13棟を数えた。建物遺構は、東側調査区に集中する。これまで市内における奈良・平安期の建築遺構は、宮森新北島Ⅰ遺跡[1]の掘立柱建物1棟と増山城跡（法花坊峠遺構）[2]の竪穴建物3棟しか検出されておらず、1遺跡の遺構数では他を圧倒する。掘立柱建物4棟（SB01・02・03・04）は側柱建物で東側に集在し、SB02のみ東西方向であるが他の3棟は南北方向に主軸をとる。規模や柱間距離、構造に統一性がない。中世期と思われるSB05は総柱建物で、西側調査区にある。竪穴建物（SI97・166・167・395・491・492・493・494・495・550・600・620・650・1220）は規模や構造の型式が数種ある。SI166は、平面積が大きな竪穴建物でSB01に併設する。柱を9本備え、柱間に小溝を巡らす構造で特異な存在である。南に小規模で無柱穴の建物SI97・167が並ぶ。SI166とSD09の間にSI491・492・493・494・495が密集している。SI493はSI495に切られ、それらの埋没後にSI492が造られる。SI491・492・494は南北に整然と並び、計画的配置を思わせる。西側調査区には検出例の少ない竪穴外柱穴をもつ竪穴建物SI620、SI550がある。竪穴建物廃棄後、程なくして素掘小溝が縦横に造成される。性格は不確証だが、格子目状に配置される状況や一定の間隔をもつことなどから、なんらかの造成意図があって造られたと考えられる。自然科学分析の結果から、畠跡とは認められない。

大規模な溝
居住施設検出
掘立柱建物
竪穴建物
竪穴外柱穴
素掘小溝

時　　期　建物遺構出土遺物はSI494埋土の蛇紋岩製磨製石斧（図107，181）やSD09・SK556出土の中世遺物を除いては、大部分が奈良・平安期に属するもので、年代は8世紀後半から9世紀前半に帰属と考えられる。カマド焼土の古地磁気測定（p.218～）および出土炭化物の放射性炭素年代測定（p.182）で導かれた年代とも齟齬がない。翻れば掘立柱建物・竪穴建物等の各遺構は時期差があまりなく、短期間のうちに建設・廃棄されたと理解できる。素掘小溝は建物遺構群と近似した覆土で、出土遺物にも新しい要素がないので建物廃棄と時期差がほとんどないと考える。遺跡内で継続的に使用された遺構は、SD09だけとなる。

奈良・平安期

SB02からは本遺跡で初めて弥生土器（法仏期）を検出している。

弥生土器

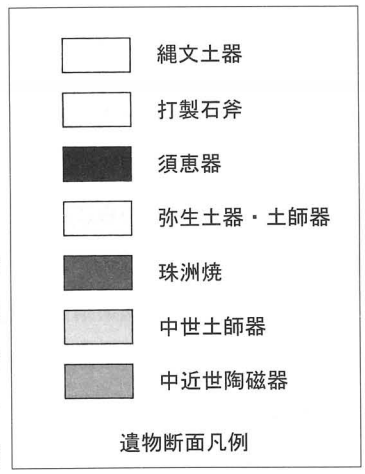
1）富山県教育委員会 1978『富山県砺波市宮森新北島Ⅰ遺跡緊急発掘調査概要』

2）砺波市教育委員会 2002『富山県砺波市増山城跡発掘調査報告』（林道増山城跡線拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告書）

掘立柱建物の調査手順　素掘小溝以外は切り合う遺構が少なく、周囲にピットが密集する状況ではなかったので建物の抽出は比較的容易だった。遺構認定の手順を説明する。まず、遺構検出段階に平板測量で作成した概略図（1/100）を基に、平面的に柱の並びを検討する。見当がつくと、すべての柱穴を約5cm段掘りする。単なる小さな落ち込みでないか確認をして、次に切り合いや柱根痕跡をみる。その情報を基に柱の並びを決め、基本的に桁行方向に半割用の糸を張り、半掘する。断面観察をするには断ち割りが最良の方法だが、第３遺構面の影響を考え、一般的な半掘とした。次に断面を観察、図化（1/20）する。基本的には柱根痕跡の有無、柱のあたり、底面形態を確認し、柱穴であることを追認し、掘立柱建物と認定する。平面による確認→断面による追認、の流れで柱掘り方を把握する。ピットが大量に検出される遺跡とは違い、本遺跡は遺構密度が希薄であり、掘立柱建物を構成する柱穴の抽出作業に時間を要しなかった。唯一現場で認識しえなかったのは、SB05である。整理時、南北主軸の掘立柱建物が多いので注意しながら平面図を眺めていたところ、等間隔に配列するピット群を見つけた。それぞれの断面図を確認したところ、柱根痕跡がないものの、底面形態が平底であり、掘立柱建物と認定した。

段掘り
柱根痕跡

竪穴建物の調査手順　竪穴建物はある程度の深さをもつ遺構であり、多くの遺物が出土するので、認識するのは困難を伴わない。当該期の平面形態は方形が基本だが、大きさに多様性がある。範囲確認のため、検出後十字にサブトレンチを入れる。壁面や床面、深度を確認したのち、各辺の中点を結び、土層観察用の十字畦を残し、四分法で４区画を掘り下げる。遺物は残し、全点記録する。カマドを検出し、断ち割り調査。床面まで掘り下げ、断面図（1/20）作成ののち十字畦を外し、遺物出土状況図（1/10）作成、写真撮影。床面の硬化、焼土の広がり、粘土等を確認する。遺物取り上げ後、柱穴を検出・掘削し、床面完掘写真を撮影する。再び十字畦を残し、貼り床および下層を掘り下げる。遺物は適宜図化・記録し、完掘となる。SI492を中心とする竪穴建物集中域は、遺物包含層と覆土が錯綜し検出に困難を極め、結果縦横に無数のサブトレンチを入れ、切り合い関係把握に努めた。



遺物の器種分類と編年指標　須恵器、土師器に関しては基本的に吉岡康暢[1]、田嶋明人[2]、北野博司[3]、望月精司[4]の各研究成果を参考とした。編年指標は古代北陸における共通編年軸として位置付けられる田嶋編年を使用し、暦年代観は望月の南加賀地域における年代観に拠った。以前市内の安川天皇窯を整理した際に高松・押水窯跡群中の正友ヤチヤマ窯との共通点を指摘したことがある[5]。このことから土器編

田嶋編年

1）吉岡康暢　1983「第２章　奈良平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会
2）田嶋明人　1987「第３節　古代土器の編年軸設定」『篠原遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
　同　1988「古代土器編年軸の設定」『北陸古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
3）北野博司　1989「１北陸における須恵器生産　(1) 編年の概要」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会
　同　1999「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究第8号　須恵器貯蔵具を考えるⅠ　つぼとかめ』
4）望月精司　2006「第Ⅴ章　A地区とD地区で出土した古代遺物」『額見町遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
5）砺波市教育委員会　2005『安川天皇窯跡発掘調査報告』

0 10 20m

図30　第2遺構面全体図（平面図S＝1：300）

年上でも同窯跡群の研究成果を参考にした部分がある[1]。須恵器の器種名は、右表（表2）のとおり。貯蔵具は北野の分類に従うが、煮炊具については、宇野隆夫が用語混乱の回避を目的として「深い煮炊具を釜、浅い煮炊具を鍋」と提案した姿勢に賛同し、長胴甕＝長胴釜、短胴甕＝短胴釜と分類する[2]。各部名称は、主に中村浩の呼称[3]を基本とするが、通俗的に使用している用語も含んでいる。法量という用語は本来仏像の寸法を表すもので土器への適用は馴染まないが、代替の用語も見当たらないため、これまでの学史を尊重し使用する。

表2　器種名一覧

本書の名称	田島分類
無台杯	杯A
有台杯	杯B
椀	椀A
鍋	鍋A
長胴釜	甕A
短胴釜	甕A
短頸壺	壺B
長頸瓶	台付長頸瓶（瓶D）
横瓶	横瓶
甕	甕

1）吉岡康暢　1991「第2章　須恵器窯の調査」『日本海域の土器・陶磁〔古代編〕』六興出版
　折戸靖幸・川畑　誠　1994「高松・押水窯跡群の8世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究第4号』北陸古代土器研究会
2）宇野隆夫　1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告第40集』国立歴史民俗博物館
3）中村　浩　2001「参考資料」『和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版

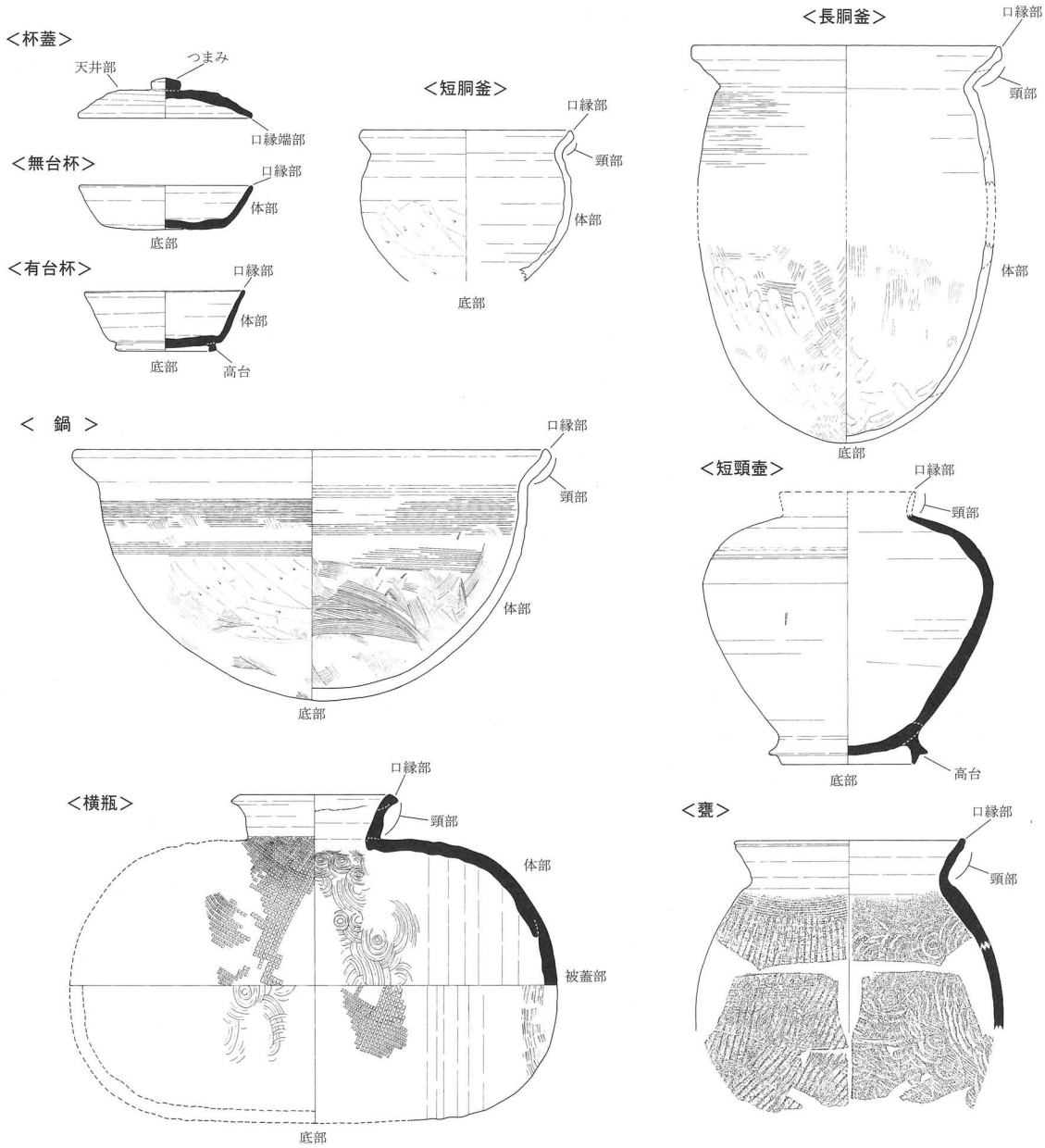


図31　須恵器・土師器の器種名と各部分名称

(1) 掘立柱建物〔Embedded-pillar building; Posthole-type building〕

掘立柱建物（ＳＢ０１）　〔図32・33・34　図版9・42・43・45〕

位　　置　調査区中央東側、建物遺構が密集する位置にあり、SI166・SI167に近接する。同じ掘立柱建物であるＳＢ０３とは平面的に平行し、長軸を南北に取る。ＳＢ０２とは長軸が90度異なり、Ｌ字形の平面位置にある。洪水堆積層４層上面で確認されたが、古代遺物包含層２層からの掘り込みと考えられる。

重複関係　上部が後世の河道跡に削られるが、重複関係にある遺構はない。排水溝工事によりSP299・300・301が掘削される。

規模と構造　平面は矩形（長方形）を呈する。建物規模は桁行４間の総長10.6～10.9m、梁行２間の総長5.7～5.8mであり、平面積63.2㎡を測る。南北方向に長軸をもつ側柱建物（身舎建物）である[1]。妻側から内１間の位置に２基の遺構（SK233・SK476）を検出、当初は別遺構として扱っていたが平側・妻側柱穴からの距離がほぼ１間に相当することから、掘立柱建物を構成する遺構として扱うことにした。SP445とSP295・296の間に柱がないので総柱とは考え難く、SK233・476の掘り方の規模が大きいことや内１間にあることから、上屋構造（棟木）を支える棟持柱と考えたい。

側柱建物

棟持柱

平入・妻入の別は、確認できなかった。

柱　　穴　柱穴は調査区内で完結しており、総数14基である（切り合い関係にあるものを除く）。柱穴は、ほとんどが明瞭な柱根痕跡が確認できない柱抜取り穴である。図版に柱痕跡とあるのは柱自体の痕跡でなく抜き取られ柱痕跡が推定できるという表現である。柱掘り方の平面形態は、円形・楕円形・やや方形に近いものなど統一性がない。西桁行の柱（SP295・296、SP291・292、SP284・285・483）に切り合いがみられることから、柱の据え替えもしくは建て替えが行われた可能性がある。東桁行の柱穴は、柱筋の通りが悪い。柱間距離がばらつき、柱列が外にやや膨れるように湾曲する。これは、国衙・郡衙等の官衙遺跡ではあまりみられず、地方の集落遺跡に類例が認められるという[2]。集落における造営精度の低さを物語るものと考えられる。

また、切り合い関係にはないが西桁行が竪穴建物SI166東辺と一部共有する位置にあり、SP481・292・232・299を結ぶ平面（24㎡）がSI166（30㎡）の平面積に近い規模にある。出土遺物の時期差が明瞭でないことから、新旧関係を明らかにしないがSB01・SI166の同時期併設もしくはSI166がツノ屋的施設となる同一建物である可能性を指摘しておきたい[3]。

同時期併設

ツノ屋的施設

SP436は覆土上面に扁平な円礫がのっており、あたかも一旦埋めた後に礎石として使用したかのような印象をもつ。SP443は本遺構との関連が特定できないが、SB01周辺には他に遺構が皆無、そして覆土から焼成不良の須恵器杯が２枚重なった状態で出土したことから、建物の建設もしくは廃棄に伴う地鎮祭祀の可能性も考えられる。

地鎮祭祀

1) 山中敏史 2003「Ⅱ-5　建物遺構の区分」『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』奈良文化財研究所

2) 宮本長二郎氏のご教示による。

3) 上野幸夫氏のご教示による。

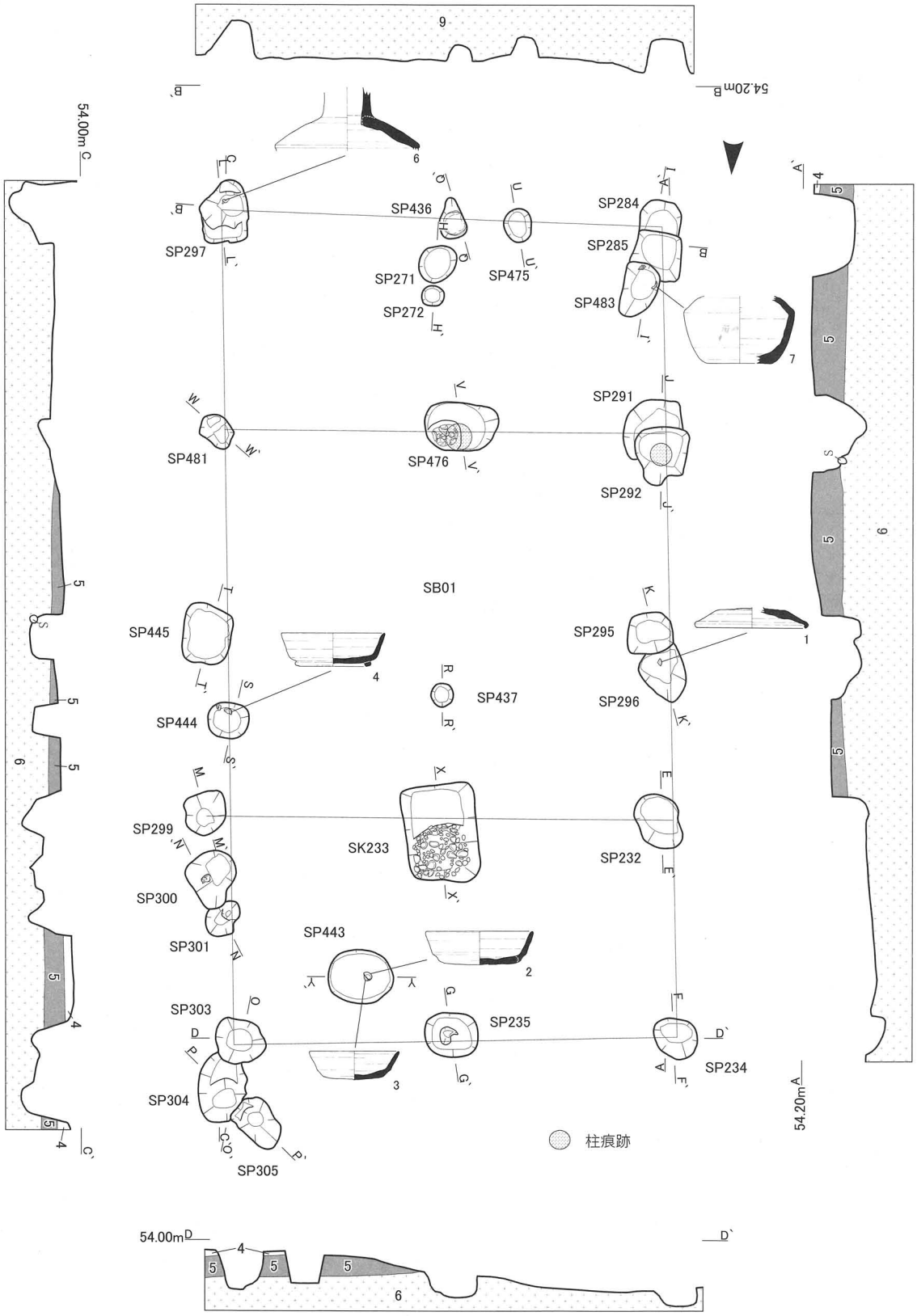


図32　第2遺構面　SB01（S＝1：80）

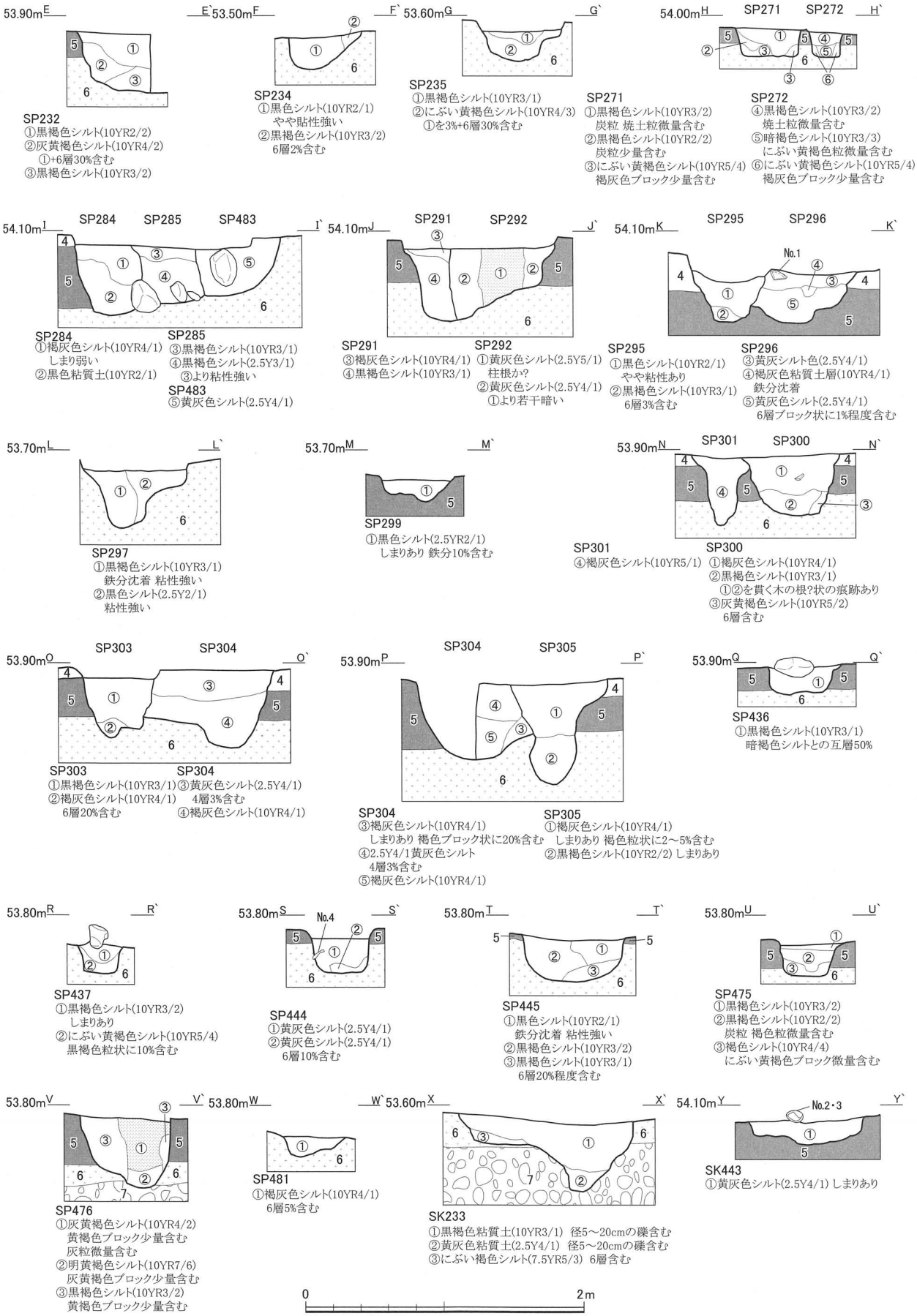


図33　第2遺構面　SB01土層図（S＝1：40）

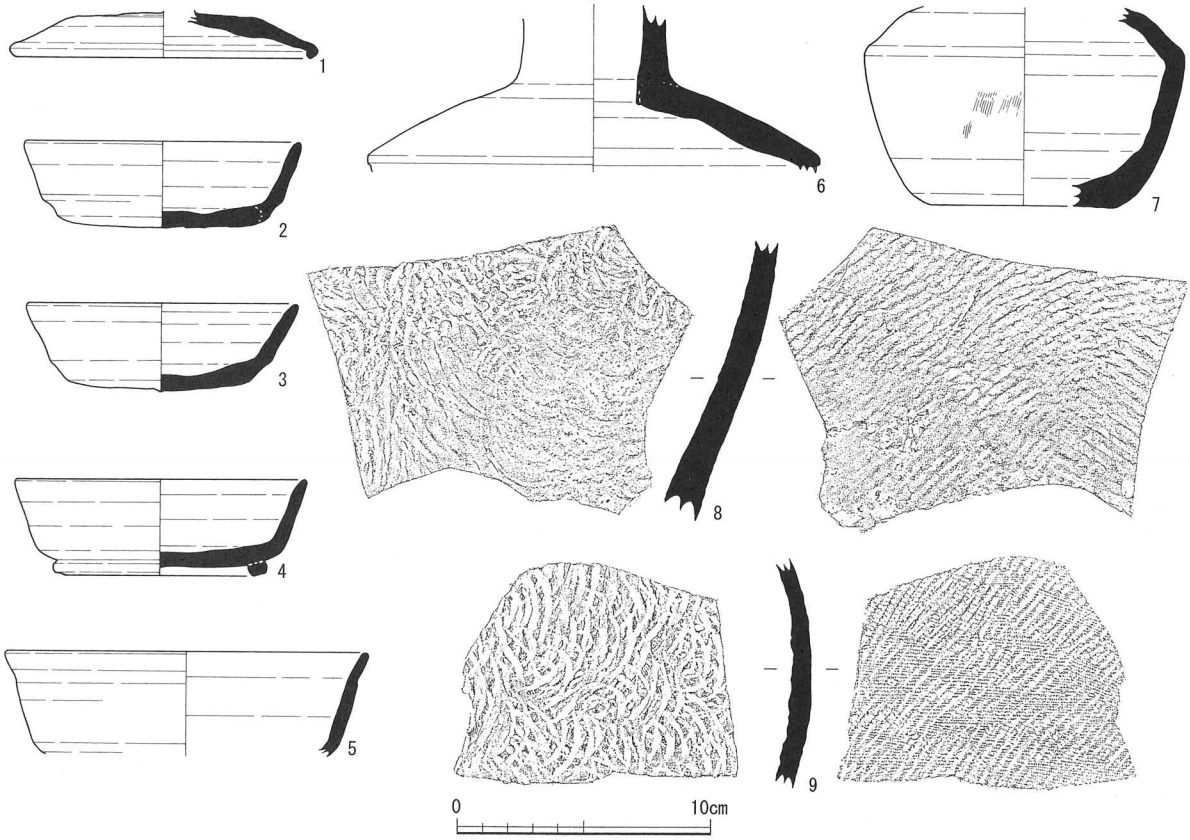


図34　SB01出土遺物実測図（S＝1：3）

遺　　物　1はSP296出土の須恵器杯蓋であり、つまみが欠損している。天井部は厚く、口縁端部は丸く返す。2・3はSK443中央中位から出土した生焼け状態の須恵器で、身が褐色を呈する。埋土は単層のため短期間の埋没が推定でき、埋納行為の所産とも考えられる。2は無台杯（杯A）で、体部が直線的に立ち上がるが底部との境で強い撫でにより段をなす。外傾度は65°、径高指数は31.9を測る。3は2と同型・同窯と考えられる無台杯で、体部が直線的に立ち上がるが、底部は丸底状となる。外傾度は68°、径高指数は29.2を測る。2・3とも口縁部外面に重ね焼き痕があり、正位の身に正位の蓋を乗せる北野博司分類Ⅰ類[1]より正位の身を連続して重ねるⅢ類（春日真実C類[2]）が妥当である。4は有台杯（杯BⅣ）で貼付高台は内端接地となる。外傾度は68°、径高指数は33.9を測る。5は口径15cmの大型の有台杯（杯BⅡ）で、体部が直線的に立ち上がり口縁部で外反する。杯類は総じて法量が小さく、Ⅲ期から続く食膳具法量の平均的小型化傾向が看守される。

生焼け須恵器
杯　A
杯　B　Ⅳ
杯　B　Ⅱ

6は長頸瓶の胴頂部から頸部まで遺存するもので、胴頂部の器壁が厚く、外面に濃緑色の自然釉が厚くかかる。7は小型の無台瓶類で、胴頂部・頸部・口縁部が欠損する体部片である。胴頂部の器壁が薄く、胴頂部から体部にかけて薄く降灰する。8・9は釜体部片である。ともに外面に平行叩き、内面に同心円文当て具痕を残す。9は器壁が薄く、外面に平行叩き後、刷毛状工具で整形を施す。

小型無台瓶

遺物年代は、Ⅳ2期（8世紀第3四半期）に帰属すると考えられる。

1）北野博司 1998「重ね焼きの観察」『辰口西部遺跡群』石川県埋蔵文化財センター

2）春日真実 1989「3　窯詰めの方法」『越中上末窯』（富山大学考古学研究報告第3冊）　富山大学人文学部考古学研究室

掘立柱建物（ＳＢ０２）　〔図35・36・37　図版10〕

位　　置　調査区中央東側、建物遺構が密集する位置にある。SB01とは平面的にＬ字の位置関係にあり、掘立柱建物の中でもっとも北に位置する。洪水堆積層４層上面で確認されたが、古代遺物包含層２層からの掘り込みと考えられる。

重複関係　遺構中央が後世の河道跡に削られるが、重複関係にある遺構はない。SP429とSP428、SP228とSP482はそれぞれ切り合い関係にあるが、柱の据え替え等の結果と考えられ、純粋に他遺構との重複はない。SP238は平成14年の試掘調査で掘削された。排水溝工事によりSP309の一部が掘削された。

規模と構造　平面は矩形（長方形）を呈する。建物規模は桁行６間の総長9.9m、梁行２間の総長4.3mであり、平面積42.6㎡を測る。他の掘立柱建物が総じて南北に長軸をもつのに対し、唯一東西方向に長軸をもつ。桁行・梁行ともに掘立柱建物の中でもっとも柱筋の通りが良い。

側柱建物　側柱建物（身舎建物）だが、SP237・256・392が身舎にあり、SB02に関係する可能性がある。SP237は棟持柱としての機能をもつ可能性もあるが、西側に対応する柱がない。河道により流失したとも考えられないので、SB01と同様に部分的な柱の据え替えや建て替えの可能性も考えられる。梁行の柱間は桁行のそれに比して大きいが、遺跡内の掘立柱建物において桁行の柱間はもっとも小さい。

柱　　穴　柱穴は調査区内で完結しており、総数で16基を数える（後世の削平による未検出1基を含む）。妻側東の柱穴は規模が大きく、西は小さく不揃いである。柱掘り方の平面形態は不正円形であり、不揃いである。柱穴は、SB01と同じく柱抜取り穴である。

遺構中央付近の柱穴数基は、旧河道跡で削られ柱のあたり部分がわずかに残るが、底の断面形態がＶ字底・丸底でないため柱穴と断定できる。SP229のみ柱掘り方が地山礫層（6層）まで到達しているが、これは柱の沈み込み防止によるものと考えられる。SP231・239・427底部には柱のあたり（柱型）と思われる痕跡がある。SP461・462・479・478も柱掘り方ではなく、柱のあたり部分を検出したのである。

沈み込み防止
柱のあたり

SP462に対応する柱穴は未検出だが、旧河道の深度を考えると流失したと認めたい。旧河道跡と重なる各柱穴の平面形態のばらつきも上部流失によるものと考えられる。

遺　　物　遺物出土は２点と少ない。1は南西隅の柱穴SP229出土の弥生土器である。弥生時代後期・法仏式期[1]の高杯杯部で、棒状脚部がつく形式と思われる。杯部中位で粘土帯を貼付し、段を施す。内面は摩耗でみえないが外面は刷毛状工具による整形後箆状工具による磨き調整を施す。3世紀後半に帰属する。2はSP228出土の土師器の短胴釜である。外反する口縁端部を上方につまみ上げ、外面を面取り整形する。口縁部内面に炭化物が厚く付着、体部外面にも煤が付着し、煮炊具としての使用が確認できる。Ⅳ期（８世紀後半）に相当すると考えられる。

法仏式土器
短胴釜

１は遺跡内で唯一出土の弥生土器があるが、遺構形成層位や周辺の包含層出土遺物を総合的に判断すると、土師器釜を本遺構の年代と捉えたい。

1）谷内尾晋司 1983「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学　石川考古学研究会々誌』石川考古学研究会

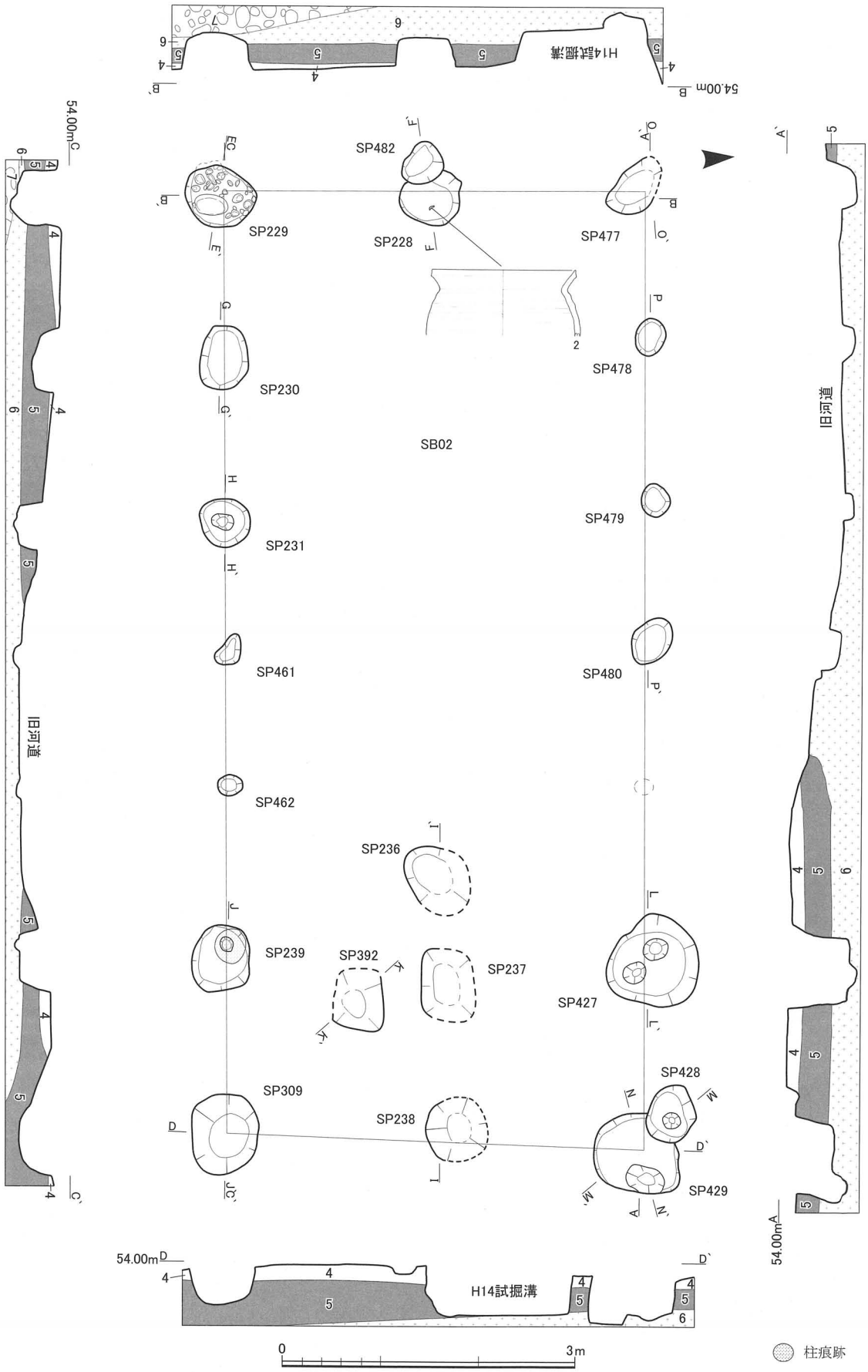


図35　第2遺構面　SB02（S＝1：60）

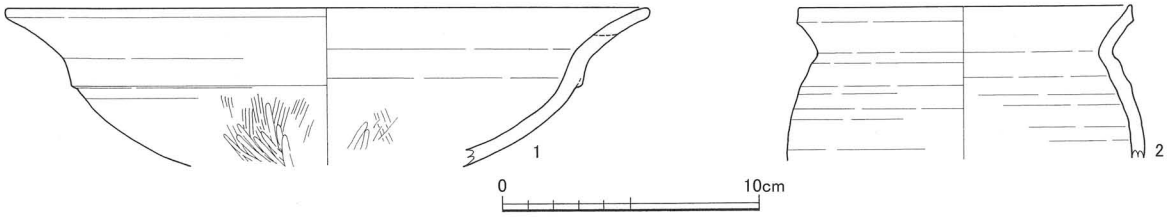


図36　SB02出土遺物実測図（S＝1：3）

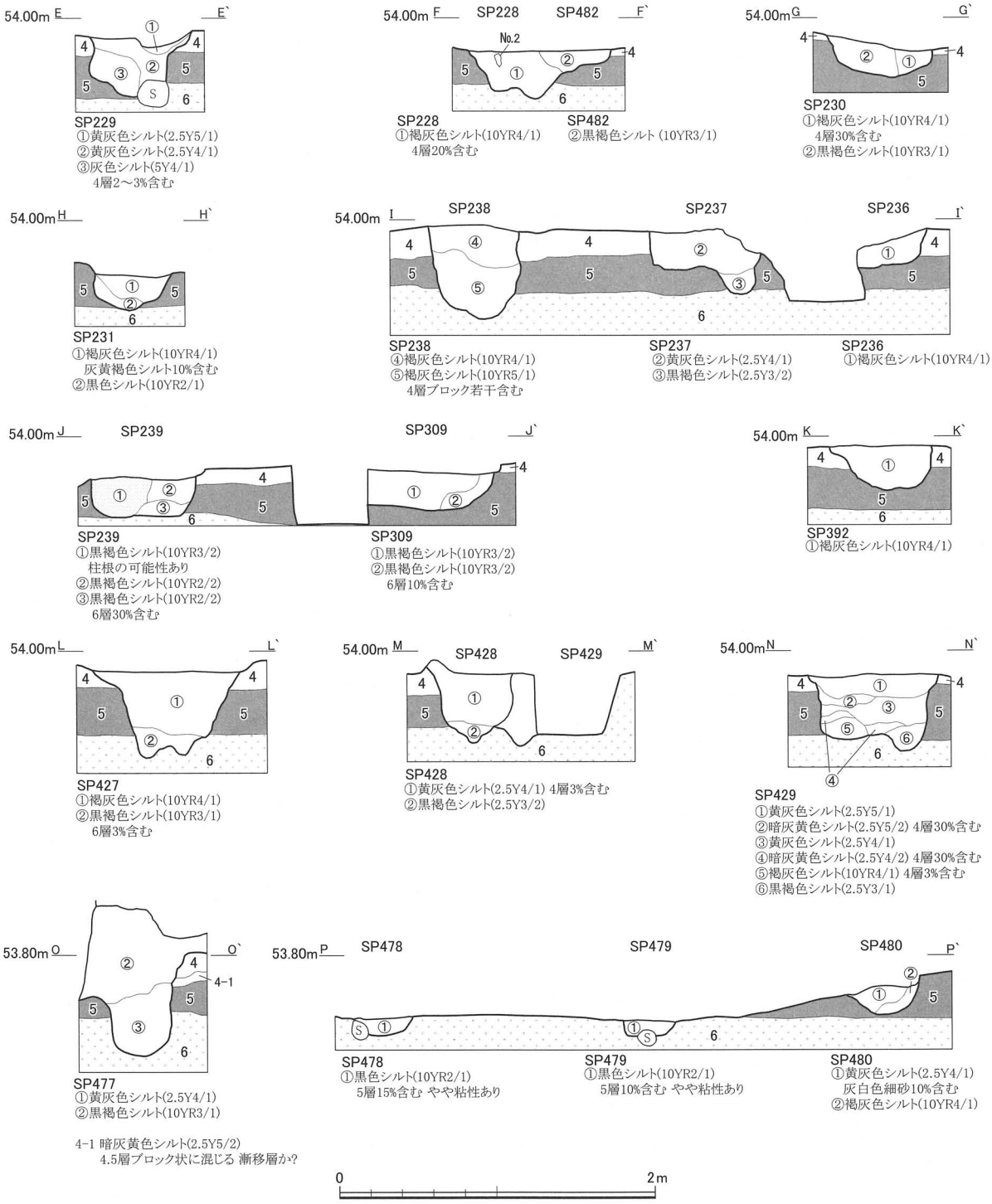


図37　第2遺構面　SB02土層図（S＝1：40）

掘立柱建物（ＳＢ０３）　〔図38・39　図版11〕

位　　置　調査区中央、建物遺構が密集する西端に位置する。

重複関係　上部が後世の河道跡に削られるが、重複関係にある遺構はない。

規模と構造　平面は矩形（長方形）を呈する。建物規模は桁行4間の総長11.1m、梁行2間（推定）の総長5.2～5.7mであり、平面積63.3㎡を測る。

この遺構は、通常の発掘調査手順で検出したものではない。調査区中央を南北に排水溝が走っており、調査対象外としていた。排水溝は、安全勾配を保って法面を造った。下層遺構面調査において排水溝を残した調査区中央畦の断面図作成時、柱穴らしき落ち込みを確認、柱穴が西側柱の可能性があるという認識のもと、排水溝を挟んで東側を限界まで掘り進むと同規模の柱穴群が姿を現した。このため西側柱は遺構と認識した段階で西半分は調査用排水溝で破壊され、排水溝により梁行の柱数が未確定であるが、梁行が5mを超えるため2間と推定する。

検出の状況

排水溝による破壊

柱　　穴　柱穴は10基である（梁行未確認2基を除く）。柱穴が単独1基で存在せず、それぞれ同規模の柱掘り方が併設する。これは建て替えの結果による可能性が考えられる。

建て替えの可能性

遺　　物　遺構内から出土した遺物はない。

SP516
①黒褐色シルト(10YR2/2) 4層ブロック状に10%+炭化物微量含む わずかにしまりあり
②黒褐色シルト(10YR2/2) 4層ブロック状に10%+炭化物微量含む 若干しまりあり
SP632
①黒褐色シルト(10YR2/2) 4層ブロック状に5%含む しまりなし
②黒褐色シルト(10YR2/2) 4層ブロック状に10%含む しまりなし
③黒褐色シルト(10YR2/2) 4層ブロック状に30%含む しまりなし
SP633
①灰黄褐色シルト(10YR4/2) 4層ブロック状に40%+黒褐色の数mm程度のブロック5%含む しまりなし
②黒色シルト(10YR2/1) 4層ブロック状に20%含む 若干しまりあり 微量の炭化物含む
③灰黄褐色シルト(10YR4/2) 4層ブロック状に5%含む しまりあり
SP636
①灰黄褐色シルト(10YR4/2) 4層ブロック状に5%+黒色シルトブロック2%含む しまりなし
②灰黄褐色シルト(10YR4/2) 4層ブロック状に20%+黒色シルトブロック20%含む しまりなし
③黒褐色シルト(10YR2/2) 灰黄褐色シルトブロック状に10%含む しまりなし
④黄褐色シルト(10YR5/6) 6層と鉄分10%含む しまりあり
SP637
②黒褐色シルト(10YR2/2) 4層ブロック状に20%含む しまりあり
③にぶい黄褐色シルト(10YR5/4) 4層ブロック状に40%+炭化物微量含む しまりあり

SP638
①暗褐色シルト(10YR3/3) 灰白色+黒褐色ブロック3%含む 炭化物微量含む わずかにしまりあり
②暗褐色シルト(10YR3/3) 4層ブロック状に20%+炭化物微量に含む ①と比べ粒子が細かくわずかに粘性あり
③暗褐色シルト(10YR3/3) 4層ブロック状に30%+炭化物微量含む
SP1208
②黒褐色シルト(10YR3/1) しまりあり 炭化物微量含む
SP1209
①黒褐色シルト(10YR3/1) 4層ブロック状に5%含む しまりあり
SP1212
①黒褐色シルト(10YR3/1) しまりあり
SP1213
①黒褐色シルト(10YR3/1) しまりあり
SP1214
①黒褐色シルト(10YR3/1) 4層粒状に2%含む しまりあり
SP1216
①黒褐色シルト(10YR3/1) しまり弱 4層ブロック状に3%含む

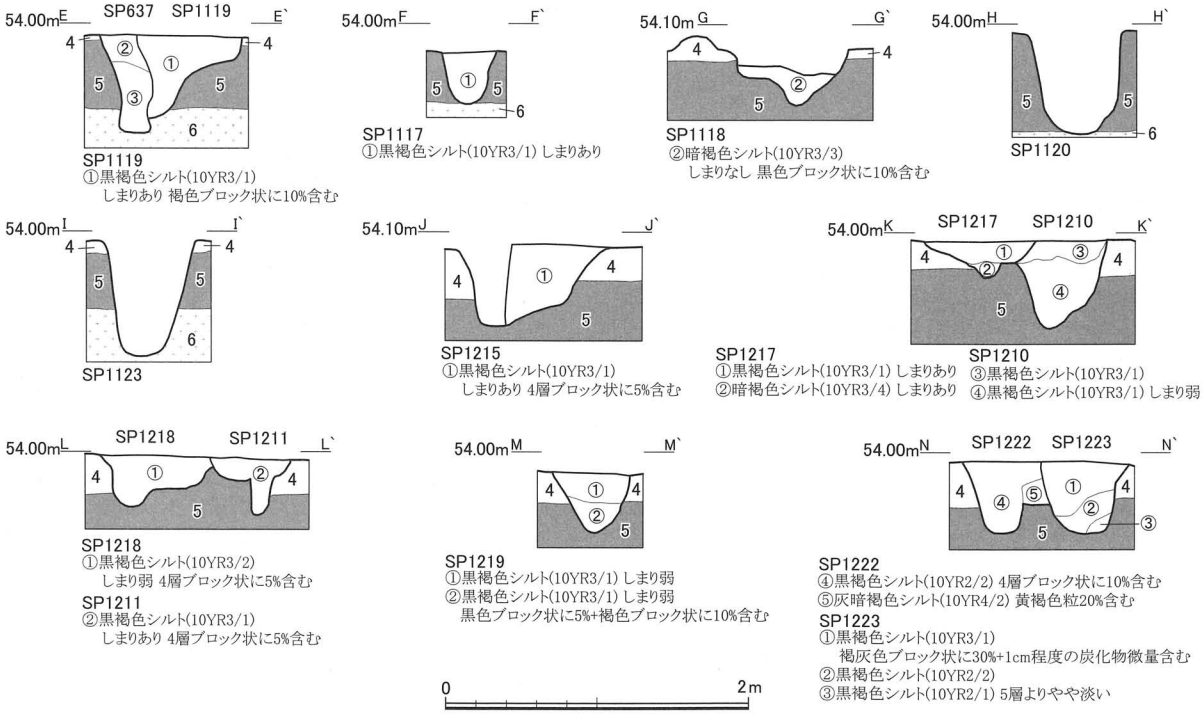


図38　第2遺構面　SB03土層図（S＝1：50）

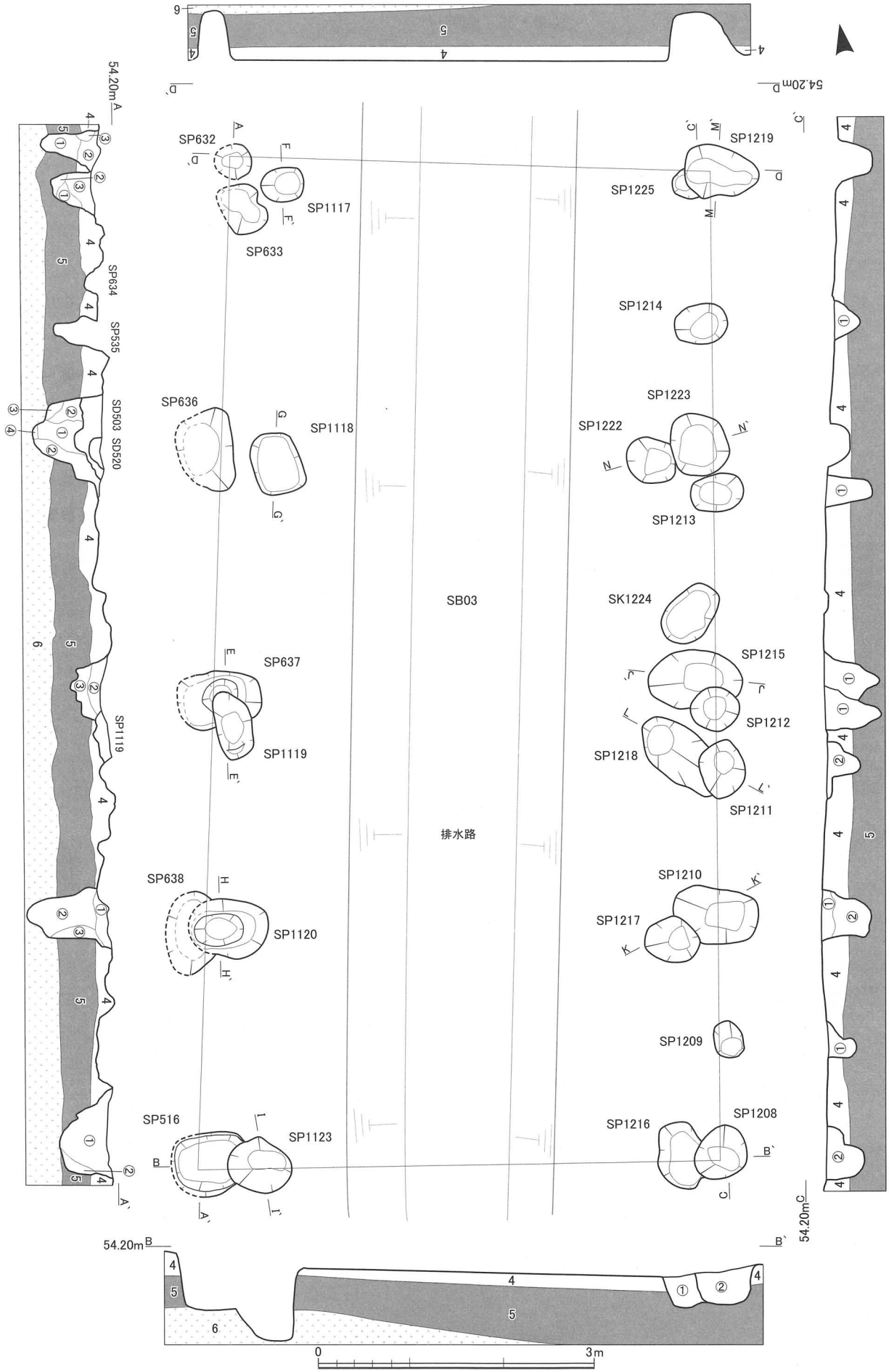


図39　第2遺構面　SB03（S＝1：60）

掘立柱建物（ＳＢ０４）　〔図40・41・42　図版12〕

位　　置　調査区中央東側、建物遺構が密集する位置にあり、なかでも竪穴建物が複数切り合う場所にある。調査区中央にある洪水堆積層４層が堆積しない地点にあるため、5層上面で確認されたが、古代遺物包含層２層もしくは上位層からの掘り込みと考えられる。

重複関係　竪穴建物SI491・492・493・494・495に跨って存在するため、それら遺構と重複関係にある。柱穴覆土が竪穴建物の覆土と近似し見分けが困難であり、竪穴建物調査中にSB04の柱筋を認識した。SI492・493・495の覆土を切り込むことから、新旧関係はSI495＞SI493＞SI492＞SB04となる。

規模と構造　平面は矩形（長方形）を呈する。建物規模は桁行４間の総長9.0～9.2m、梁行1間の総長4.4mであり、平面積40.5㎡を測る。南北方向に長軸をもつ側柱建物（身舎建物）である。妻側から内に約半間の位置に2基の遺構（SP293・313）を検出、柱掘り方の規模と他に付随する遺構がSB04以外に考え難いことから、掘立柱建物を構成する遺構と判断した。SB01と同様、上屋構造（棟木）を支える棟持柱と考えられる。半間のズレが腑に落ちないが、棟持柱であれば梁から外れた位置にあっても問題ない。

側柱建物

発茶沢(1)遺跡

竪穴建物との共存の可能性について触れておきたい。SB04の平面は、SI492全体およびSI495大部分の範囲を包括する。SI495西辺がSB04の西平側柱筋から若干外にあるので、関係性を認め難い。SI492は1棟全てSB04平面内にあるだけでなく、東西辺が桁行に平行し、西平側は共有する。SI492に上屋構造を支える柱掘り方がない。SP432（306）・SP367はSI492覆土を切って造成されるが、重複面積はわずかである。以上のことから、SI492は竪穴建物ではなく、SB04内にある半地下式施設の可能性を考える。桐生直彦は茨城・東京・山梨の諸遺跡を取り上げ竪穴外柱をもつ竪穴建物の集団関係を検討しているが[1]、竪穴外柱穴に焦点を当てると本遺構のように柱穴が整然と掘立柱建物を構成しえる位置にあるものはないようである。また、掘立柱建物＋竪穴建物は青森県発茶沢(1)遺跡に類例が求められるが、両者が連接する形をとる。SI492の詳細については別項（p.69）を参照されたい。平入・妻入の別は、確認できなかった。SP434からSP426を結ぶ線の西側で基2層上に古代遺物を含む暗褐色土の広がりを確認した。土がかなり締まっており、SB04に伴う整地層とも考えられる。

杯　B　Ⅳ

柱　　穴　柱穴は調査区内で完結しており、総数12基である（切り合い関係にあるものを除く）。柱穴は、柱根痕跡残るものがある。SP313は単層覆土の柱根痕跡で、埋土[2]がない。平面形態は、不正円形であり他の掘立柱建物と比較して小規模であるが柱筋の通りが良い。

遺　　物　遺構内出土遺物は１点だけで、SP426出土の須恵器の有台杯（杯ＢⅣ）である。底部が欠損している。口径13.6cm、外傾度64°、体部が直線的に立ち上がる。焼成時の被熱により外面が赤変している。帰属時期の詳細は明らかでないが、Ｖ１期（８世紀第３四半期）に相当すると考えられる。

1）桐生直彦 2005「Ⅶ.竪穴外柱をもつ竪穴建物の集団関係」『竈をもつ竪穴建物跡の研究』六一書房

2）柱の周りを埋め固めた土のこと。山中敏史 2003「Ⅲ-1　柱穴」『古代の官衙遺跡　Ⅰ遺構編』奈良文化財研究所

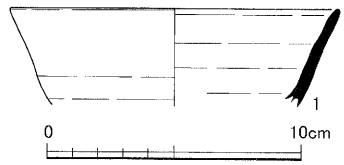


図40　SB04出土遺物実測図（S＝1：3）

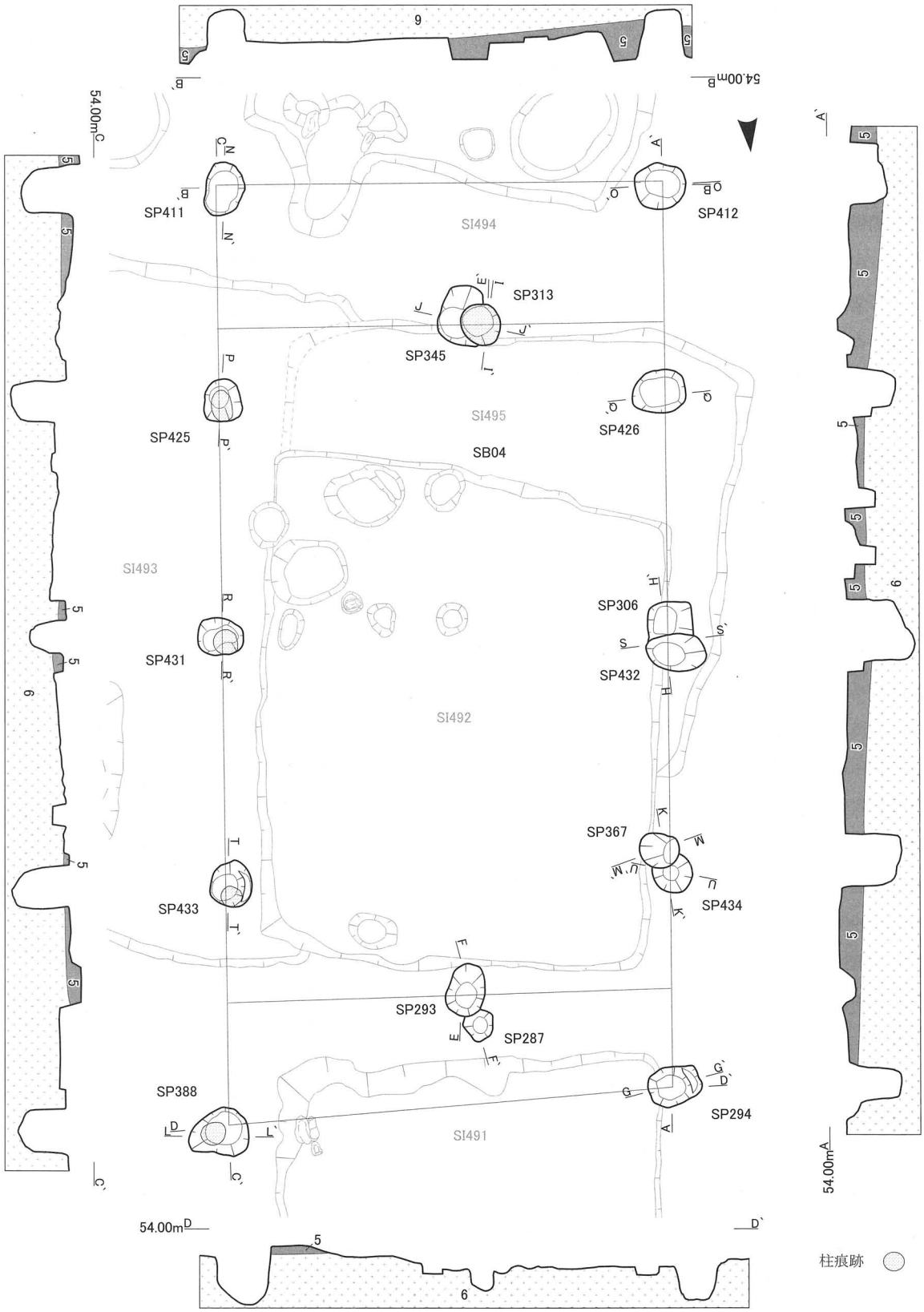


図41　第2遺構面　SB04（S＝1：60）

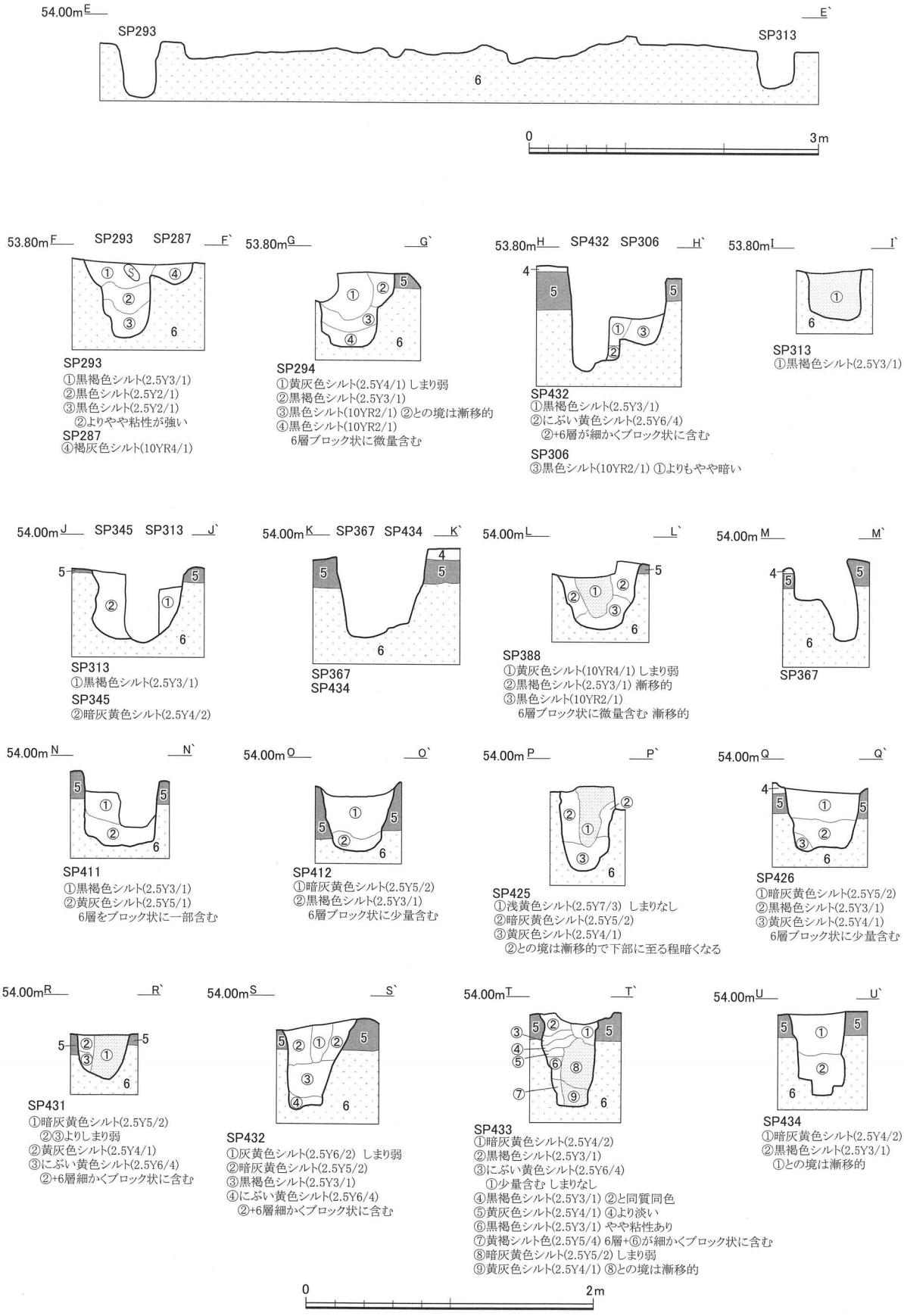


図42　第2遺構面　SB04土層図（S＝1：40　S＝1：60）

掘立柱建物（ＳＢ０５）　〔図43・44　図版13〕

位　　置　西側調査区中央のピットが集中する範囲にある。

重複関係　重複関係にある遺構はないが、SI550・SI620と接する。

総柱建物　**規模と構造**　唯一の総柱建物である。平面は矩形（長方形）を呈する。建物規模は桁行３間の総長6.6m、梁行２間の総長3.9mであり、平面積25.7㎡を測る。桁行が東西で長さが違うが、建物と見なすには支障のない範囲と考えられる。柱穴規模が小さいこと、中世以降に一般化する総柱建物であること、他の掘立柱建物と平面的規模が異なることを考慮し、帰属時期を中世に位置付けたい。現地調査時には確認できなかった遺構であり、整理段階で測量図と断面図を照合したところ、掘立柱建物と認識するに至る。

中世期

柱　　穴　柱穴は総数で12基を数えるが、総じて規模が小さい。掘り方は直径30cm前後、検出面からの深さは30～50cmである。柱根痕跡はないが、すべて底面の断面形態がＶ字・Ｕ字でなく、柱穴と認められる。

珠洲出土　**遺　　物**　柱穴からの出土遺物はないが、身舎内にあるSK556から珠洲が2点出土している。甕の体部であるため、時期の特定は難しいが中世に属すると考えられる。

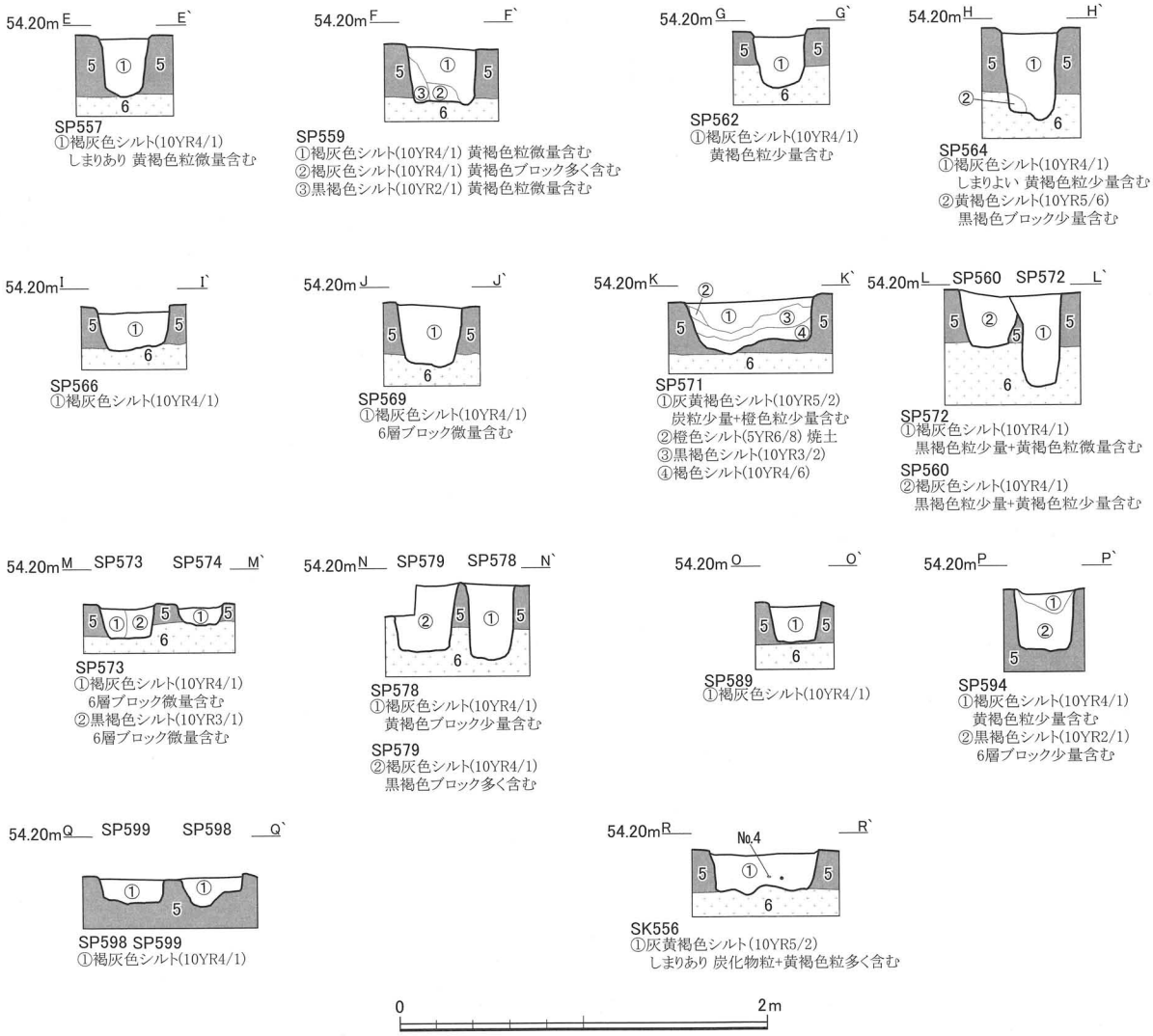


図43　第2遺構面　SB05土層図（S＝1：40）

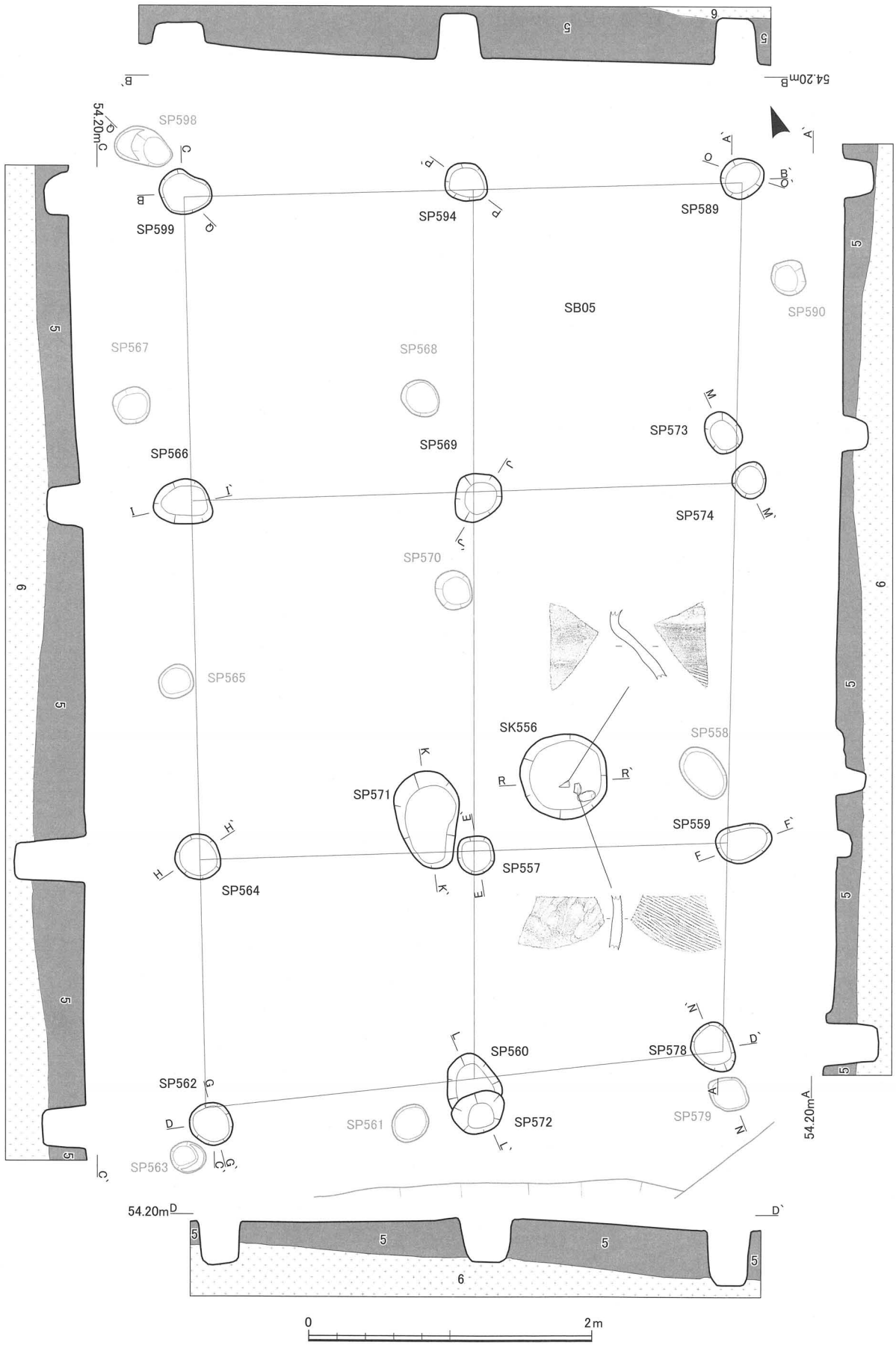


図44　第2遺構面　SB05（S＝1：40）

(2) 竪穴建物〔Pit dwelling〕

竪穴建物（ＳＩ９７）　〔図45・46　図版14・45〕

位　　置　調査区中央南側、建物遺構が密集する位置にあり、SI167に近接する。

重複関係　重複関係にある遺構はない。

規模と構造　南北辺2.5m、東西辺2.5m（復元値）、平面積は5.94㎡（復元値）を測る。平面形態は、四辺がほぼ同規模で正方形に近い。掘り方は底が一部地山礫層7層まで到達するが、地山シルト6層までである。検出面からの深さは平均30cm弱である。古代包含層2層除去後に5層上面で検出されたが、覆土が2層に近似する状況から2層中からの掘り込みと考えられる。建物はほぼ正方位をとる。床面は硬化していなかった。

平面正方形

柱　　穴　柱穴と考えられるピットや周囲に竪穴外柱は検出されなかった。

カ マ ド　明確にカマドを検出することができなかったが、中央床面に焼土が集中し、周囲が炭化物広がっていた。カマドか地床炉か判然としないが、燃焼施設の痕跡と理解したい。

燃焼施設の痕跡

遺　　物　遺物は極めて少ない。1は須恵器の無台杯（杯Ａ）である。外傾度は60°、口径は11.9cm、Ⅲ期に比べ小型化が進行する。2は土師器の短胴釜である。３は須恵器有台杯（杯ＢＶ）である。4は土師器短胴釜の底部で作りは丸底だが、平底状となる。外面は箆削り、内面は横撫でを施す。時期は、Ⅳ１期（８世紀第３四半期）に帰属する。

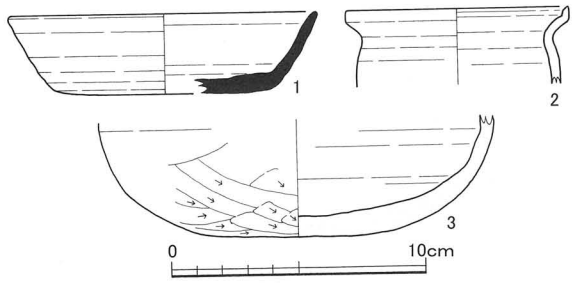


図45　SI97出土遺物実測図（S＝1：3）

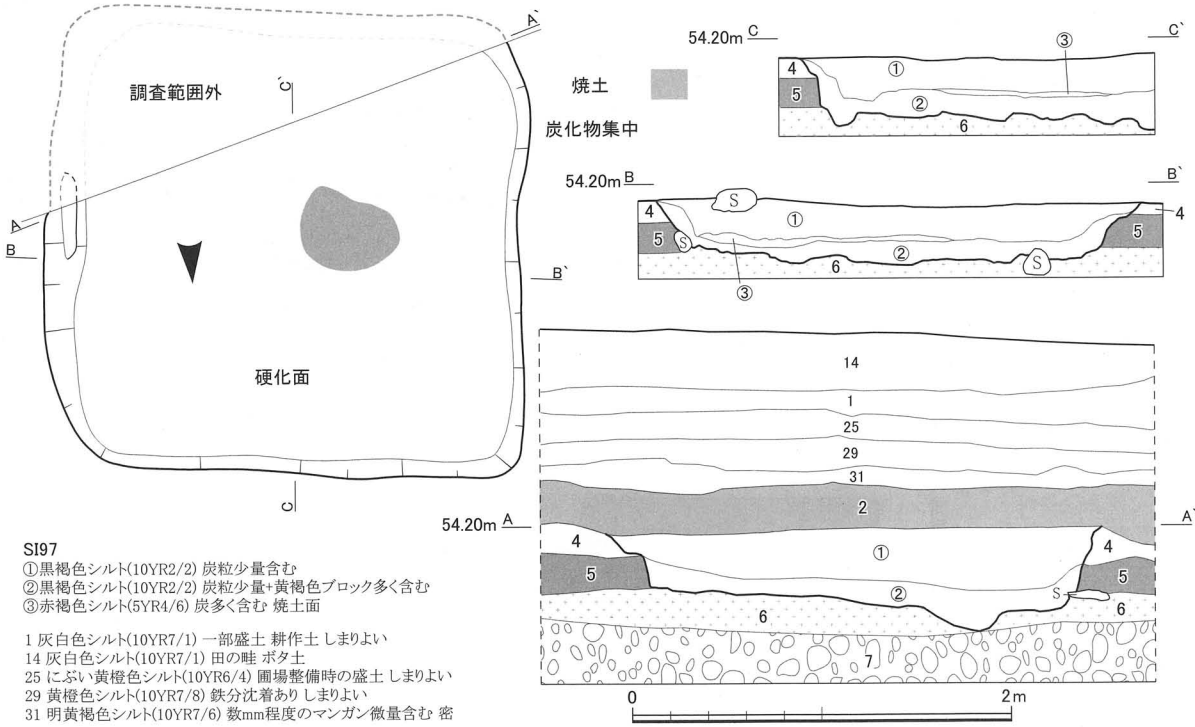


図46　第2遺構面　SI97（S＝1：40）

竪穴建物（ＳＩ１６６）　〔図47・48・49　図版15・16・17・44・47〕

位　　置　調査区中央東側、掘立柱建物3棟（SB01・02・03）とSI167に囲まれる。建物廃棄後、周辺には素掘小溝が造られるがSI166は影響を受けていない。

重複関係　重複関係にある遺構はない。

規模と構造　南北辺5.3m、東西辺5.7m、平面積は29.90㎡を測る。平面形態は、四辺がほぼ同規模で正方形に近い。掘り方は底が地山礫層7層まで到達しており、検出面からの深さは50cm弱である。竪穴建物で唯一掘り方が礫層まで到達する。古代包含層2層除去後に5層上面で検出されたが、覆土が2層に近似する状況から2層中からの掘り込みと考えられる。建物方位はほぼ磁北をとる。

床面のほぼ全域が硬化していた。北壁と小溝の間に幅70cmの空間が設けられている。部分的に硬化しているため、使用されたと思われるが特に出土遺物もなく棚状施設のような痕跡もない。人間が横たわる広さはあるので寝床とも推測できるが、根拠が乏しいのでこの空間の機能的役割は不明と言わざると得ない。

幅70cmの空間

柱　　穴　床面でP1・P2・P3・P4の柱掘り方を確認した。柱間約2mの方1間の柱位置である。P1・P2の規模が大きい。この4基は覆土掘削中には認識できなかったが、SI166埋没後に掘削された可能性がある。床面からさらに掘り下げると礫面で大きく9基の柱掘り方を検出した（P5・P6・P7・P8・P9・P10・P11・P12・P15）。平面位置は、9基の柱穴が方2間の総柱建物のようである。各柱穴は礫面から50～60cmの深さがあり、底の断面形態は平坦である。加えて各柱穴を結ぶように幅30cm・深さ15cmの小溝が掘られている。竪穴建物にある壁周溝というより、柱間の壁を設置するための施設のようである。小溝は、P5とP9の間、P13・P14の間で切れる。深さ15cmの浅い溝なので慎重に検出したが確認できなかったため、掘削されていなかったようである。この空間は、建物の入口を示すものかもしれない。

壁立式住居

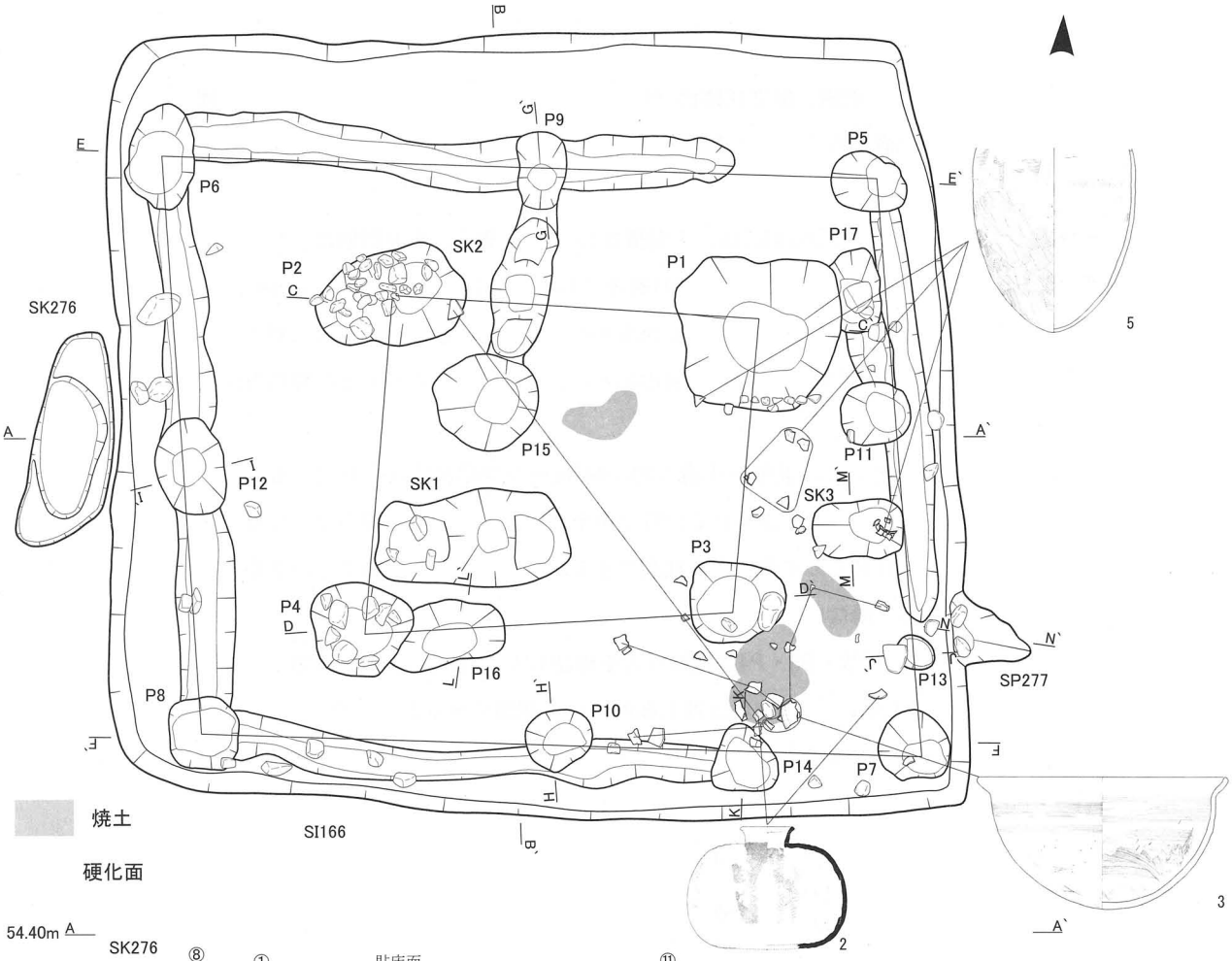
カ　マ　ド　明確にカマドを検出することができなかった。覆土中に大型の礫を検出、芯材を破却した痕跡の可能性がある。中央と南東隅の床面から焼土が部分的に検出された。南東隅の覆土からは、煮炊具である土師器鍋、長胴釜が出土している。この焼土と遺物範囲から東方向の壁にSP277とした溝状の掘り込みがある。以上の状況からSP277をカマドの煙道とし、焼土の範囲をカマドの焚口および燃焼部と考えたい。

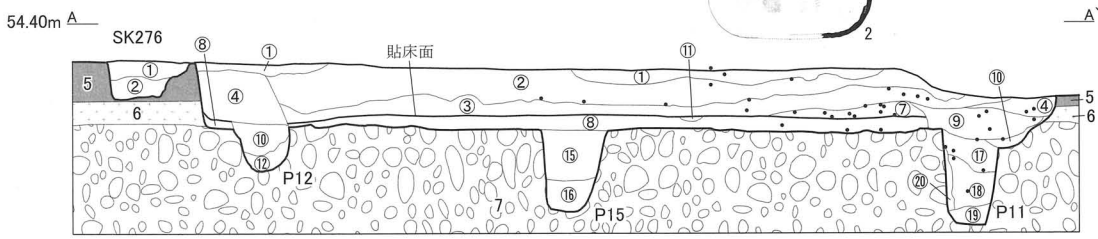
遺　　物　遺物は焼土範囲を中心に礫とともに南東隅に集中していた。1は須恵器杯蓋の小片である。2は須恵器の横瓶で、SI492出土片と接合した。口縁部は外反し端部を厚くし面取りを施す。体部外面は格子目叩き、内面に同心円文当て具痕を残す。体部被蓋部の観察から、閉塞円板貼付技法で製作されたと考えられが片側・両側の別は不明である。3は土師器鍋で、内面は撫でによる成形後に螺旋状にハケ調整、最後に頸部に掻き目を残す。外面も同様の調整を施すが、煮炊による被熱で不明瞭である。4・5ともに長胴釜である。SI166出土遺物は破片数は多いが、個体数が少ない。供膳具は杯蓋1、貯蔵具は横瓶1、煮炊具が鍋1、長胴釜2である。器種組成が本遺構の性格を示す可能性がある。時期は、Ⅳ1～Ⅳ2期（8世紀第3四半期～第4四半期）と考えたい。

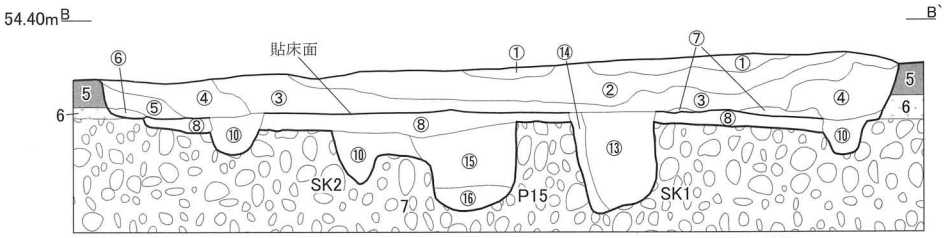
横　　瓶

鍋

長　胴　釜







SI166
①黒褐色シルト(10YR3/2) 黄褐色粒+炭粒微量含む
②黒褐色シルト(10YR3/2) 黄褐色ブロック多く+炭粒微量含む
③黒褐色シルト(10YR2/2) 黄褐色粒微量+炭粒少量含む
④黒褐色シルト(10YR3/2)+にぶい黄褐色シルト(10YR5/4) 細礫(1cm程度)微量含む
⑤黒褐色シルト(10YR2/2) 黄褐色粒微量含む
⑥明黄褐色シルト(10YR7/6) 黒褐色粒少量含む
⑦黄灰色シルト(2.5Y4/1) 黄褐色シルト30%程度+焼土微量含む 非常に固くしまる
⑧黒褐色シルト(10YR3/2) 6層ブロック状に20%含む
⑨黒褐色シルト(2.5Y3/1)
⑩黒褐色シルト(10YR3/1) 径5cm程の礫多く含む
⑪黄灰色シルト(2.5Y4/1) 明褐色焼土+2cm大の炭化物との互層
⑫黄灰色シルト(2.5Y5/1) 径5～20cm大の礫含む

SK276
①黒褐色シルト(10YR3/1) 黄褐色ブロック少量+炭粒微量含む
②明黄褐色シルト(10YR6/6) 黒褐色ブロック多く含む

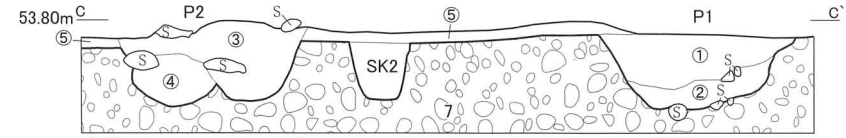
SI166SK1
⑬黒褐色シルト(10YR3/2)
径5～20cm大の礫含む やや粘性あり
⑭にぶい黄褐色シルト(10YR5/3) 径5cm大の礫多く含む

P11
⑰黒褐色シルト(10YR3/1)
⑱黒色シルト(10YR2/1) ①よりも暗い
⑲黒色シルト(10YR2/1) 6層シルト3%程度含む
⑳黒褐色シルト(10YR3/1) 6層シルト30%程度含む しまりなし

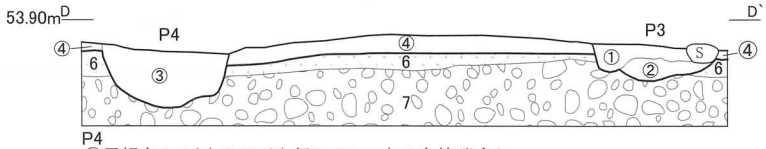
P15
⑮黒褐色シルト(10YR3/2) 径5～15cm大の礫多く含む
⑯黒色シルト(10YR2/1) 径5cm程の礫含む

0　2m

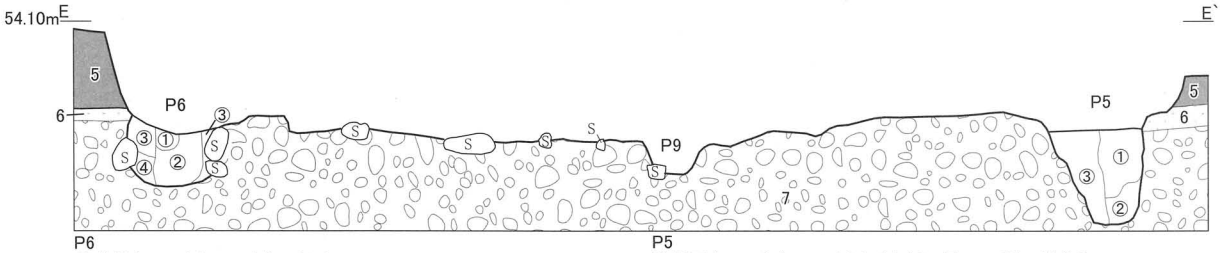
図47　第2遺構面　SI166（S＝1：50）



⑤黄灰色シルト(2.5Y4/1) 黄褐色シルト(2.5Y5/3) 炭化物少量 焼土部分的に微量含む 非常に固くしまると
黒褐色シルト(10YR3/2) 6層ブロック状に20%程度含む の互層

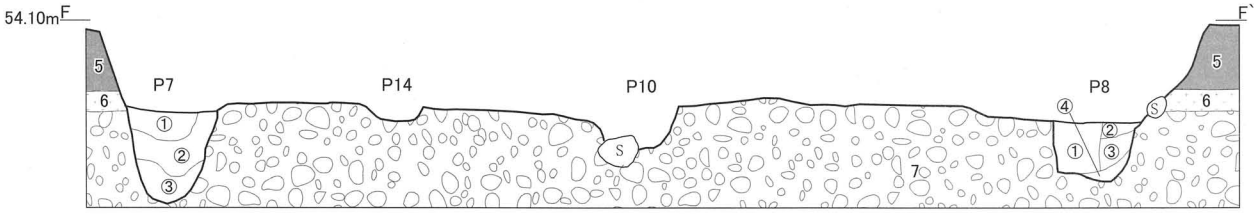


P4
③黒褐色シルト(10YR4/1) 径5～20cm大の自然礫含む
④黄灰色シルト(2.5Y4/1) 黄褐色シルト(2.5Y5/3) 炭化物少量 焼土部分的に微量含む 非常に固くしまる



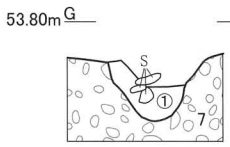
P6
①黄褐色シルト(2.5Y5/3) しまりなし
②黄灰色シルト(2.5Y4/1) しまりなし
③黒褐色シルト(10YR3/1) しまりなし 6層ブロック状に30%程度含む
④黒褐色シルト(10YR3/2) しまりなし

P5
①黄灰色シルト (2.5Y4/1) しまりなし 径10cm弱の礫含む
②黒褐色シルト (2.5Y3/1) しまりなし 6層20%程度含む
③褐灰色シルト(10YR4/11) しまりなし 6層ブロック状に30%程度含む

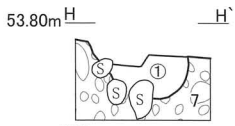


P7
①黄灰色シルト(2.5Y4/1) しまりなし
②黒褐色シルト(2.5Y3/1) しまりなし 灰黄褐色シルト(5・6層漸移層か?)
20%程度含む
③黒色シルト(2.5Y2/1) しまりなし

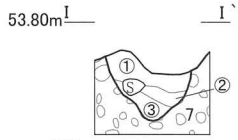
P8
①黄灰色シルト(2.5Y4/1) しまりなし
②暗灰黄色シルト(2.5Y4/2) しまりなし
③暗灰黄色シルト(2.5Y4/2) しまりなし 5+6層ブロック20%程度含む
④黄灰色砂質土層(2.5Y5/1) しまりなし



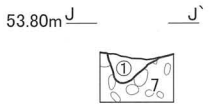
P9
①黒褐色シルト(10YR3/2)



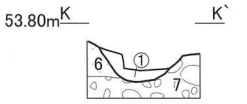
P10
①黒褐色シルト(10YR3/2)



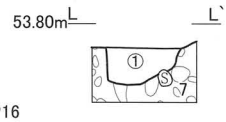
P12
①黒褐色シルト(10YR3/1)
径3cm～5cmの礫少量含む
②暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)
③黒褐色シルト(10YR3/1)



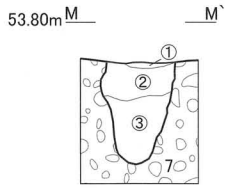
P13
①黒褐色シルト(10YR3/1)



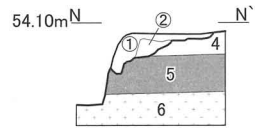
P14
①黒褐色シルト(10YR3/1)
6層シルト5%程度含む



P16
①黒褐色シルト(10YR3/1)
上部に径5～10cmの礫多く含む



SI166SK3
①黒褐色シルト(10YR3/1)
②暗灰黄色シルト(2.5Y5/2)
径5cm程の礫多く含む
③黒色シルト(10YR2/1)
径5cm程の礫多く含む



SP277
①褐灰色シルト(10YR5/1)
径2cm程の炭化物含む
②灰黄色(2.5Y6/2)
4層30%程度含む

0　2m

図48　第2遺構面　SI166土層図（S＝1：40）

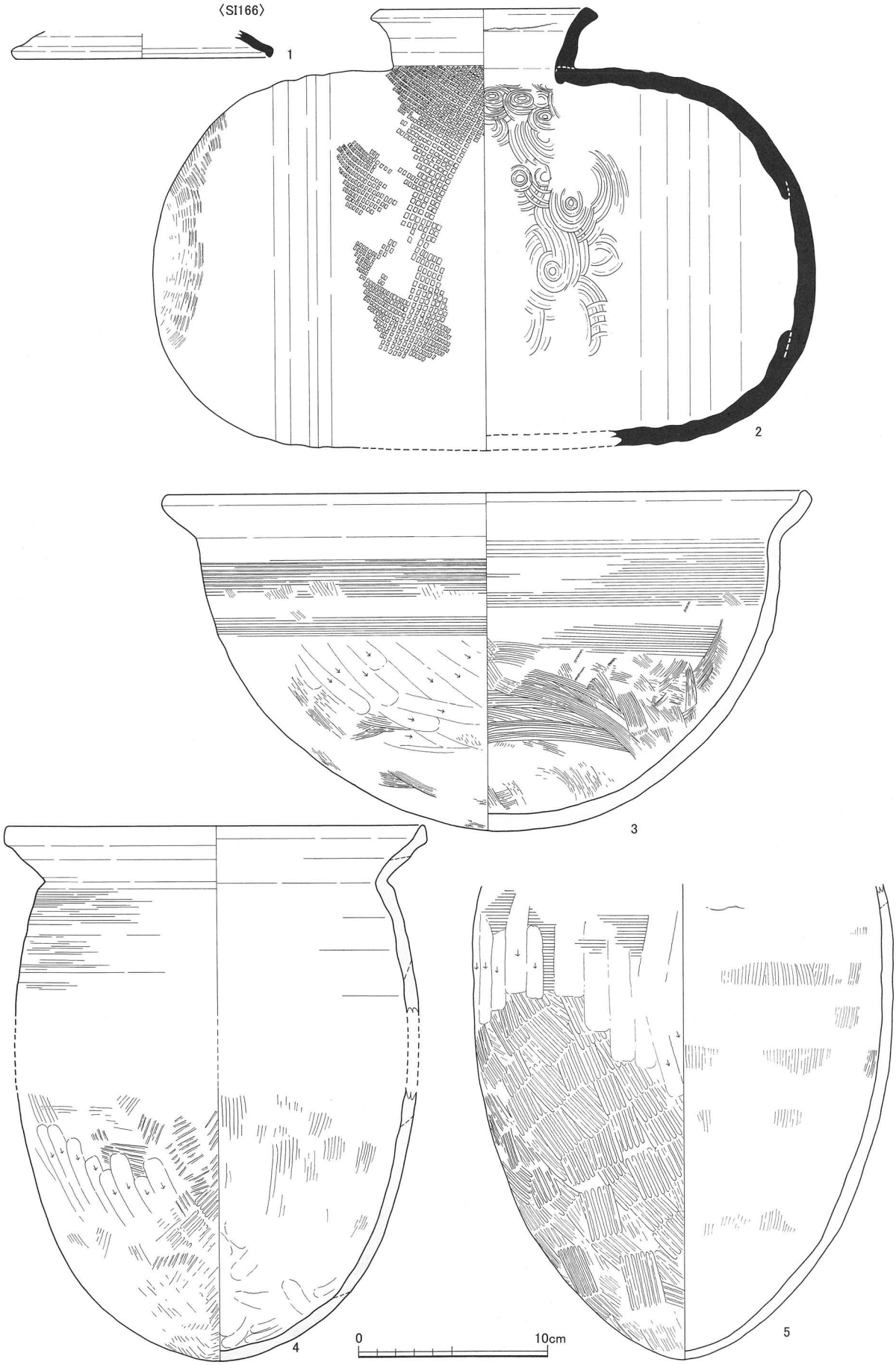


図49　遺構出土遺物実測図(2)　　竪穴建物（S＝1：3）
SI166：4・5

竪穴建物（ＳＩ１６７）　〔図50・51　図版18・45〕

位　　置　調査区中央東側、建物遺構が密集する位置にあり、掘立柱建物3棟（SB01・02・03）とSI97・166に囲まれる。

重複関係　重複関係にある遺構はないが、平成14年試掘トレンチにより南半が掘削された。試掘段階では竪穴建物を認識することができなかった。

規模と構造　東西辺3.5m、南北辺は試掘トレンチにより規模推定できない。長軸は正方位をとる。カマド、柱穴、貼り床などの諸施設は検出されなかった。掘り方が検出面から10～30cm程度と浅い。本来は深度が相当程度あったと思われ、諸施設は遺物包含層掘削段階で破壊してしまった可能性もある。本遺跡内の竪穴建物の中では、規模の小さい部類に入る。遺物は床面から検出しており、時期特定の資料となり得る。　**小規模竪穴建物**

柱　　穴　柱穴と考えられるピットや周囲に竪穴外柱は検出されなかった。

カ マ ド　カマドおよび焼土範囲を検出しなかった。

遺　　物　遺構中央床面から須恵器杯蓋が1点出土している。内面を上に向けた状態で出土した。外面全体に厚く降灰している。天井部に回転篦削りを施し、扁平なつまみを付ける。口縁端部はやや外反するように接地し、内面に自然釉が付着する。時期は、Ⅳ1～Ⅳ2期（8世紀第3四半期～第4四半期）と考えたい。

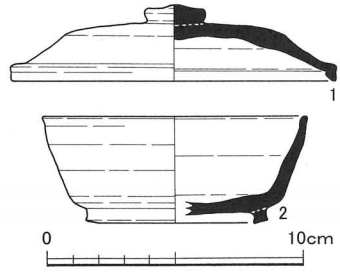


図50　SI167出土遺物実測図（S＝1：3）

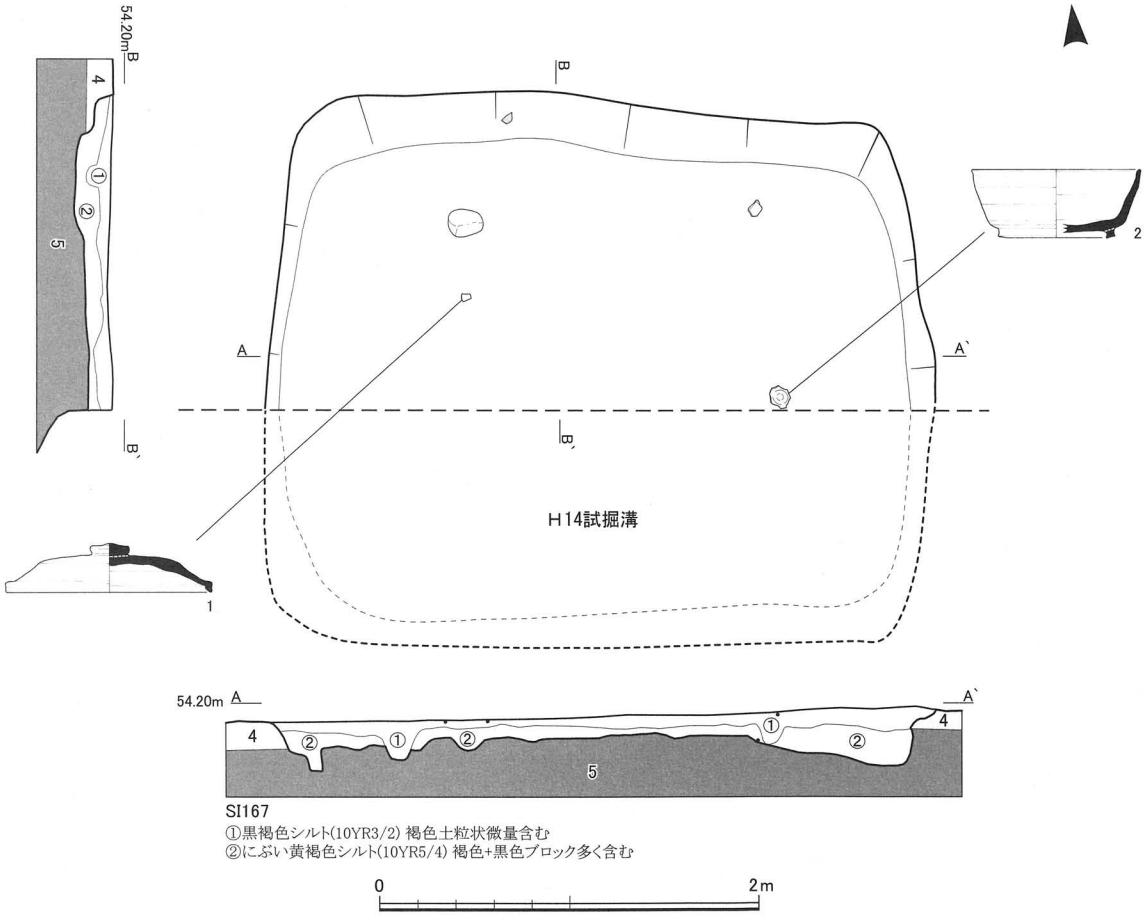


図51　第2遺構面　SI167（S＝1：40）

竪穴建物（ＳＩ３９５）　〔図52・53　図版18・45〕

位　　置　調査区中央東側、建物遺構が密集する位置の北側にある。

重複関係　埋没後、素掘小溝SD398、土坑SK424に切られる。

規模と構造　東西辺3.9m、北半が調査区外にあり、南北規模が推定できない。残存の平面積は9.70㎡を測る。カマド、柱穴、貼り床などの諸施設は検出されなかった。覆土は検出面から15～20cm堆積し、調査区断面観察では2層中の掘り方が認識できない。

諸施設なし

柱穴なし

柱　　穴　柱穴と考えられる構造や周囲に竪穴外柱は検出されなかった。SP423は掘り方、規模ともに柱穴の可能性がある。位置的にも4本柱の南東柱に該当する位置にある。

カ マ ド　焼土やカマドに類する施設はない。

須恵器杯蓋

遺　　物　遺構覆土から須恵器の杯蓋が1点出土している。焼成不良であり、土師質に近い。かえりが屈曲し、天井部も肉厚であり、時期はⅣ1期（8世紀第3四半期）と考えたい。

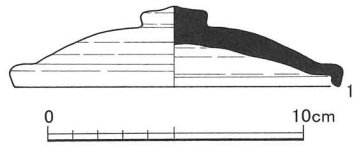


図52　SI395出土遺物実測図（S＝1：3）

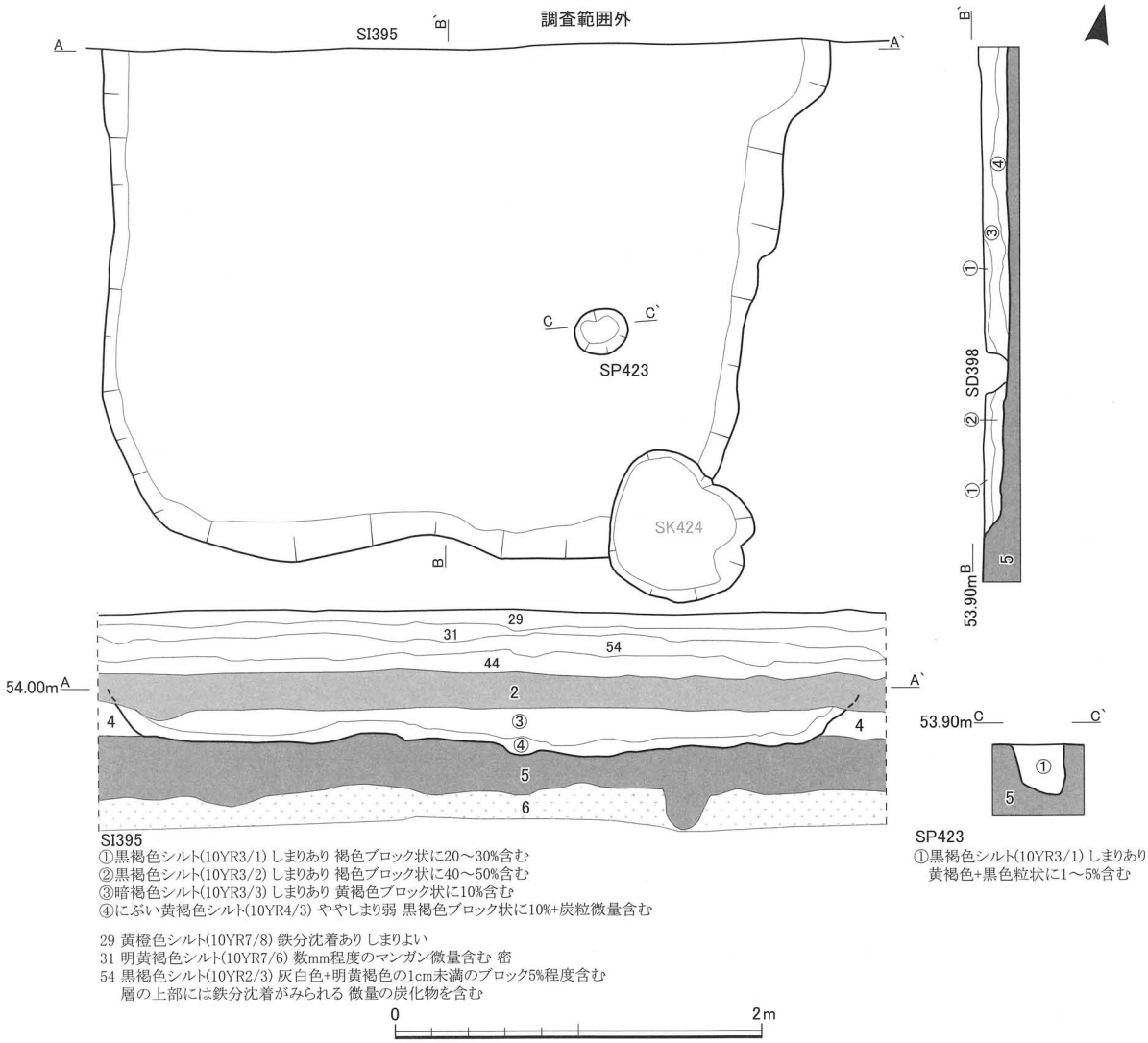


図53　第2遺構面　SI395（S＝1：40）

竪穴建物群（ＳＩ４９１・４９２・４９３・４９４・４９５）　〔図54　図版19　巻頭カラー3〕

調査区東側の中央周辺で掘立柱建物と竪穴建物が密集して検出された。竪穴建物５棟、掘立柱建物１棟、土坑２基で構成される。竪穴建物３棟（SI492・493・495）は切り合い関係にあり、SI492を包括する範囲にSB04が建設される。SI492とSB04の新旧・併存関係は把握できていない。本遺跡内で建物の密集度が高く、特異な在り方である。大溝SD09からもっとも近い建物で15～20ｍの距離である。出土遺物の時期差は小さく、８世紀後半から９世紀前半に収まる。カマド焼土の古地磁気測定を実施したが、竪穴建物間には年代の隔たりがほとんどない(p.219)。本遺跡の集落としての要素を考慮すると、注視すべき遺構群である。

建物密集域

古地磁気測定

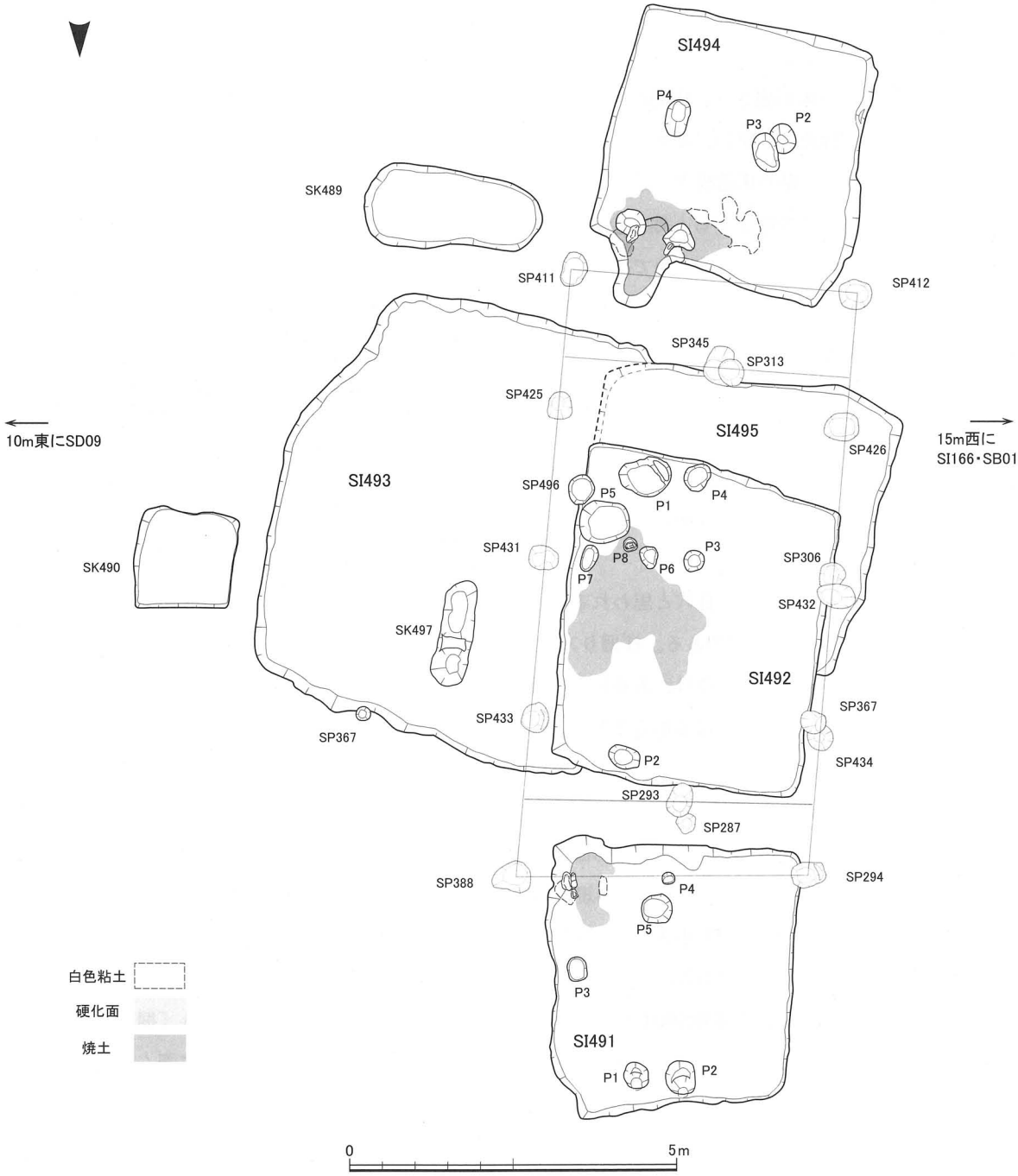


図54　第2遺構面　SI491・492・493・494・495平面図（S＝1：100）

竪穴建物（ＳＩ４９１）　〔図55・56　図版20・21・42・43・45〕

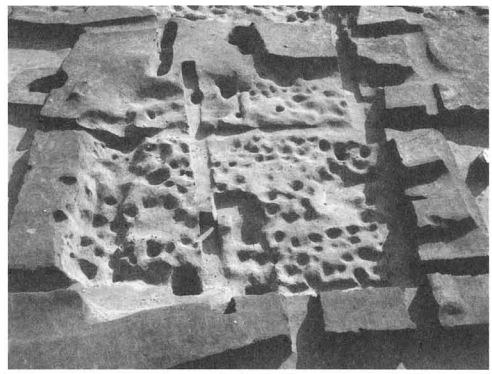
位　　置　東側調査区東側、竪穴建物・掘立柱建物が複数切り合う場所にある。

重複関係　他の竪穴建物と切り合い関係にはないが、埋没後、素掘小溝が数条掘削される。南西隅がSP294に切られるような図表現となっているが判断が難しく、掘立柱建物SB04との重複関係は確認できなかった。

規模と構造　南北軸4.0m、東西軸3.6m、平面積は14.60㎡を測る。平面形態は、南北が長い長方形を呈する。カマドが１基、南東隅に付設される。掘り方は地山シルト層６層まで到達しており、検出面からの深さは30～40cm程度である。古代包含層2層除去後に5層上面で検出されたが、覆土が2層に近似する状況から2層中からの掘り込みと考えられる。建物方位はほぼ磁北をとる。

貼り床が施され、床面の中央部分が硬化していた。P2からP5までの部分が硬化しており、範囲は比較的狭い。カマドに近い部分は煮炊のため、頻繁に人が立ち入りそうだが、硬化していない。貼り床造成土に遺物は含まない。

地山の凹凸　貼り床を除去すると地山の凹凸を検出した。東壁沿いに幅70cmの溝状の窪み（SX7）がある。貼り床の前段階なので排水溝としての機能ではなく、建物造成当初の掘削痕と考えられる。東壁側だけ存在するので、建物の一辺を決めて深く掘り、周囲との深度を見ながらやや浅めに掘削し、のちに貼り床で水平化する造成法を推測できる。SX7は竪穴建物の造成方法を知る手がかりとなる可能性がある。建物の入口は特定できなかった。



貼り床下の凸凹状況

柱　　穴　柱穴と思われるピットは、北壁付近のP1・P2である。柱掘り方の底断面がＶ字・Ｕ字であり、打ち込み柱のような形状である。柱穴としたのは、ある程度の深度・規模をもつこと、底が外方向に掘削され柱を据えた場合に求心構造となるからである。

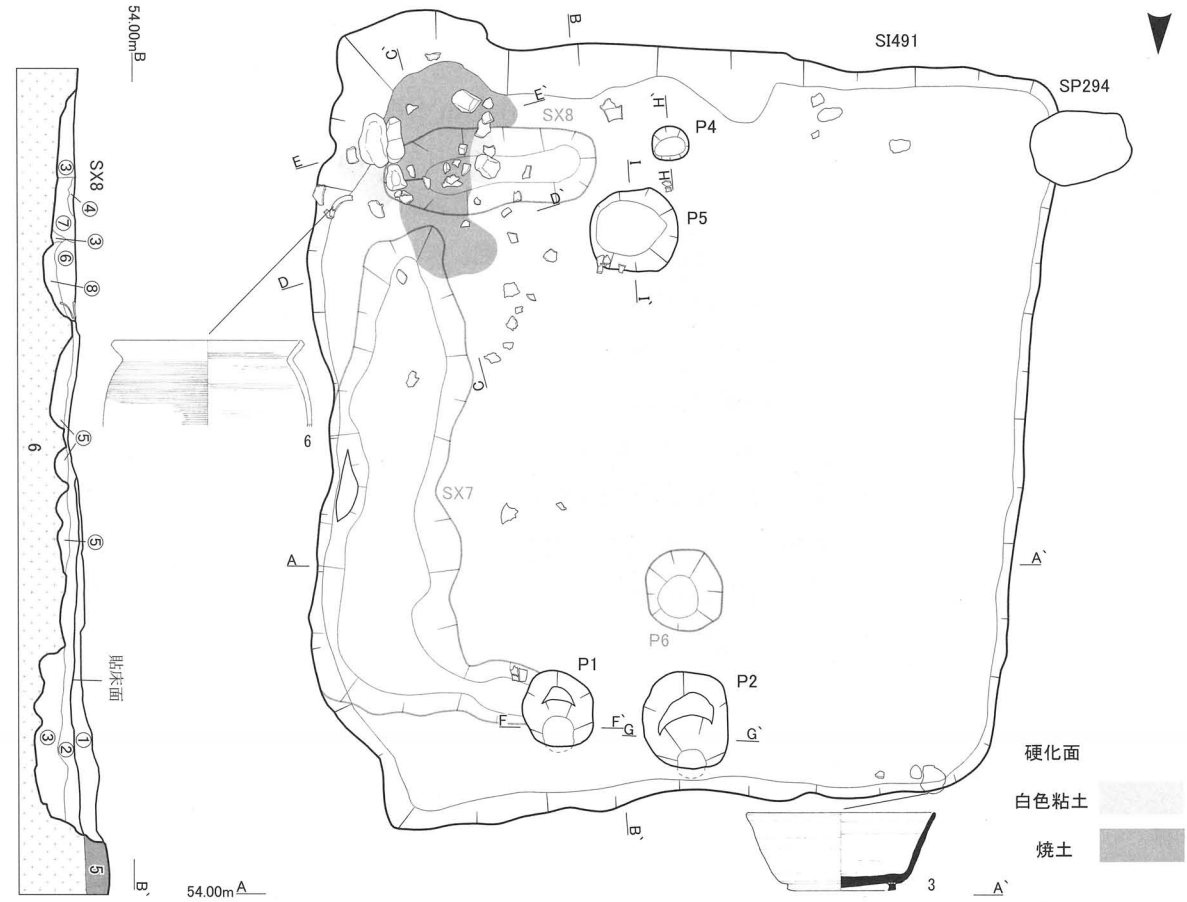
柱配置

ただし、南半に対応する柱穴がないので全体的な柱配置の復元は難しい。試掘トレンチで遺構覆土および床面を掘削したため、柱穴を削平した可能性もある。P4・P5は規模・掘り方ともほぼ同規模であり、いずれも底面が壁面方向に抉りこむように掘られる。新旧の判別は不明である。P4・P5がP1・P2と同規模の柱穴であれば求心構造となる柱配置と推定可能だが、掘削深度が浅く規模も小さいため、柱穴と認定できず入口施設に付属する可能性がある。上部構造の推定は困難である。

また、掘立柱建物SB04と連接する可能性も指摘しておきたい。いわゆる「掘立＋竪穴」の構造である。SB04との切り合い関係が判然としないので、関係性について深く言及することはできないが、「掘立＋竪穴」構造であれば、柱配置がP1・P2だけで構成される理由も理解できる[1)]。

掘立＋竪穴

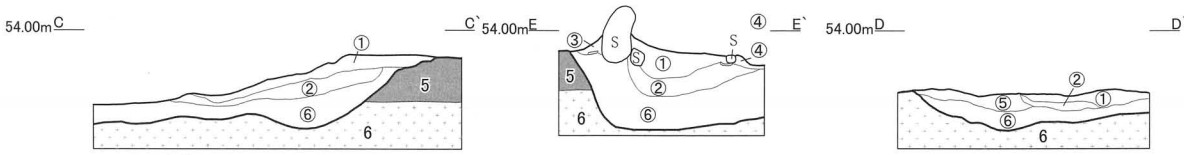
1）上野幸夫氏のご教示による。



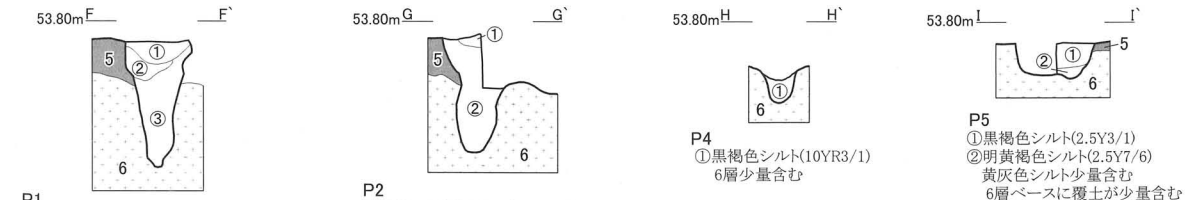
SI491
①黒褐色シルト(10YR3/1)
②褐灰色シルト(10YR4/1) 貼り床 非常に固くしまる
明黄褐色少量含む
③黒褐色シルト(10YR3/1) 黄褐色シルト少量含む
④橙色シルト(5YR6/6) 被熱による変色硬化はなし
⑤黒褐色シルト(10YR3/1) ③より黄褐色シルト多く含む
⑥黒褐色シルト(10YR3/1) ②と同一レベルにあるが②程のしまりなし
⑦褐灰色シルト(10YR4/1) 貼り床を切り込むPIT?
⑧明黄褐色シルト(2.5Y7/6) 黄灰色シルト少量含む

P-6
⑩黒褐色シルト(10YR3/1) 6層少量含む

SX-07
⑪黒褐色シルト(10YR3/1) しまりなし 6層少量含む
⑫黒色シルト(10YR2/1) 黄褐色シルト50%程度含む



SI491かまど
①黒褐色シルト(10YR3/1) ②微量含む
②橙色粘質土(5YR6/6) 焼土層
③灰白色粘質土(5YR7/2) 裾石の貼り粘土
④灰黄褐色シルト(10YR5/2) 焼土少量含む
⑤褐灰色シルト(10YR5/1) 6層+炭化物+焼土微量含む
⑥黒褐色シルト(10YR3/1) 6層少量含む



P1
①黒色シルト(2.5Y2/1)
6層+黄灰色シルト少量含む
②黄灰色シルト(2.5Y4/1) ①+6層少量含む
③6層+①+②の互層

P2
①黒色シルト(2.5Y2/1)
6層+黄灰色シルト少量含む
②6層+①の互層

P4
①黒褐色シルト(10YR3/1)
6層少量含む

P5
①黒褐色シルト(2.5Y3/1)
②明黄褐色シルト(2.5Y7/6)
黄灰色シルト少量含む
6層ベースに覆土が少量含む

0　2m

図55　第2遺構面　SI491（S＝1：40）

カ　マ　ド　南東隅でカマドを検出した。遺存状態は比較的良好である。東壁に平行して両袖石があり、煙出しが壁面から南方向に延びる。そもそも煙出しの深度が浅いのか、検出時に破壊してしまったのか不明だが、煙出しは壁外20cmで閉塞する。

焼土および炭化物は、カマドの焚口から煙出しにかけて集中していた。

袖石は比較的元位置を留めているようであったが、西側の袖石は破砕されていた。東側の２石は被熱のため、赤変している。東袖石と東壁の間、西袖石の周辺にカマド構築材と思われる白色粘土が残っていた。粘土残留箇所が袖石周辺に限られるため、石を固定する目的で粘土を貼り付けたと考えられる。焚口や燃焼部に焼土、炭化物が集積しており、煮炊具の長胴釜片が散乱していた。状況から判断すると、カマド廃棄時に破却行為を行った可能性が考えられる。

カマド構築材

カマド覆土、床上、覆土から炭化米が出土している（第４章１，p213）。カマド６粒、床上７粒、覆土８粒を検出した。炭化米出土の竪穴建物は、他にSI492、SI493、SI494がある。

炭　化　米

遺　　物　遺物はカマド内部および周辺を中心に出土した。カマドには長胴釜の破片が多く出土したが、図化し得る個体は少なかった。1は須恵器杯蓋でつまみは欠損している。口縁端部外面に沈線が入る。天井部までの器高は高く山笠状となる。体部外面、天井部に近いところに粘土の剥離痕がある。重ね焼き時に付いたもので、径から推定すると蓋を正位に連続して重ねるＣ類1ではなく、下から正位の身・逆位の蓋・正位の身・逆位の蓋の順に重ねるＢ１類、もしくは下から正位の身・逆位の蓋・正位の蓋・逆位の身の順に重ねるＢ２類と考えられる[1)]。2は須恵器の無台杯（杯Ａ）で、体部は開き気味で外傾度は50度を測る。口径は12cmでⅣ期の法量と変わらないが、器厚の均質化や薄化が認められる。３は大型の有台杯（杯ＢⅡ）であるが口径が15cmと小型化する。数少ないカマド以外の出土遺物で、北西隅の検出面に近い壁面から出土した。床面直上ではなく、覆土①層からの出土である。体部に焼き膨れや歪みがみられる。高台は低く内面接地となる。Ⅳ期の大型有台杯と比べ、口径に対し底径が小さい。6は土師器の長胴釜で、口縁部から体部上半が残存する。口縁部は横撫でで仕上げ、端部を上方につまみ上げる。体部外面は強い掻き目が残る。須恵器横瓶片がSI166出土遺物（図49，2）と接合している。

重ね焼きB2類

杯　　A

杯　B　II

SI492と接合

時期は、Ⅳ期（8世紀後半）が多少あるものの、無台杯、有台杯の特徴から、概ねＶ２期（9世紀第２四半期）に帰属すると考えられる。

1）春日真実1989「3　窯詰めの方法」『越中上末窯』（富山大学考古学研究報告第3冊）富山大学人文学部考古学研究室

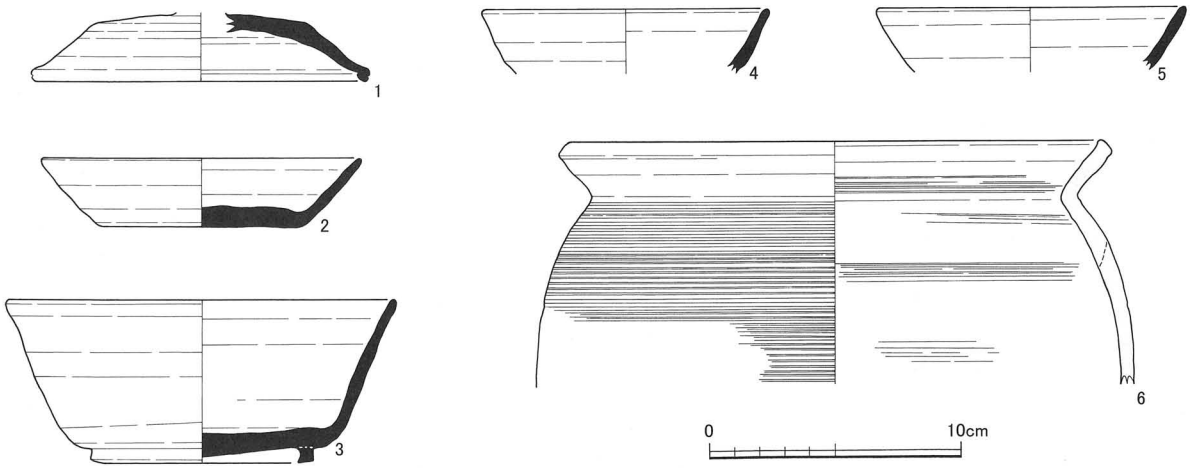


図56　SI491出土遺物実測図（S＝1：3）

竪穴建物（ＳＩ４９２・４９５）　〔図57・58・59・60　図版22・23・42・46・48・75〕

位　　置　調査区東側、竪穴建物・掘立柱建物が複数切り合う場所にある。SI491～495は、調査区東側で5棟が密集する竪穴建物群を構成する。建物の東西幅を同じくして南からSI494→SI492→SI491の順で整然と並ぶ。

重複関係　覆土が近似し見分けが困難であったため、竪穴建物調査中にSB04の柱筋を認識した。SB04は、SI492・493・495の覆土を切り込むことから、切り合いによる新旧関係はSI495＜SI493＜SI492＜SB04となる。埋没後、東西方向の素掘小溝が6条掘削される。

規模と構造　〔ＳＩ４９２〕本遺構は、①平面が掘立柱建物SB04に包括される、②明確なカマドを検出できなかったものの焼土が広範囲に検出された、③鉄製品が出土、④土錘がまとまって出土、という点で他の竪穴建物と様相が異なる。決して例外的な竪穴建物ではないと思われるが、本遺跡内では特異な存在である。

特異な建物

南北辺4.9m、東西辺4.0m、平面積は18.87㎡を測る。平面形態は、南北に長軸をもつ長方形を呈するが、東辺がやや長い。掘り方は地山シルト層6層まで到達しており、検出面からの深さは35～45cm程度である。古代包含層2層除去後に5層上面で検出されたが、覆土が2層に近似する状況から2層中からの掘り込みと考えられる。建物の主軸は方位はほぼ磁北をとる。貼り床が施され、床面の中央から東半分が硬化していた。焼土を囲むように硬化する状況から、西半と圧力のかかり方が異なる方法で使用されたと考えられる。貼り床を除去するとSI491と同様に地山面が凹凸しており、貼り床造成前の掘削状況を把握することができる。詳しく観察すると、鋤・鍬状耕具による鋤き込み単位の見分けがつきそうな状況である。SI494のように平坦な部分と凹凸の激しい部分といった明確な差はなく、全体に凹凸があるという印象である。地山面はSI493・495と同じく全面にわたって酸化鉄が集積・膠着していたが、形成要因は不明である。本遺跡においてSI492～495の範囲のみ検出されたので、水田耕土下に特有の酸化鉄沈殿集積1とは一概に処理できない。建物の使用に伴うものか、建物遺棄後の堆積作用によるものか判然としない。

貼り床下の凹凸状況

本遺構は柱穴が伴わないことと上記①の理由から、SB04と同一の建物である可能性を指摘しておきたい。「掘立＋竪穴」というより、中世集落の掘立柱建物内にある竪穴状遺構に近い想定である。しかし青森県発茶沢（1）遺跡例のように竪穴建物と掘立柱建物が連接するは知られるが、掘立柱建物の中に竪穴建物を包括する構造の報告例は管見の限りみられない。否定的な要素としては、掘立柱建物の内部に大量の焼土を産出するような燃焼施設を構築するのは考え難いことである。煙出しが東辺にあるとすれば、柱間に設置されることになる。

掘立＋竪穴

建物の入口は特定できなかったが、入口を想起させる層位を西壁外の5層上面で確認した。数m幅の薄い層位で古代遺物を含み、硬く締まりがあって整地層のような感触を受けた。入口の劣化を防ぐために固めたものか、出入りによって締め固められた可能性もある。カマドと考えられる焼土範囲の反対側に位置するので、入口の場所としても妥当である。

〔ＳＩ４９５〕SI492に切られ、全体像は明らかではない。東西4.5m、南北4.5m（復元値）、平面積18.605㎡（復元値）である。平面形態は、正方形に近い。

1）春日真実1989「3　窯詰めの方法」『越中上末窯』（富山大学考古学研究報告第3冊）富山大学人文学部考古学研究室

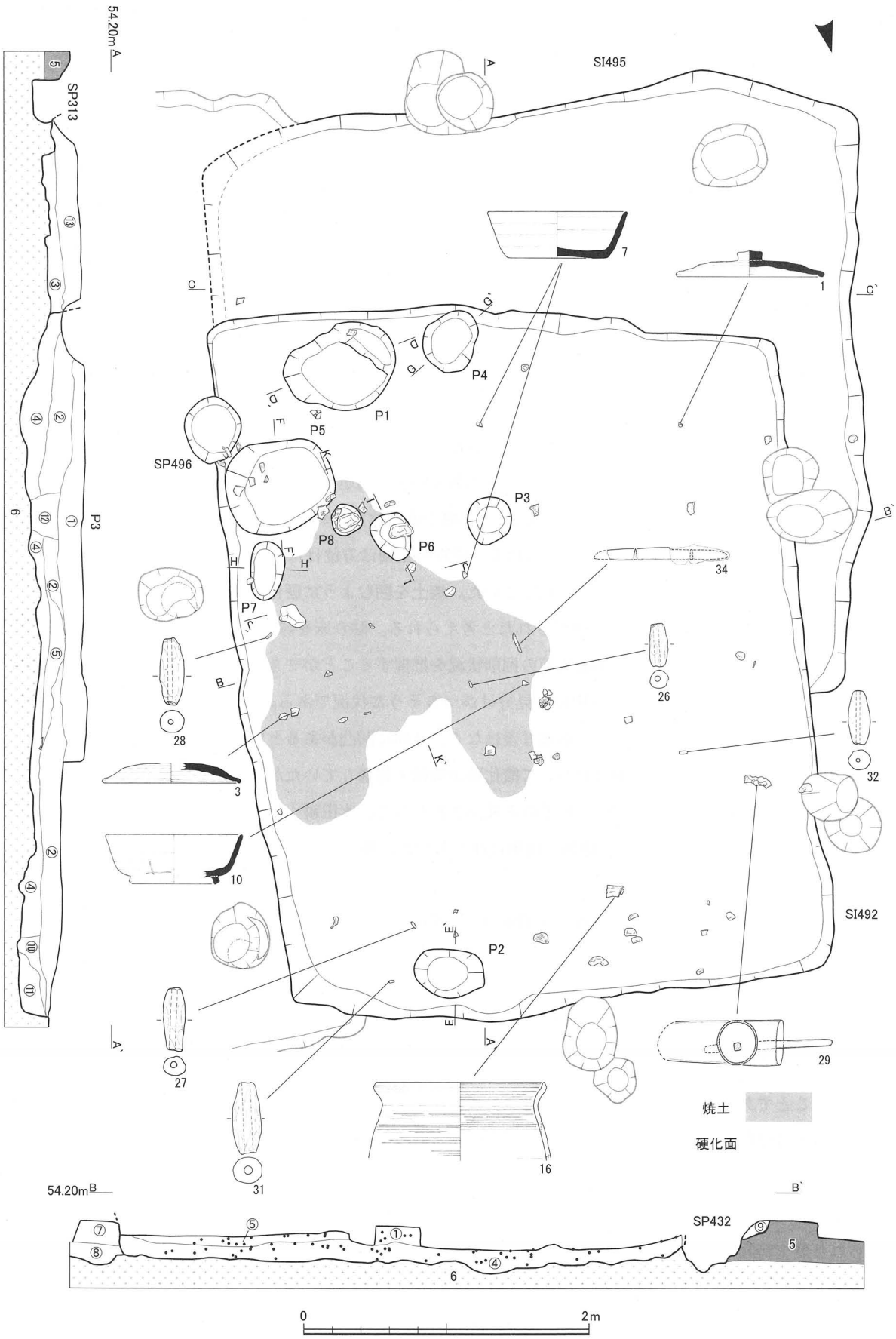


図57　第2遺構面　SI492･495（S＝1：40）

柱　　穴　〔ＳＩ４９２〕南東隅周辺でピットが集中的に検出されたが、柱穴に相当するピットは、検出されなかった。〔ＳＩ４９５〕柱穴なし。

カ　マ　ド　〔ＳＩ４９２〕明確なカマド跡は検出できなかったが、床面東半に焼土の広がりが認められた。焼土は広範囲にわたる。P8からカマドの袖石と思われる長細い礫が立ったままの状態で検出された。礫は元位置を保っている可能性が高く、焼土範囲との位置関係からカマドの袖石と考えられる。ただしP8礫に対応するもう片方の袖石は検出されなかった。焼土が広範囲にあるので、廃棄に際して破却した可能性がある。カマドがあるとすれば、P8礫の平面的長軸の向きから、東方向もしくは南東方向に煙出しがあったものと推測できる。ただし焼土の範囲・量が他の竪穴建物と比較して著しく多いことから、単なる日常的な煮炊を目的とした燃焼施設ではなく特定の目的をもって作られた施設の可能性もある。

多量の焼土

他の竪穴建物（SI491、SI493、SI494）からは炭化米が出土しており、本遺構でも床上から１粒検出したが焼土からの出土はなかった。〔ＳＩ４９５〕カマドは検出できなかった。

炭　化　米

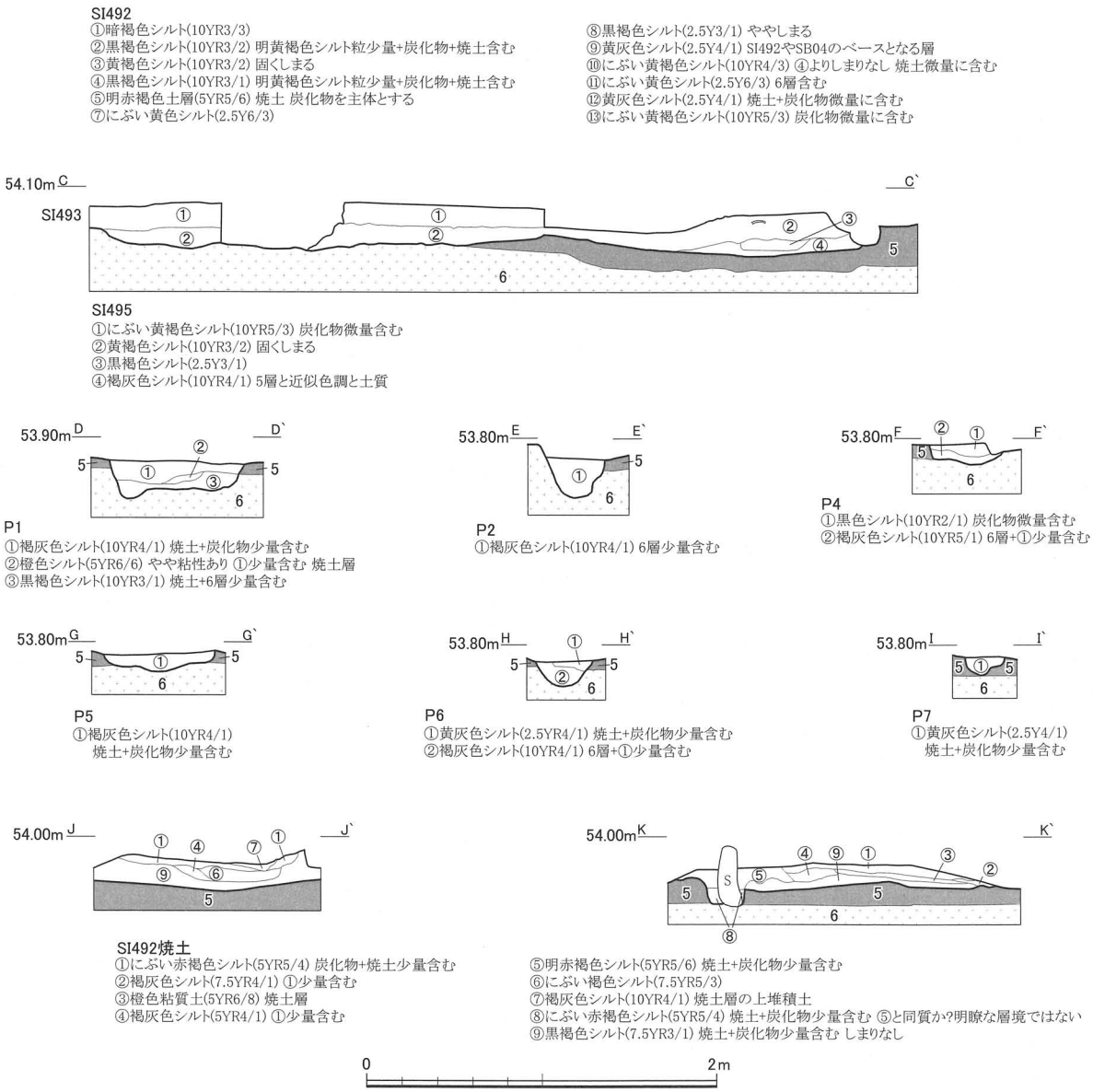


図58　第2遺構面　SI492･495　土層図（S＝1：40）

遺　　物　〔ＳＩ４９２〕遺物は他の竪穴建物と比べて多い。焼土および貼り床面を中心に広範囲に検出した。１～５は須恵器杯蓋であり、２法量（Ⅱ・Ⅳ）ある。つまみの残る１・２とも径高指数が20前後で扁平化の傾向が認められる。口縁端部はかえりが小さく丸く収める。つまみはボタン状を呈し、扁平となる。２の外面は全面降灰し、端部近くで強い撫でにより凹凸の稜ができる。内面は中心部のみ無釉で、有台杯（杯ＢⅣ）と組み合わせの重ね焼きが想定できる。３はつまみが欠損し、口縁端部のかえしが小さい。４は口縁端部のかえしが大きい。

杯蓋２法量

杯　　Ａ

５は口径が17cmを超える杯蓋である。６～15は杯類である。６は無台杯（杯Ａ）で、底部と体部の境に強い撫でによる段がある。７は深身の無台杯（杯Ａ）で、底部が篦切りによって扁平となり、体部が直線的に立ち上がる。８は杯体部破片である。有台杯（杯Ｂ）は法量が２種（Ⅱ・Ⅳ）ある。杯ＢⅡは口径が11cm代であり、法量が杯ＢⅤに近い。９は体部下半に強い稜ができ、体部がやや外反するように立ち上がる。10はP2出土で、外面下半に「＋」字の篦記号がある。高台を上に向け、十の書き順通りに篦状工具で書かれる。11は杯体部破片で外面に自然釉がかかる。12は有台杯である。13は杯身の浅い個体である。14は器壁が薄く、口縁部に向かって広く。15は底径が10cmを超える大型の有台杯（杯ＢⅡ）である。16～24は煮炊具の土師器釜で、16～20は長胴釜、21～24は短胴釜である。16は口縁端部を上方につまみ上げ、体部外面に掻き目を施す。煮炊による煤が内外面とも頸部下約2cmに付着する。17は摩耗激しく調整不明瞭。18は焼成良好で、口縁端部に返しがつく。19は口縁端部を上方に厚くつまみ上げる。20は、口縁端部をわずかに返して収める。21は短胴釜で、被熱のため外面の劣化が激しい。内外面とも煤が付着し、口縁部内面にコゲが残る。口縁端部を返す。22は摩耗激しく調整不明瞭。23は体部片で、内面を横撫で、外面は篦削りを施す。24は土師器椀で、内外面とも赤彩される。底部は回転糸切り痕をわずかに残す。25は鍋である。口縁端部を上方につまみ上げ、端部を返す。26～31は土錘である。計６点すべて土師質であり、表面に指頭圧痕がよく残る。４～5cmのものと6cmを超える肉厚のもの２種があり、重さ、孔径にも差がある。32は筒状鉄製品の中に棒状鉄製品が入り込む。用途不明。筒部分は厚さ約２mmの鉄板を楕円筒に加工。33は、鉄製刀子。両関で直角、茎部には木柄の木質が遺存。34は鉄製刀子で切先を欠く。片関で直角、関部に幅約0.4cmの金具を装着。茎部には木柄の木質が遺存。

杯　Ｂ　Ⅱ

長　胴　釜

短　胴　釜

赤　彩　椀

鉄　製　品

遺物の年代は、総体的にⅣ２期（８世紀第４四半期）に帰属すると考えられる。

〔ＳＩ４９５〕１は土師器の鍋である。残りの良い個体で、内面は螺旋状の刷毛目調整、外面は刷毛目調整後、底部は篦削り、上半から口縁部に掻き目を施す。２は須恵器杯蓋で、つまみが欠損する。概ねⅣ期（８世紀後半）に帰属すると考えられる。

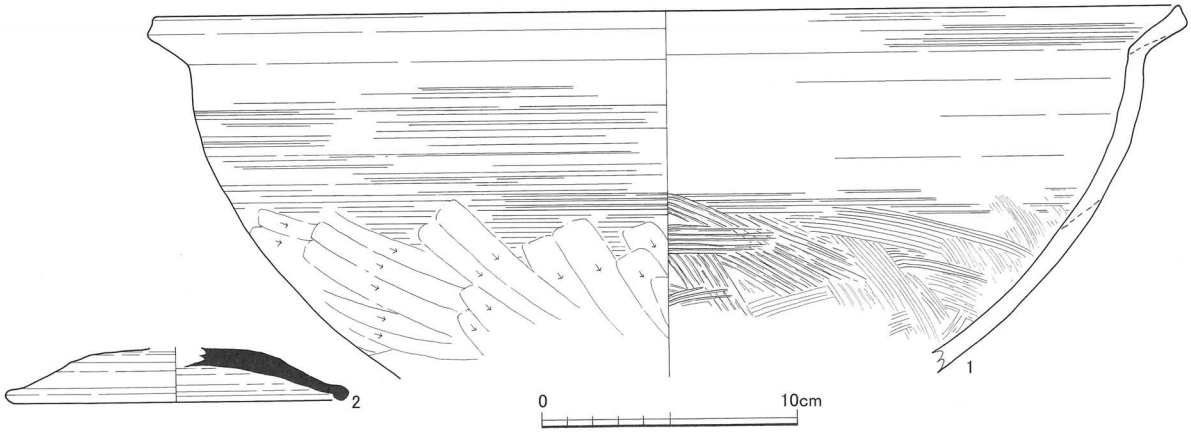


図59　SI495出土遺物実測図（S＝1：3）

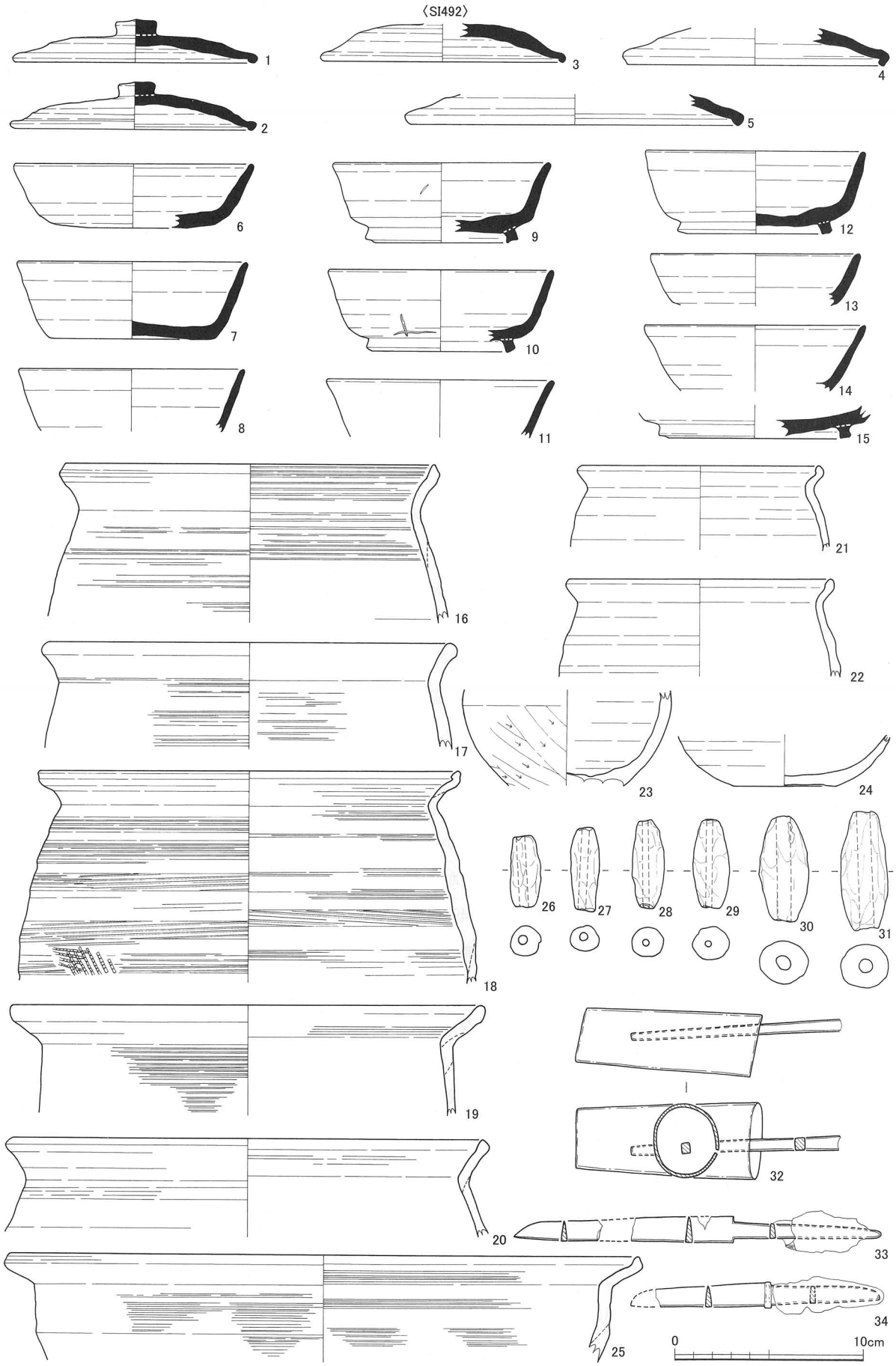


図60　遺構出土遺物実測図(3)　　竪穴建物（S=1：3）

竪穴建物（ＳＩ４９３）　〔図61・62　図版24・25・42・43・47〕

位　　置　調査区東側、竪穴建物・掘立柱建物が複数切り合う場所にある。

重複関係　埋没後、SI495、SI492が造成される。３棟の竪穴建物の機能廃止後に素掘小溝が数条掘削される。はじめに南北方向の溝が掘られ、次いで東西方向の溝が掘られる。

規模と構造　南北辺6.7m、東西辺はSI492・495に切られるが推定復元すると5.8m、平面積は約28.97㎡を測る。全体像が明らかでないが推定復元の平面積は、竪穴建物内でもっとも規模が大きい。平面形態は、南北が長方形を呈する。掘り方は地山シルト層６層まで到達しており、検出面からの深さは15～35cm程度である。古代包含層2層除去後に5層上面で検出されたが、覆土内遺物と包含層遺物が接合することや覆土が2層に近似する状況から2層中からの掘り込みと考えられる。建物方位はほぼ磁北をとる。

貼り床は確認できなかった。検出層位が低く、床面を掘削・検出により破壊してしまった可能性もある。床面を確認できなかったため、遺物は少ない。覆土を除去すると地山面が凹凸しており、造成時の掘削状況を把握することができる。地山面はSI493・495と同じく全面にわたって酸化鉄が集積し膠着していたが、形成要因は不明である。調査区内で酸化鉄集積層が確認されたのはSI492～495の範囲のみであるため、水田耕土下に特有の酸化鉄沈殿集積[1]とは一概には把握できない。東壁に沿って幅70～80cmの酸化鉄のない部分もあるが、南北壁は酸化鉄範

炭化米　囲と重なる。覆土から炭化米が１粒出土している。

柱　　穴　柱穴と思われるピットは検出していないが、中央北側にSK497がある。長軸1.65mの土坑で、形状は布掘り状柱穴に似るが柱穴と判断する要素はない。柱建ち構造か否かは不明である。

カ マ ド　カマドや焼土は、検出されなかった。

土　　坑　本遺構の南にSK489、東にSK490（図84）の２基の土坑が接する。両土坑との併存関係は切り合いや出土遺物年代からも把握できない。SK489は平面が長方形の土坑で、長軸が南壁に平行する。SK490は平面が正方形に近い形状である。両方ともⅣ期（8世紀後半）頃の無台杯が出土している。特にSK490は覆土の色調が他の上層遺構と異なっていたので、直

便所の可能性　感的に竪穴建物に付設する便所の可能性を考え、覆土の自然科学分析を行ったが、遺構性格を特定する手がかりは得られなかった（p.203）。両土坑とも平面的位置から、SI493と何らかの関係を示す可能性があると考えられる。

遺　　物　遺物は、地山面に近い層位から須恵器を検出した。包含層出土遺物と接合した資料もある。１～３は、すべて須恵器の杯蓋である。１は擬宝珠形つまみが付き、口縁端部はわずかに垂下する程度である。外面は回転撫でによって３段の稜ができる。径高指数は24.0である。２は、器壁が薄く、口縁端部がやや隆起し、丸く収める。外面全体に降灰し、粘土の剥離痕がある。重ね焼きで上位にあった杯蓋の口縁部が融着した痕であろう。３は天井部が肉厚の個体で、口縁端部を大きく丸く収める。時期はⅣ期（８世紀後半）に相当すると考えられる。

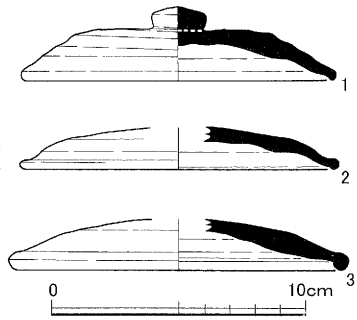
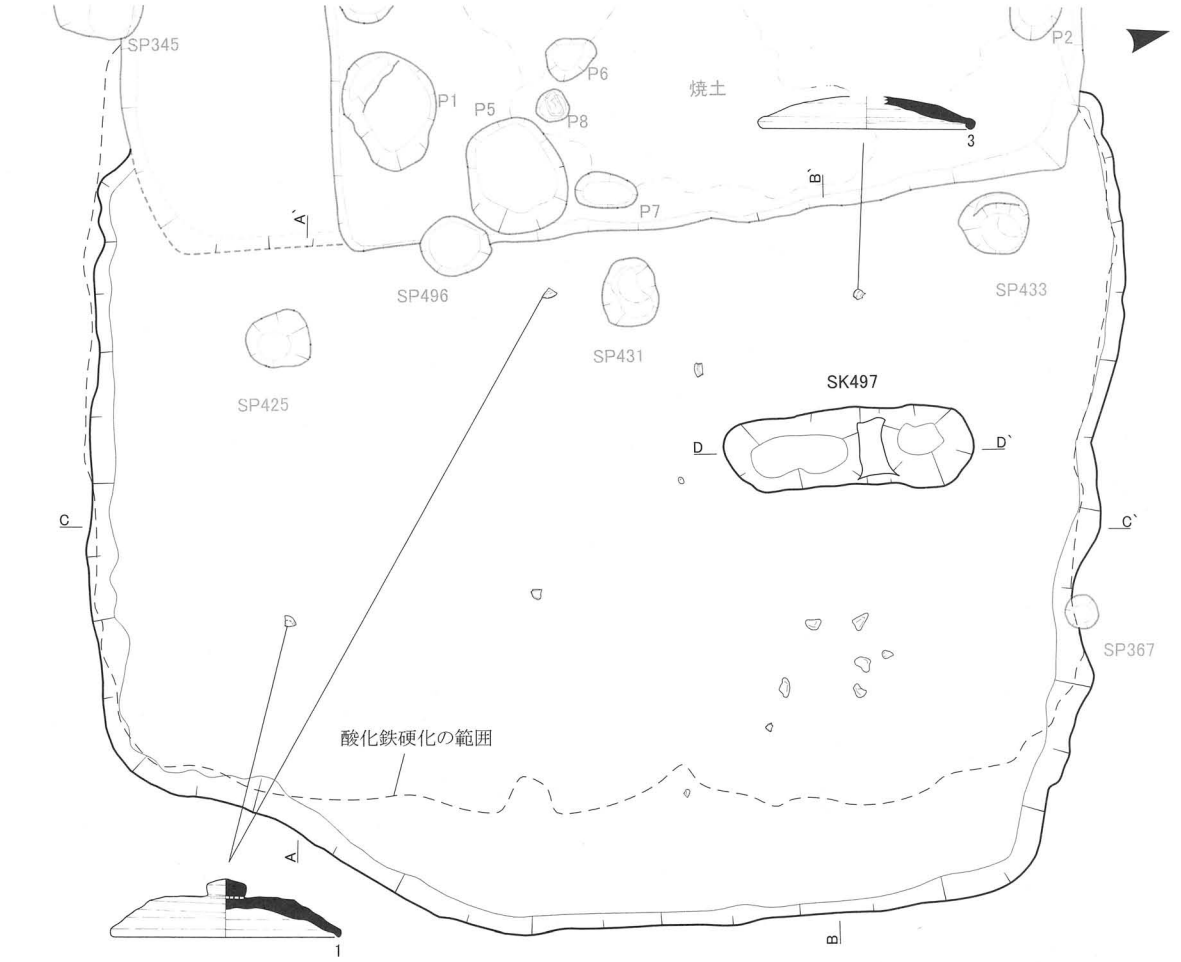
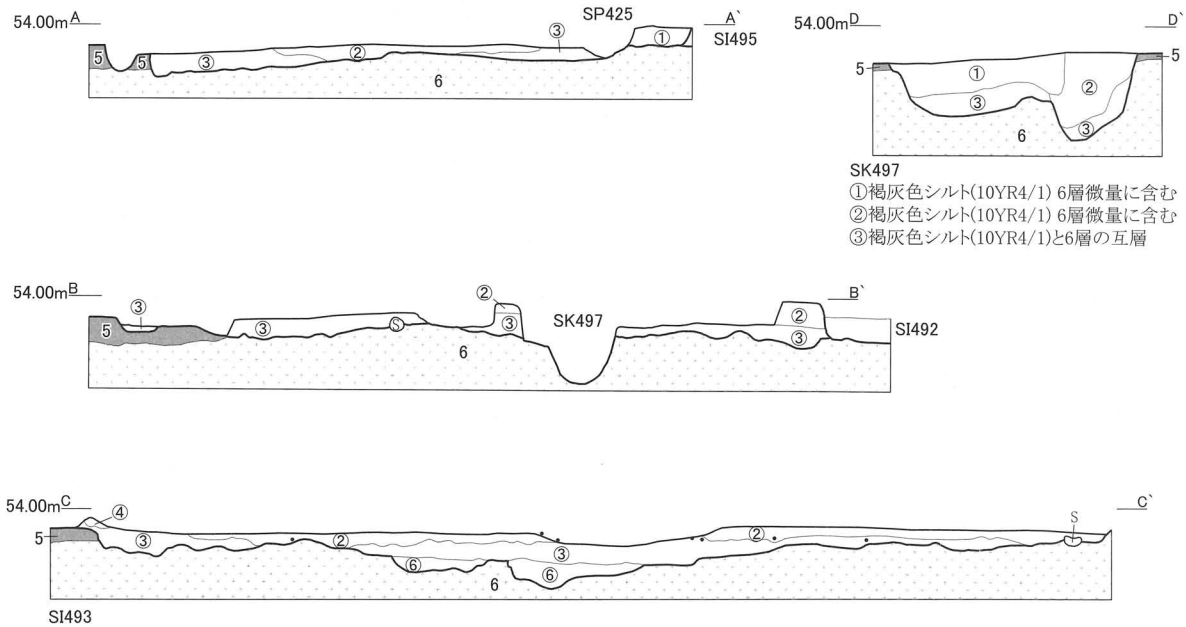


図61　SI493出土遺物実測図（S＝1：3）

1）犬伏和之・安西徹郎　2001「16.水田土壌」『土壌学概論』朝倉書店





SK497
①褐灰色シルト(10YR4/1) 6層微量に含む
②褐灰色シルト(10YR4/1) 6層微量に含む
③褐灰色シルト(10YR4/1)と6層の互層

SI493
①黒色シルト(10YR2/1) しまりややあり
②にぶい黄色シルト(2.5Y6/3)
③黒褐色シルト(2.5Y3/1) ややしまる
④にぶい橙色シルト(5YR6/4) 被熱により変色 かまどの一部か?
⑤黒褐色シルト(2.5Y3/1) ややしまる
⑥黒色シルト(10YR2/1) 灰白色シルトブロック状に含む

0　2m

図62　第2遺構面　SI493（S＝1：50）

竪穴建物（ＳＩ４９４）　〔図63・64　図版26・27・28・42・43・44・47・48〕

位　　置　調査区東側、竪穴建物・掘立柱建物が複数切り合う場所にある。

重複関係　埋没後、東西方向の素掘小溝が数条掘削される。

規模と構造　南北辺3.9m、東西辺は3.8m、平面積は約15.458㎡を測る。平面形態は、ほぼ正方形に近い形状である。掘り方は地山シルト層6層まで到達しており、検出面からの深さは30～45cm程度である。古代包含層2層除去後に5層上面で検出されたが、覆土内遺物と包含層遺物が接合することや覆土が2層に近似する状況から2層中からの掘り込みと考えられる。建物方位はほぼ磁北をとる。

貼り床は②層下面で確認でき、床面中央部が硬化していた。硬化範囲は広く、床面の大半を占める。床に対する圧力が少なかったためか、南西、南東、北東、北西の各隅が三角形状に非硬化であった。特に南西隅は須恵器杯2点が床に据え置かれた状態で出土しており、硬化範囲との空間使用の差異があるのかも知れない。

地山の凹凸　貼り床を除去すると地山の凹凸を検出した。中央部分が高く平坦で、周囲は壁から1m程度の幅で10～15cm深く掘削し鋤き込み痕が激しい。写真（図版28）で見るとよくわかるが、明らかに意識して掘り分けていたと認められる。竪穴建物の中でもっとも特徴的な掘り方を示している。建物造成方法を考える上で示唆的な資料である。

建物の入口は特定できなかった。

柱　　穴　柱穴と思われるピットは、床面中央のP2・P4である。②層下面の床面で検出され、貼り床造成後に柱穴が掘削されている。柱規模は小さいが、柱掘り方は柱を据え置くに充分な形状をしており、柱建ち構造は2本柱と考えられる。

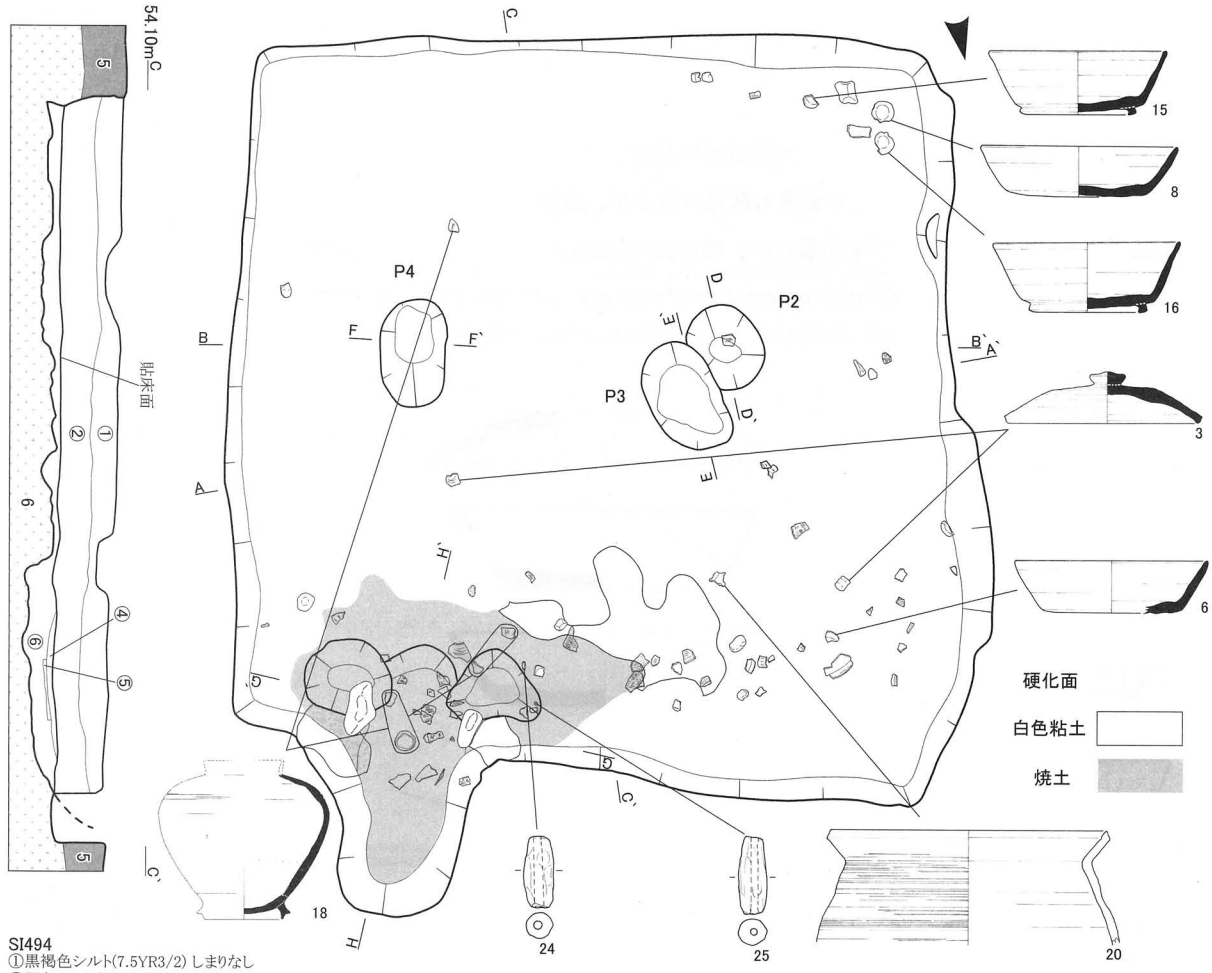
カ　マ　ド　カマドは竪穴建物の中でもっとも良好な状態で検出した。北東隅で袖石が2基良好に残存しており、煙出しは北壁から北に約90cm延びる。袖石は直立した状態で検出され、元位置を保っていると考えられる。袖石と壁の間に袖構築材の白色粘土がある。袖石は周囲より低く掘り窪められた位置に設置される。焼土はカマド全体に広がっていた。特記すべきは両袖石の中間位置に、短頸壺（図64，18）の底部が残っていたことである。底部は体部が打ち欠かれ、内面を上にした状態で焼土・炭化物層の上面で検出された。煮炊具でない須恵器が人為的に打ち欠いた形状で袖石間中央に置かれた状況から、カマド廃棄の何らかの行為を推測させる。SI491と同様にカマドから炭化米が出土している（第4章1，p193）。

煙　出　し

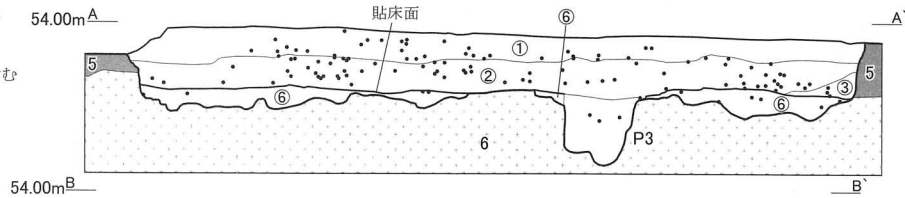
短頸壺底部

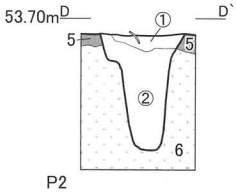
廃棄行為

遺　　物　遺物はカマド内部および周辺を中心に出土した。南西隅床面の3～5cm上に須恵器杯（4・16）が据え置かれたように出土した。垂木の棚から転落遺棄した可能性がある。1～3は須恵器杯蓋である。1は口縁端部を内側に折り返し丸く収める。中心部を除く内面に降灰しており、内面を上に向け焼成している。2は天井部外面に箆記号がある。3は宝珠形つまみが付き、口縁端部はわずかに垂下し、外面に面を造り出す。径高指数は27.7を測り、やや山笠形となる。4～17は杯である。4～6、8・9は無台杯（杯A）であり、体部が開き気味で立ち上がる傾向にある。外傾度は4・8が55°、5が60°である。ほぼすべて使用のためか器面が滑らかであり、5・6で顕著である。10～12は杯体部破片であり、高台の有無は不明。13は大型の有台杯体部（杯BⅡ）と思われる。器壁が非常に薄く、口縁端部が内に向く。

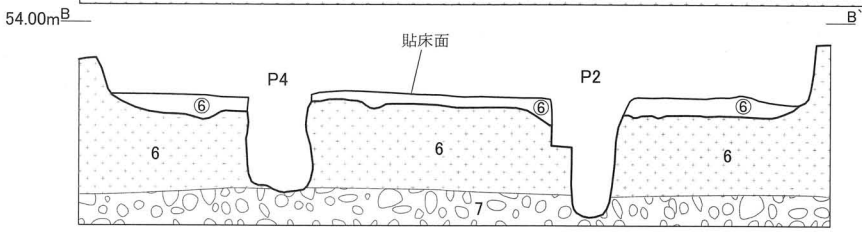


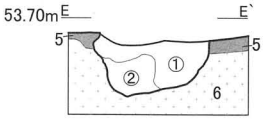
SI494
①黒褐色シルト(7.5YR3/2) しまりなし
②黒色シルト(7.5YR2/1) しまりなし
　①との層界は漸変で明瞭ではない
③黒褐色シルト(10YR3/1)
　西側の一部にしか認められない
④橙色シルト(5YR6/6) 炭化物微量含む
⑤灰黄色シルト(2.5Y7/2)
　白色シルト やや粘性あり
⑥黒褐色シルト(2.5Y3/1)
　しまりあり 6層微量含む



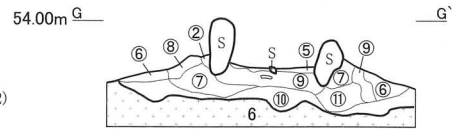


P2
①黒褐色シルト(10YR2/2)
②黒褐色シルト(10YR2/2)
　6層ブロック状に含む

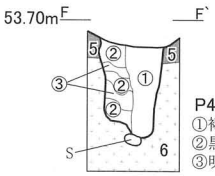




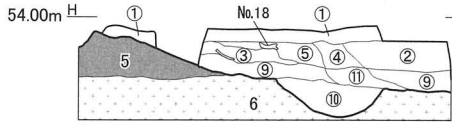
P3
①黒褐色シルト(10YR2/2)
　黄褐色ブロック状に含む
②灰黄褐色シルト(10YR5/2)
　6層?ブロック状に含む



SI494かまど
①にぶい赤褐色シルト(5YR5/3)
　炭化物を少量含む焼土
②褐灰色シルト(10YR4/1)
　③少量含む
③橙色粘質土(5YR6/6)
　焼土+炭化物少量含む
④灰褐色シルト(7.5YR4/2) しまりなし
⑤黒褐色シルト(2.5Y3/1)
　しまりあり 6層微量含む
⑥褐灰色シルト(10YR4/1) ②少量含む
⑦黄灰色シルト(2.5Y6/1)
　かまど構築時の貼り粘土か



P4
①褐灰色シルト(10YR5/1) しまりなし
②黒褐色シルト(10YR2/2) 6層ブロック状に含む
③明黄褐色シルト(2.5Y6/6) 6層の二次堆積層



⑧灰白色シルト(2.5Y8/2) ③と同一の可能性もあるが③より明るい
⑨灰褐色シルト(5YR5/2) 焼土を少量含む使用時の堆積か?
⑩黒褐色シルト(7.5YR3/1) 廃絶以降の堆積土(覆土?)微量の焼土含む
⑪黒褐色シルト(10YR3/1) 貼り床程のしまりなし③ブロック一部含む

0　2m

図63　第2遺構面　SI494（S＝1：50）

14～17は有台杯（杯ＢⅣ）で、口径12cm前後である。すべて高台が内端接地となる。18は短頸壺である。体部を打ち欠いた底部がカマド中央に据えられていた。頸部の括れ度が44、相対的深さ186であり、いわゆる狭口長胴壺に分類される[1)]。容量は3.5ℓである。外面肩部に２条の沈線が施される。19～23は煮炊具の土師器釜である。24・25は土錘である。無台杯の外傾化が進行する等新しい要素も散見されるが、遺物年代は総体的にⅣ２期（８世紀第４四半期後半）と考えられる。未掲載だが、残存長6.4cmを測る鉄製刀子の刃部片があった。

容量 3.5 ℓ
狭口長胴壺

1）頸部の括れ度＝頸部／体部最大径×100。相対的深さ＝器高／体部最大径×100。算出方法は、下記論文参考。
北野博司　1999「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究第８号』北陸古代土器研究会

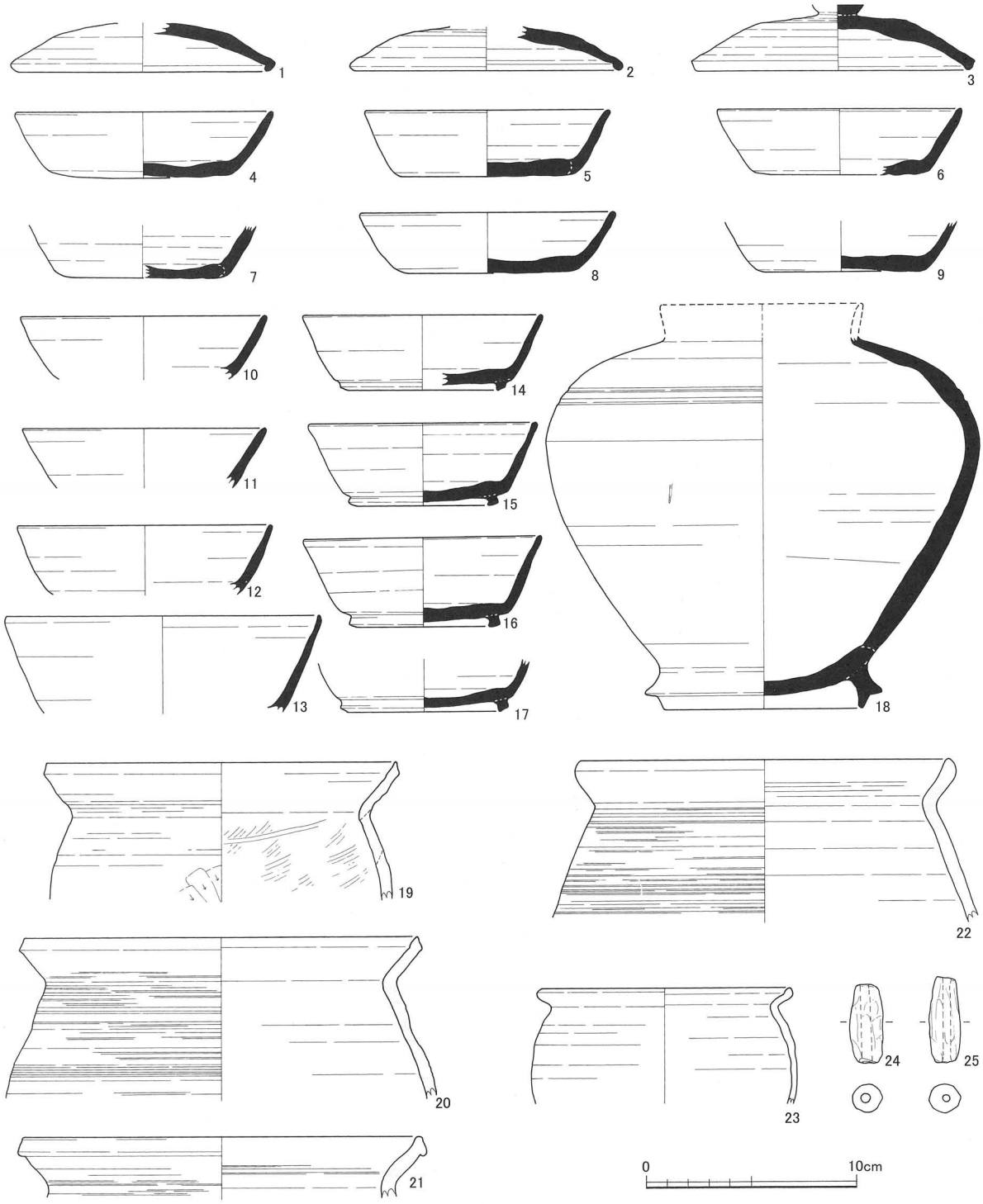


図64　SI494出土遺物実測図（S＝1：3）

竪穴建物（ＳＩ５５０）　〔図65・66　図版29・48〕

位　　置　調査区西側、他の建物遺構と離れた場所にある。西側全体は遺構が希薄だが、SI550は西側中央南の土坑・ピットが集中する位置にある。

重複関係　重複関係にある遺構はない。

規模と構造　当初はSI97に類する小規模竪穴建物として調査を進めた。竪穴状部分で建物が完結するとみて完掘後、周辺ピット群の検出段階で竪穴を囲むようにピットが配置していることを認識した。本遺跡内において竪穴外柱をもつ竪穴建物が未検出であり、富山県内での検出例があまりないことから調査員全員の念頭になく、充分な情報を記録することができなかった。不運な事にこの部分は重機による表土掘削時に掘り過ぎてしまい、包含層・覆土が削平された場所でもある。今後の調査の課題としたい。　**小規模竪穴建物**

竪穴部分の規模は南北辺2.4m、東西辺は2.5mであり、平面積は5.74㎡である。竪穴外柱を含む規模は、南北辺3.4m、東西辺3.8m、平面積が11.93㎡である。建物方位はほぼ磁北をとる。竪穴外柱穴を伴う竪穴建物については、桐生直彦の研究を参考にした[1]。SI550は主柱穴と呼ぶような柱穴はなく、規模は並列である。内傾する柱穴がないので、「壁立式」に分類される。柱配置は、竪穴部分を挟んで対応する辺の柱間が均等であるので「柱間整合タイプ」である。「竪穴外屋内空間」と呼ばれる「竪穴壁上端と竪穴外柱によって囲まれた竪穴外壁までの間の平坦面」は、30～70cm程度と狭く、「竪穴外屋内空間Ｓ類」にあたる。　**竪穴外柱**　**壁立式**　**竪穴外屋内空間**

SI550は平面積が13㎡であり、本遺跡検出の竪穴建物の平均値に近い。検討する材料も少ないので憶測の域を出ないが、壁立式であるので壁は竪穴建物の壁と同じ空間的意味を持つ可能性がある。上屋構造の違いはあるだろうが、建物の占有面積に何らかの意味があるように思われる。遺物の帰属時期は不明であるが、周辺遺構の年代や包含層を考慮し、８世紀後半から９世紀前半の年代を与えたい。

柱　　穴　竪穴部分の周囲に10基の柱穴と思われるピットを検出した。先述したように竪穴部分を完掘した後に周囲を検出したところ、柱穴と思しきピットの並びを確認したので、竪穴部分とピットの併存関係は把握できていないことを断っておく。竪穴部分の周囲に同規模のピットが規則的に並ぶため、一連の遺構と認定したのである。柱穴はそれぞれ竪穴部分を挟んで対応する位置にある。SP587－SP642、SP590－SP644、SP575－SP645、SP641－SP646、SP640－SP647という具合である。それぞれの柱穴は非常に小さく、径20～40cm程度である。遺構深度が検出面からかなり浅いが、過掘削のためである。

カ　マ　ド　カマドをはじめ明確な燃焼施設は検出されなかったが、竪穴部分中央のP1から若干の焼土が検出された。焼土が堆積していたが、壁に被熱痕は認められなかったのでP1内で燃焼した形跡はない。　**Ｐ１焼土**

遺　　物　竪穴部分から１点だけ出土した。焼成良好の不明土器の口縁部である。内外面とも強い撫でで仕上げられる。胎土がやや密であり、器種の見当がつかないため、不明土器とした。時期特定はできない。

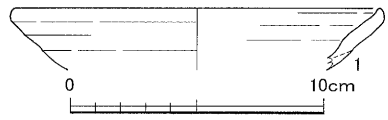


図65　SI550出土遺物実測図（S＝1：3）

1）桐生直彦　2005「Ⅴ.竪穴外柱穴をもつ竪穴建物跡の様相」『竈をもつ竪穴建物跡の研究』六一書房

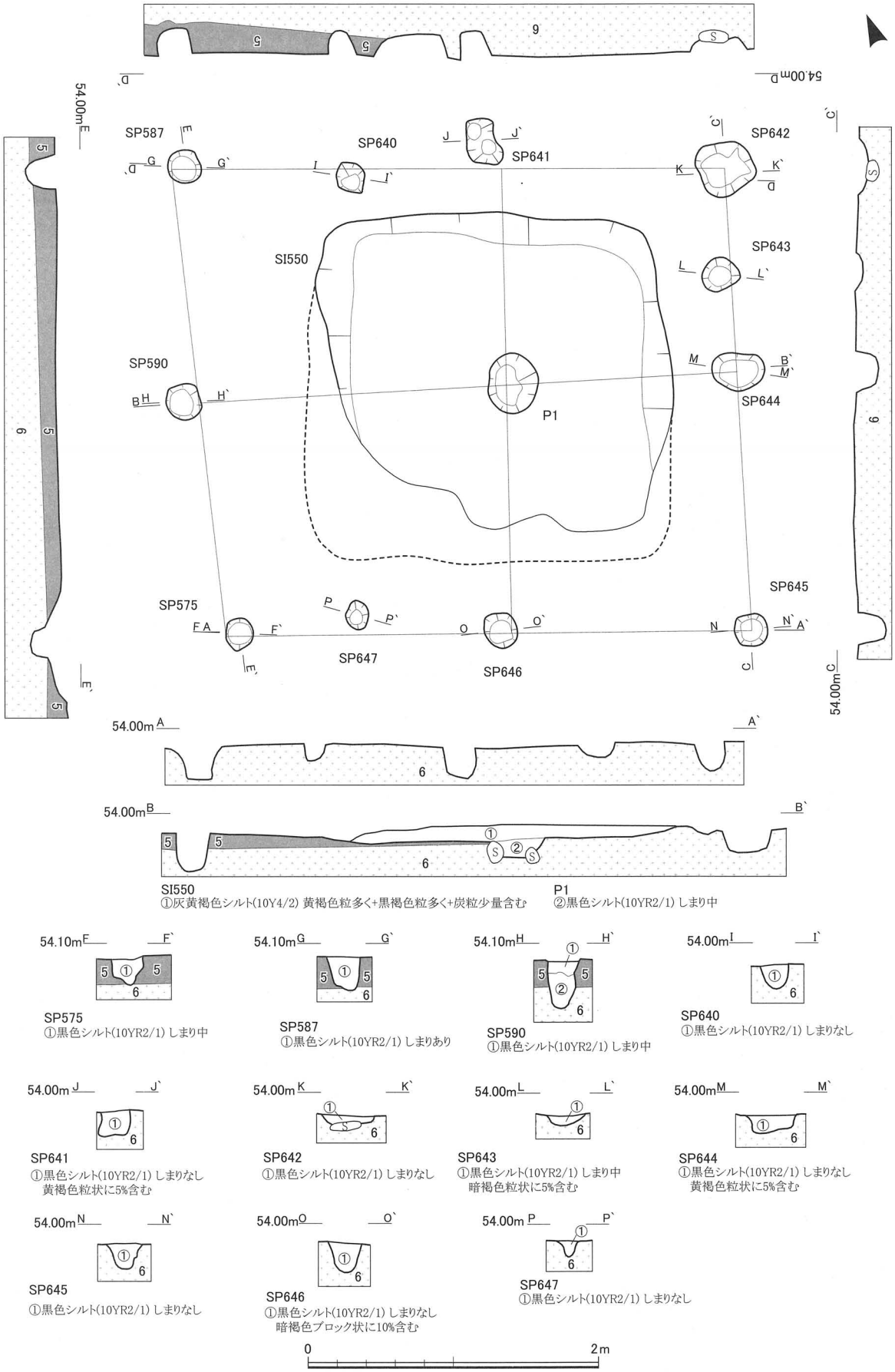


図66　第2遺構面　SI550（S＝1：40）

竪穴建物（ＳＩ６００）　〔図67・68　図版30・48〕

位　　置　調査区西側、建物遺構だけでなく遺構自体が希薄な場所にある。

重複関係　重複関係にある遺構はない。

規模と構造　南北辺4.5m、東西辺4.1m、平面積は17.114㎡を測る。平面形態は、南北が長方形を呈する。掘り方は地山シルト層６層まで到達しており、検出面からの深さは15～35cm程度である。古代包含層２層除去後に５層上面で検出されたが、覆土が２層に近似する状況から２層中からの掘り込みと考えられる。SB02を除く建物は総じて主軸を南北方位もしくは磁北からやや東に振った位置にあるが、本遺構だけ磁北から西に振った建物方位をとる。　**主軸方位**

貼り床は確認できなかった。建物の入口は特定できなかった。

図化していないが、覆土と造成基層５層の層界から打製石斧（図102，138）が出土している。

柱　　穴　柱穴と思われるピットは６基あり、組み合わせは２通りある。P4・P7・P12・P15とP5・P8・P12・P15であり、４本柱を想定している。

カ マ ド　明確にカマドを検出できなかったが、南隅に焼土が広がっていた。その北側に煮炊具の土師器釜類の破片が散乱している。袖石に似た被熱した礫が竪穴外にあり、カマドは姿を留めない程破却された可能性がある。　**焼土の広がり**

遺　　物　遺物は焼土範囲北側の覆土内を中心に出土した。１は須恵器の杯類である。２は無台杯（杯Ａ）で、体部がやや開き気味である。外傾度55°、径高指数は26.7を測る。３は貯蔵用甕の口縁部である。４・５は土師器の短胴釜である。煮炊具のため、頸部から口縁部に煤が付着する。外面は体部下半に削り、内面は横撫でで数条の稜ができる。６は長胴釜で、外面は格子目状工具、内面は同心円状工具によるタタキで仕上げる。　**横撫で調整**

遺物年代は、Ｖ１期（９世紀第１四半期）に帰属すると考えられる。

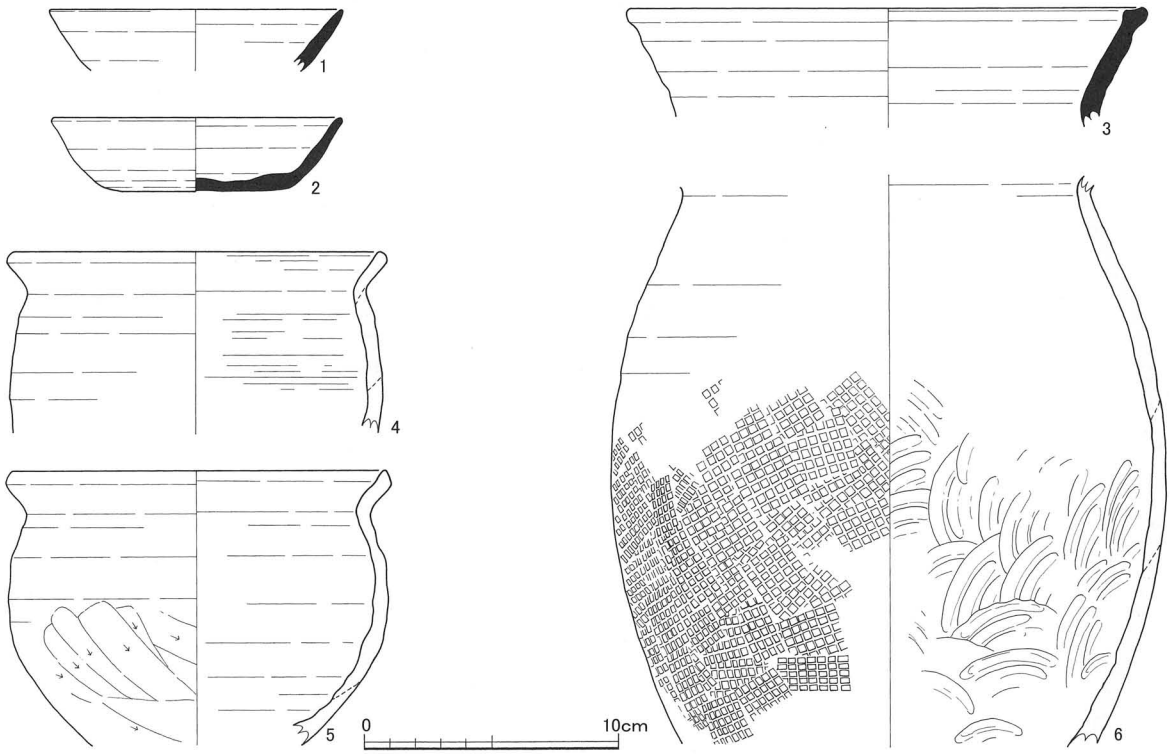
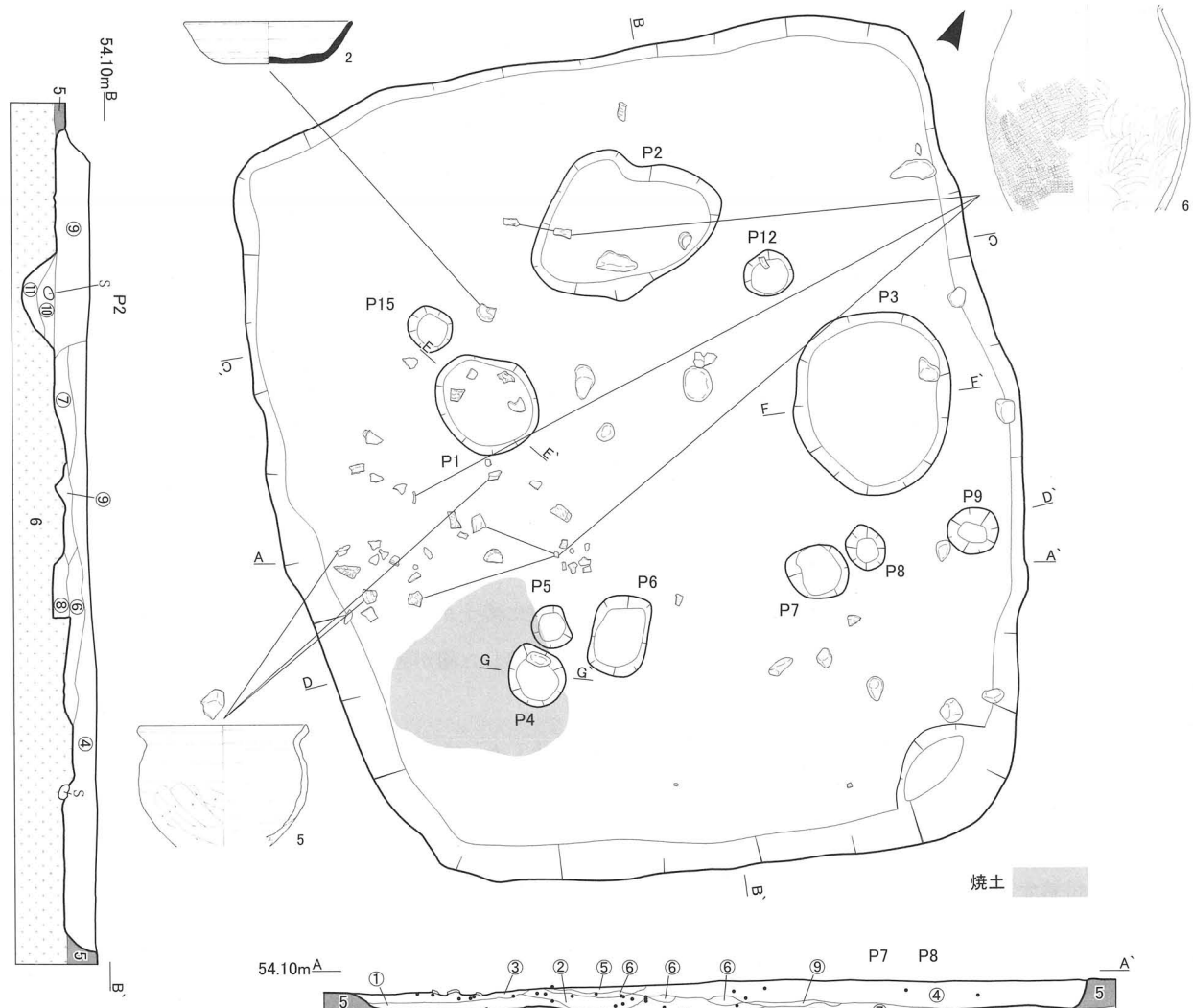


図67　SI600出土遺物実測図（S＝1：3）

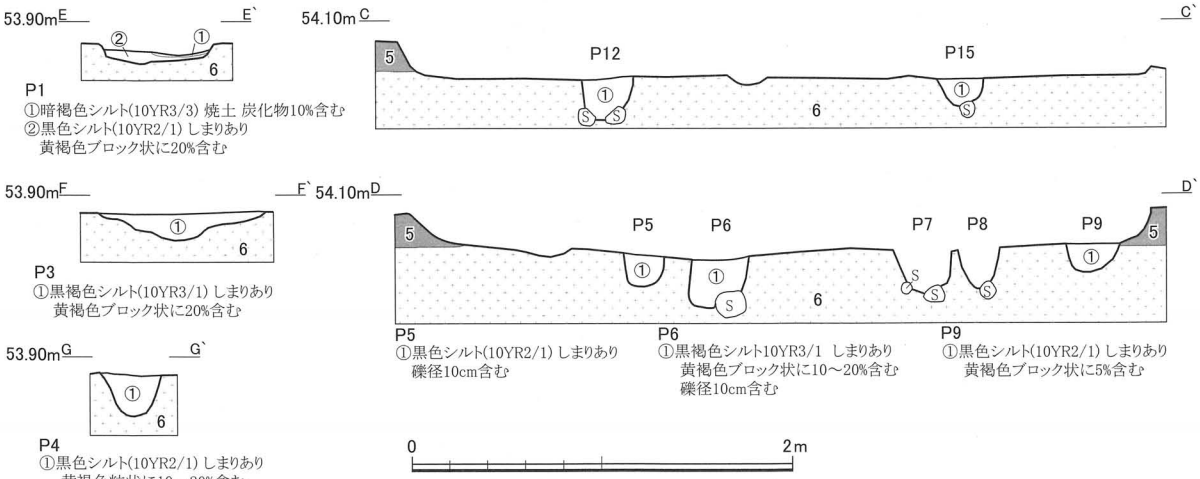


SI600
①暗赤褐色シルト(5YR3/2) しまりあり 焼土 炭化物5～10%含む
②暗赤褐色シルト(5YR3/4) しまりあり 焼土 炭化物10%含む
③黒褐色シルト(5YR3/1) しまりあり 焼土 炭化物2～5%含む
④黒褐色シルト(10YR3/1) しまりあり 黄褐色粒状に1～5%含む
⑤暗黒褐色シルト(10YR3/3) しまりあり 黄褐色粒状に10～20%含む
⑥黄褐色シルト(10YR5/6) しまり強 黒褐色粒状に20～30%含む
⑦黒色シルト(10YR2/1) しまりあり 黄褐色粒状に1～5%含む
⑧黒褐色シルト(5YR2/1) しまり強 焼土 炭化物5%含む
暗赤褐色ブロック状に20～30%+黄褐色粒状に5～10%含む
⑨暗褐色シルト(10YR3/3) しまりあり 焼土 炭化物1～3%+暗赤褐色ブロック状に10～20%含む

P2
⑩黒色シルト(10YR2/1) しまりあり
⑪黒色シルト(10YR2/1) しまりあり 黄褐色ブロック状に20%含む

P7
⑫黒色シルト(10YR2/1) しまり弱 黄褐色粒状に10%含む

P8
⑬黒色シルト(10YR2/1) しまりあり 黄褐色粒状に5%含む



P1
①暗褐色シルト(10YR3/3) 焼土 炭化物10%含む
②黒色シルト(10YR2/1) しまりあり
黄褐色ブロック状に20%含む

P3
①黒褐色シルト(10YR3/1) しまりあり
黄褐色ブロック状に20%含む

P4
①黒色シルト(10YR2/1) しまりあり
黄褐色粒状に10～20%含む

P5
①黒色シルト(10YR2/1) しまりあり
礫径10cm含む

P6
①黒褐色シルト10YR3/1 しまりあり
黄褐色ブロック状に10～20%含む
礫径10cm含む

P9
①黒色シルト(10YR2/1) しまりあり
黄褐色ブロック状に5%含む

0　2m

図68　第2遺構面　SI600（S＝1：40）